

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Analysis of the Mayan Glyphs : Part II, Palenque

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004334

マヤ文字の分析 II

—パレンケ—

八杉佳穂*

Analysis of the Mayan Glyphs: Part II, Palenque

Yoshiho YASUGI

Palenque texts have been studied extensively since the “Round Table” was held at Palenque, in 1973. We can now provide an outline of the dynastic history of Palenque. For example, the Lord Shield Pacal was born in 9.8.9.13.0 (A.D. 603), ascended the throne in 9.9.2.4.8 (A.D. 615), and died in 9.12.11.5.18 (A.D. 683). His parents were Kan Bahlum Moo and Zac Kuk, and his children Chan Bahlum and Kan Xul II. However many other matters which remain to be deciphered are described in the texts.

In this paper I have followed the same methodology and format as used in my earlier paper on the Naranjo texts [YASUGI 1986]. That is, all readable dates were first extracted from available texts and arranged chronologically. Calendrical glyphs were then examined for variations and stylistic change.

Many new glyphs were invented in Palenque but stylistic change is not clearly discernible, since the period of their utilization was short. But texts provide good examples of glyphic interchangeability, and many synonymous glyphs are used.

One affix (T 679), which functions like a preposition, is attached to a glyph in a glyph block. It does not stand alone, but glyphs to which the affix is attached occur by themselves. According to the definition used here, a glyph is composed of grapheme(s) and occupies a glyph block with a squared appearance. Many graphemes have either a geometric or a human form, and are known as the “normal form” and “head variant” respectively. They are variant forms of the same value.

* 国立民族学博物館第4研究部

Generally, there is one glyph in one glyph block. Sometimes, however, one glyph block is composed of two or more glyphs. Main signs and affixes are defined according to their size and position within glyphs. Main signs are the largest and central graphemes and affixes are joined to the main sign. In other words, a glyph is composed of main sign±affix(es).

Maya writing is classified typologically as logosyllabic, because there are logograms and phonograms, as in the *Pacal* glyph (Fig. 28). But if a glyph is defined as main sign±affixes, it can be said that Maya glyphs are not composed of a fixed set, but join grammatical affix(es) when occasion demands. For example, T 679 functions like a preposition and can be attached to a main sign. Thus, phraseograms, which express a phrase in one glyph, exist in the Mayan writing system.

In chapter IV those clauses and phrases in which names of rulers and Gods appear are analyzed. In chapter V other glyphs not treated in chapter IV, such as “birth glyphs”, “accession glyphs”, “number four and sky glyphs”, are discussed.

I. はじめに	(viii) Kan Xul I (Hok I)
II. 分析の範囲	(ix) Cauac II (Chaac II/Chaacal II)
III. 暦の文字	(x) Bahlum (Chan Bahlum I)
(i) イニシャルシリーズの文字	(xi) Kan Ik
(ii) カレンダーラウンドの文字	(xii) Ahc Kan
(iii) ディスタンスナンバーの文字	(xiii) Pacal I
(iv) 期間の完了を表わす文字	(xiv) Zac Kuk II
(v) 819日暦	(xv) Kan Bahlum Moo
(vi) マヤ暦元に関する節	(xvi) Pacal (Pacal II)
IV. 王の履歴と名前の文字	(xvii) Ah Po Hel
(i) 神々の文字	(xviii) Chan Bahlum
(ii) Zac Kuk I	(xix) Kan Xul II (Hok II)
(iii) Kiiix Chan	(xx) Chaac (Cauac III/Chaacal III)
(iv) Kuk I	(xxi) Chac Zutz'
(v) Octopus	(xxii) Kuk II
(vi) Moon Cauac	V. 文字の交替
(vii) Cauac I (Chaac I/Chaacal I)	VI. おわりに

I. はじめに

パレンケはメキシコのチアパス州のシエラ・デ・パレンケの北斜面に位置する。北緯17度15分、西経92度05分にあり、マヤ文化領域では西周辺部に属す。

Rands の土器の分析による時代区分は次のようになり、パレンケの歴史は、古典期前期の初期または原古典期ころまでさかのぼることができる [Rands 1974a, b]。

Picota (古典期前期の前半, 原古典期にまでさかのぼる)

Motiepa (古典期前期の後半)

Otolum (600-700年)

Murcielago (700-770年)

Balunte (770-850年)

しかしパレンケが栄えるようになるのは、古典期後期に入ってからであり、土器による時代区分の Otolum, Murcielago 相がその時代にあたる。Balunte 相の前半に衰亡がはじまり、その後半は貴族層の崩壊、パレンケの放棄の時代となるが、中心部は820年ころまでには完全に放棄されてしまう。

文字も古典期後期にはいつてから獲得するにすぎない。Pacal 王 (603~683年), Chan Bahlum (635~702年) 王の時が全盛期であり、碑文のほとんどがこの時期に作られている。その後も碑は刻まれ続けるが、783年 (「96文字の碑文」の奉納年) 以後は、碑文はなくなる。最後の日付は土器に刻まれた799年 (9. 18. 9. 4. 4 7Kan 17 Muan) であり [Ruz 1952a: fig. 14, lam. 27], 8世紀の後半には衰退をはじめてしまうことが文字資料からも裏付けられる。

パレンケは、栄えた期間は短いが、文字資料の面からみると、量はかなり豊富であり、文字の分析にはたいへんおもしろい遺跡である。短い期間に多量の文字が描かれているため、文字の変化、とくに文字の交替例の研究に格好の資料をもつ遺跡といつてよい。

ここで利用するテキストは次のものが主体になる(表1)。これらがテキストの文字量としてはかなり多いもの、または少ないが重要なものであり、本論の対象とする文字であるが、このほかにも、保存庫 (Bodega) や各地の博物館に保存されている断片的な文字資料がある。

本稿でも、『マヤ文字の分析 I』にならって、まずそれぞれのテキストに刻まれている日付を取り出すことにする [八杉 1986]。そしてそれらの文字について考察する。つぎに、ほぼ同定の終わっているパレンケの王族の名の文字群を、それが生起す

表1 テキスト名と略号

創造板 (Creation Relief/Lápidas de Creación)。	CREATION
ダンバートンオークスのパネル2 (Dumbarton Oaks Panel 2)。	DO
階段碑文 (Hieroglyphic stairway/Escalera jeroglífica)。	HS
忘れられた神殿 (Olvidado Temple/Templo Olvidado) のスタッコ文字。	OLVIDADO
叫ぶ人 (Tablet of the Orator)。	ORATOR
楕円板 (Oval tablet/Lápidas oval de la casa E)。	OVAL
パサデナ板 (Pasadena Tablet)。	PASADENA
宮殿板 (Palace Tablet/Tablero del Palacio, Ruz 1)。	PT
碑文の神殿の墓棺蓋 (Sarcophagus lid/Lápidas del sarcófago)。	SARCO
墓棺壁 (side walls)。	SARCOwall
書く人 (Tablet of the Scribe)。	SCRIBE
奴隷のタブレット (Tablet of Slaves/Tablero de los Esclavos, Ruz 2)。	SL
十字の神殿 (Temple of the Cross/Templo de la cruz) のメインパネル。	TC
十字の神殿の階段脇 (alfarda) 碑文。	TCalf.
十字の神殿のメインパネルの両側にあるパネル。	TCside
葉の十字の神殿 (Temple of the Foliated Cross/Templo de la cruz foliada) のメインパネル。	TFC
葉の十字の神殿の階段脇 (alfarda) 碑文。	TFCalf.
葉の十字の神殿のメインパネルの両側にあるパネル。	TFCside
葉の十字の神殿の石板 (lápidas)	TFC lapida
碑文の神殿 (Temple of the Inscriptions/Templo de las Inscripciones) のパネル。	TI
東パネル (TIE), 中央パネル (TIM), 西パネル (TIW) の3つにわけられる。	
宮殿の椅子 (Palace Throne)。	THRONE
太陽の神殿 (Temple of the Sun/Templo del Sol) のメインパネル。	TS
太陽の神殿の階段脇 (alfarda) 碑文。	TSalf.
太陽の神殿のメインパネルの両側にあるパネル。	TSside
神殿14号 (Temple XIV/Templo XIV) のパネル。	TXIV
神殿18号 (Temple XVIII/Templo XVIII) のパネル。	TXVIII
神殿21号の石板 (Tablet of Temple XXI)。	TXXI
96文字碑文 (Tablet of the 96Glyphs/Tablero o lápidas de los 96 glifos)。	96G

る日付とともに取り出すことにする。しかし本稿ではテキストすべてを日付順に並べ
 ることはせず、同似節をとりだし、それを比較のために線形に並べかえることにし、
 それらをもとに考察する。テキストを日付順に線形に並べるとは、王朝の歴史を分
 析する上でかなり有効な方法であり、それを『マヤ文字の分析 I』では採用したのであ
 るが、パレンケの場合、王朝の歴史の大枠は、一部問題があるものの、Berlin や
 Schele, Mathews, Lounsbury らの研究によりほぼ解明されているので、ここでは
 すべてのテキストを日付順に線形に並べるとはせず、必要な部分を取りあげること
 にし、同似節を中心に文字の使われ方に焦点を絞ることにする。

パレンケの碑文の研究は前世紀末の Maudslay にはじまるといってよい。それ以

前にも del Rio, Stephens と Catherwood, Waldeck などがパレンケを訪れ、記述を残しているが、Maudslay がはじめてそれ以後の研究に役立つ資料を残したのである。前世紀から今世紀初頭にかけて、はやくもそれを利用して Goodman や Morley などが日付の文字の解読を行なった。それ以後月シリーズの文字の解釈や 819 日暦の発見など、暦に関する文字の理解は深まったが、暦以外の文字については 1950 年代末までなんら進捗がなかった。1958 年に Berlin がパレンケを含む各都市固有の文字である紋章文字を発見し、1959 年には王達の名を表わす文字を正しく同定し、パレンケの碑文の解釈は新しい時代をむかえることになった。しかし Berlin の『十字の神殿』のテキストの日付の解釈にみられるように [BERLIN 1965], 正しい解釈はなかなか得られず、1970 年初頭までは断片的な理解にとどまった。パレンケの碑文の総合的な研究が行なわれるようになった 1973 年の円卓会議以後、王朝の理解は急速に深まり、ほぼすべての登場人物の履歴を描きだすことができるようになってきた。しかしまだたくさん文字がまったく理解できないままに残っている。それは歴史的な事柄ではなく、宗教的、儀式的なことが書かれているからと考えられる。

II. 分析の範囲

まずテキストの概要を知るために、文字がどのくらいあるのか、テキストがしるしている日付の範囲はどのようなひろがりをもつのかをしるす (表 2)。

文字または文字群がおさまっている文字ますの数は、数えることは簡単である。とはいえ、テキストが一部欠けている場合、問題が生じてくる。たとえば、テキストの中間が一部欠けているとき、その欠けている部分の文字ますは、前後左右の文字ますの位置や大きさから補うことが可能である。しかし上半分が欠けていたり、まわりの環境が不明であると、復元は難しい。そこで、あきらかに復元できるものは、数えることにする。そして欠けている部分があることは確かであるが、いくつあるのか正確にわからない場合には、+をつけることにした。

文字ますの数は数えることができるが、文字の数については、正確に述べることは不可能である。第一に、テキストは全部が判読可能ではない。必ずといっていいほど判読不能な個所がある。判読不能な個所の文字ますは、テキストの形から復元可能であるが、そこにいくつ文字があるかはわからない。ひとつの文字ますに 2 つ以上の文字がおさまることはよくあることであり、文字ます数から文字数を導きだすことはできないからである。第二に、何を文字というのか解決がついていないことも、文字の

表2 文 字 数

	文字ます 数	文 字 数	判読文字 数	暦の文字 数	CR 文字 数
HS	24	72	60	19	8
PASADENA	10	13	13	1	1
OVAL	7	7	7	0	0
SARCO	54	73	73	29	26
SARCOwall	20	20	20	0	0
TI (E)	237	239+	205	75	28
(M)	140	141	141	8	6
(W)	240	276	264	104	48
TC	228(+4)	240	239	113	45
TC alfarda	24	25	25	9	4
TC side	19	20	20	0	0
TFC	155(+7)	164	164	54	19
TFC alfarda	24	25	25	9	4
TFC Lapida	24+	32+	32	18	6
TFC side	9+	9+	7	0	0
TS	146	149	148	59	24
TS alfarda	10[24]	10	10	[9]	2[+2]
TS side	31+	31+	13	0	0
TXIV	55+	61+	59	17	10
DO	37	37	37	10	6
THRONE	28+	33	22	11	6
PT	262	269	263	98(+2)	30
TXVIII	70[75]	87+	81	43	10
ORATOR	9+	11+	11	0	0
TXXI	8	8	7	0	0
SLAVE	40	76+	76	28	22
SCRIBE	8+	8+	8	0	0
96G	96	106	106	42	14
計	2015	2243	2137	747	319

数を数えることを難しくしている。

これまで文字ますに収まっているものを文字と考えてきた。つまり文字とは主字と接字が密接に結合しているものとみなしてきた。もちろん文字ますには1つ以上の文字が収まることがある。1つの文字ますにいくつ文字が収まっているかは、文字=主字±接字と定式化することができるので、それをもとに、ほぼ判読可能である。しかし判定がむづかしい場合がある。例をあげてみよう。図1の1は即位を表わす文字のうちのひとつである。1a, 1bとも、2つのかたまりからなり、それぞれ1つずつ文字ますに収まっている。それゆえ2つの文字とみる。しかし1a, 1bの違いは、1aの最初の

文字の左にみられる接字がついているかないかだけである。ただし各構成要素の位置関係は異なるが、主字の左と上、右と下の位置は同価なので、この場合同一文字とみることにする。図 1a についているこの接字 T 679 は、パレンケのテキストを解釈する際重要な役割をはたす接字であるので、少しくわしくふれておきたい。この接字 T 679 は Posterior Date Indicator (PDI) とよばれる文字の接字としてみとめられてきた。たとえば『十字の神殿 (TC)』の P17 にそれはある。それが生起し

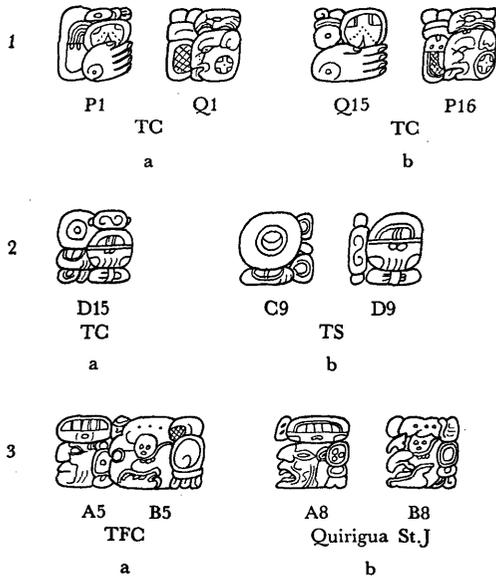


図1 文字の書き方

ている個所は、2Caban 10Xul (CR)-6.3 (DN) —即位を表わす節— T 679.738:59 (PDI)-8Ahau 13Ceh (CR) となっている。2Caban 10Xul に 6.3 を加えると、8Ahau 13Ceh になる。

(8. 19. 19. 11. 17) 2Caban 10Xul
 6. 3 (DN)
 (9. 0. 0. 0. 0) 8Ahau 13Ceh

2Caban 10Xul は前の日で、8Ahau 13Ceh は後の日であり、T 679.738:59 は 8Ahau 13Ceh のすぐ前に生起しているので、8Ahau 13Ceh があとの日であることを表わす文字とすることができる。しかし同時に、T 679.738:59 は前の日に DN を加え、後の日を導く文字ということもできる。この文字と逆の働きをする文字、すなわち、Anterior Date Indicator (ADI) は、通常 T 738:59.126 または T 513:59.126 という構成をした文字である。これはたとえば『神殿18号 (TXVIII)』の D9 に生起する。

(9. 14. 10. 4. 2 9Ik 5Kayab)
 7. 14. 9. 12. 0 (DN) D7-C9
 T 513:59.126 D9
 (2. 0. 0. 10. 2) 9Ik 0Zac C10-D10

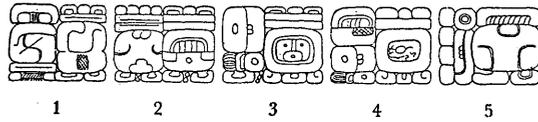


図2 コパンの階段碑文の文字

この2つの文字の意味を考えるうえで非常にわかりやすく書かれているものが、コパン (Copan) の階段碑文に生起している [MORLEY 1920: fig. 40]。この2つの文字は 3a と 4a に生起している。この部分の日付の関係を数式で表わすと、次のようになる。

$$\begin{array}{rcl}
 (9.14.15.0.0) & 11\text{Ahau } (18\text{Zac}) & 3b \\
 \hline
 & 11.14.6 & 1b-2b \\
 (9.15.6.14.6) & 6\text{Cimi } 4\text{Zec} & 4b-5
 \end{array}$$

T 59 は前置詞の ti とされており、それを考慮にいれてこの部分を訳すと、「11Ahau から(数えて) 6Cimi 4Zec まで(数えると) 11.14.6, または 11.14.6 が 11Ahau から 6Cimi 4Zec まで」となる。

T 679 は Landa が16世紀の中葉に残したアルファベットの i とされている。チョル語の3人称の人称接辞は i であり、ユカテク語の3人称の人称接辞は u であるところから、それはユカテク語の人称接辞の u (T 1) のかわりをするという意見がある [MATHEWS & SCHELE 1974: 65]。しかし構文を分析すると、その接字は「～まで」という意味であるとみることができる。そのようにみると、それが生起する構文はほぼすべて意味をとることができる。たとえば TC の S13 から S17 の文は、「Kan Xul I の誕生から即位まで 1.19.6.16 で(即位の日は) 5Kan 12Kayab」と解釈できる。

例の 1a は、その T 679 がついて1つに文字ますに収まっているのである。マヤの言語は前置詞言語であり、前置詞のような働きをする文字素が存在し、それがすでに存在する文字に付加されても、また文字と呼ばなければならないものが形成されるということになる。

図1の2の場合、2a だけだと1文字と数えてしまいそうである。たまたまそれを2つの文字ますに分けて書いている例(2b)が他の場所にあるから、2つの文字に分けられることが確証できるにすぎない。こういう例がみつからない複雑な構成の文字であると、それを1文字と数えるか、それ以上の文字からなるか判断できない場合が生じる。

数と暦の文字の場合もそれぞれを1文字と見るか、2つを1つの文字とみるか、文字ますからは一定の答をひきだすことができない。ふつう1ますに数と暦の文字は収まっているが(図 1-3a)、それぞれ1ますに収まることもある(図 1-3b)からである。そこで何らかの基準をもうけなければならないが、本論では、数と暦の合体したものを1文字とみなすことにする。しかしこの場合など、文字というものを文字ますという物理的に区分されるものや主字±接字ということから定義することの無益さを教えている。しかし、文字ますに1つ以上のまとまりのある単位が収まるからには、文字についてなんらかの定義は必要である。そうすると、どうしても物理的に他と区別される一単位、それは主字±接字ということであるが、それを文字と考えざるを得ない。このように定義すると、マヤ文字は、いつも一定の構成素からなる文字ではなく、場合により文法的な接辞が文字の構成素になりうる文字ということになる。いいかえれば、マヤ文字体系は表句文字が存在する体系であるということである。これが『マヤ文字の分析II』までの文字に対する考えであり、さらに分析を進めることで、文字に対する見方や定義が変りうることをここに加え、ひとまず、文字についての考察はとめておきたい。

以上のように文字を考えたのであるが、テキストのすべてが理解できるわけではない。それゆえ、文字の認定がむづかしい場合があり、表2の文字数や判読文字数については正確ではないことを断わっておかなければならない。特に文字数は、判読不明な部分を含んでおり、正確さに欠ける。判読文字数も、文字への理解が深まると、これまで1文字としていたものが、2文字である場合がでてくるであろうし、また不明な部分であっても、明らかにそこに存在していなくてはならない文字がわかり、それを勘定に入れることができるようになる場合もでてくるであろう。それゆえこの数より増える可能性がある。CR文字数とは、暦に関する文字のうち、260日暦と365日暦の暦の文字数を表わすものであり、それらも含め、暦に関する文字の数をしるしたものが、暦の文字数の項である。なお鉤括弧は破損した部分も含めて数えた文字ますの数であり、丸括弧の数は場面上にある文字を加えたものである。

次にテキストの刻まれた年代をしるす。刻まれた年代については、テキストにある最終日付を奉納日と考える。マヤの碑文はほとんどの場合、区切りのいい日、すなわち、カトゥンまたはトゥンの終わりの日が生るされているが、パレンケの場合、必ずしもうまくいかない。たとえば墓石碑文など、死の日をしるせばそれでいいのであり、区切りのいいカトゥンの終わりの日をしるすことなど無駄であるものもあるし、またカトゥンの終わりを意識していないに違いない碑文もある。そこでテキストで読みと

表3 奉 納 日

テキスト	最終日付	王 名
HS	9. 11. 6. 16. 11	Pacal
SARCO	9. 12. 11. 5. 18	Pacal
TI	9. 13. 0. 0. 0	Pacal
OVAL		Pacal
OLVIDADO		Pacal
TC	9. 12. 18. 5. 16	Chan Bahlum
TFC	9. 13. 0. 0. 0	Chan Bahlum
TS	9. 12. 18. 5. 17	Chan Bahlum
TXIV	9. 11. 4. 13. 0?	Chan Bahlum
DO	9. 11. 18. 7. 7	Hok
TH	9. 13. 10. 6. 8	Hok
PT	9. 14. 8. 4. 15	Hok
TXVIII	9. 14. 10. 4. 2	Chaac
ORATOR		Chaac
TXXI		Chaac
SL	9. 15. 0. 0. 0	Chac Zutz'
SCRIBE		Chac Zutz'
96G	9. 17. 13. 0. 7	Kuk

れる最終日付に、碑文が捧げられた王の名、または碑文をこしらえた王の名をそえたものを以下にするすことにする。最終日付順になっていないのは、王の即位順を優先したことによる。また **TC**, **TFC**, **TS** は1つのまとまりのある神殿群であり、十字グループとよばれることがあるが、その十字グループと **TXIV** の順も日付順になっていない。それは十字グループは同時期のものであるので、**TC**, **TFC**, **TS** の順に並べたにすぎないこと、**TXIV** の正確な日付は不明であるので、十字グループのあとに置いたことによる。その他のテキストの奉納日は不明であるが、生起する文字からの王に属するものかほぼ判定することができる。なお線形になおした文字列の順は、できるかぎり日付順に並べることにするが、テキストが異なるときは、この奉納日順に並べることにする。

次にテキストの扱っている日付をしるす(付表1)。表中の*は解釈に問題のある個所をしめしている。それらについてはそれぞれのテキストを扱うときにとりあげることにする。それぞれの日付を年代順に並べ、対応する西暦をつけたものが付表2である。

簡単に各テキストの概要を説明しておく。**HS** は **Pacal** 王の誕生とその後の出来事を、**SARCO** は **Pacal** 王の誕生と死、**Pacal** 王以前の王の死んだ日をしるしている。**TI** の東パネル (**TIE**) は 9.4.0.0.0 から 9.10.0.0.0 までの **Pacal** 以前の王と

Pacal 王の即位がしるされている。中央パネル (TIM) は 9.11.0.0.0 から 9.12.0.0.0 までの間のことと Pacal 王と3体の神 (GI, GII, GIII) との関わり, 西パネル (TIW) は 9.12.0.0.0 から 9.13.0.0.0 までの流れの中に, Pacal の誕生, 即位, 死, 妻の Hel の死, 息子の Chan Bahlum の即位の他に, はるか過去や未来のことなどが刻まれている。TC の左半分はマヤ紀元前後の神のこと, 右半分は古き時代の王の誕生と即位の日が刻まれ, 中心部の画面上には, Chan Bahlum に重要な日々の出来事がしるされている。TFC は TC と同じく左半分は神々のことがしるされているが, 右半分ならびに中央部は, Chan Bahlum に重要な日々のことが書かれている。TS は TFC とほぼ同様な構成であるが, 内容は若干異なる。TXIV は Chan Bahlum がテキストに登場するが, 内容は歴史に関することではないので, 理解が十分にできない。DO は Pacal 夫妻に Kan Xul II が登場する。THRONE は Pacal, Chan Bahlum, Kan Xul II の即位が主題であるが, ほとんど判読不能である。PT は Kan Xul II のためのもので, Pacal, Chan Bahlum が登場する。TXVIII は Chaac の誕生とその即位が神話上の Zac Kuk の即位と関係づけられている。SL の主題は Chac Zutz' であり, その前の王 Pacal, Chan Bahlum, Kan Xul II の登場のあと, Chac Zutz' の誕生, 即位にその後の出来事がしるされている。96G は Kuk のもので, その前の王 Pacal, Kan Xul II, Chaac の即位などがしるされたあと, 彼の即位と 1Katun 記念, 彼の父 Chaac と母, 9.17.13.0.0 の記念などがしるされている。

Ⅲ. 暦 の 文 字

この章で扱う文字は (i) イニシャルシリーズ (IS) の文字群, (ii) カレンダーラウンド (CR) の文字群, すなわち260日暦と365日暦の文字群, (iii) ディスタンスナンバー (DN) の文字群, (iv) 期間の完了 (PE) を表わす文字群や, ある日を記念してそれからくぎりのいい年月がたったことをしるす文字群, (v) 819日暦, (vi) マヤ暦元の節についてである。(vi) 以外の文字群の構造や意味については [八杉 1982, 1986] で扱ったので, 省略する。

(i) イニシャルシリーズの文字

IS をしるしたものはパレンケでは HS, TIE, OLVIDADO, TC, TFC, TF-Clapida, TXVIII, PT にある。ただし碑文以外では, いわゆるイニシャルシリーズの壺と称されている壺 (IS Vase) にもしるされている。しかし IS 部分はこわれて

おり、断片がみられるだけである [Ruz 1952a: Fig. 14, Lam. XXVII]。また宮殿の A 棟 (House A) の入口と入口の間の壁 C (pier C) にも IS はあるが、損傷が激しいのでここでは省く。各テキストがしるしている内容は表 4 のようになる。ここで括弧は不明か欠けている部分を表わす。HS と TI は通常生起するいわゆる補助シリーズ (Supplementary series) を欠いている。OLVIDADO のテキストはスタッコーでつくられた文字がばらばらに出土したものであり、完全ではない。しかし出土した文字に Pacal 王の名を表わす文字があるところから、Pacal 王時代のものであると推測できる。TFClapida は前半部の期間を表わす文字群が欠けている。宮殿板

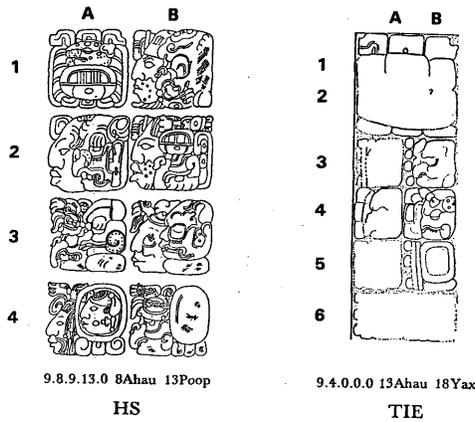


図 3-1(1)

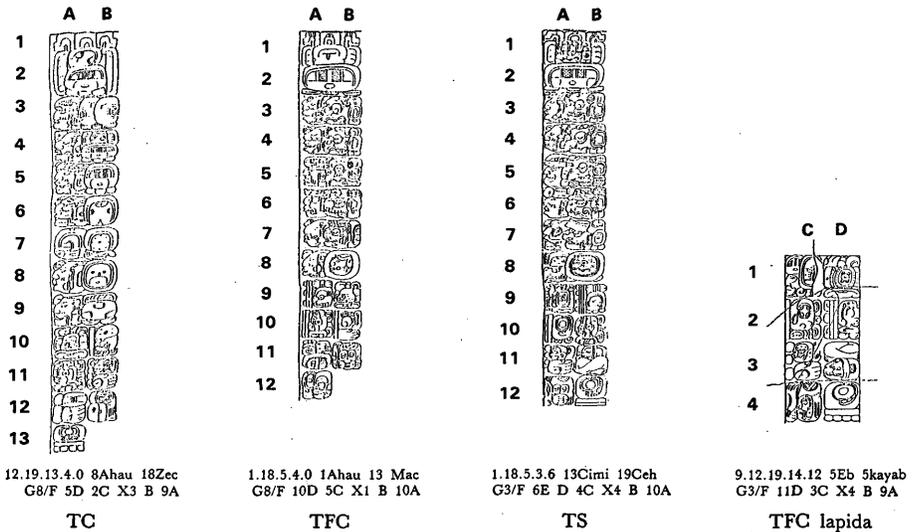


図 3-2(2)

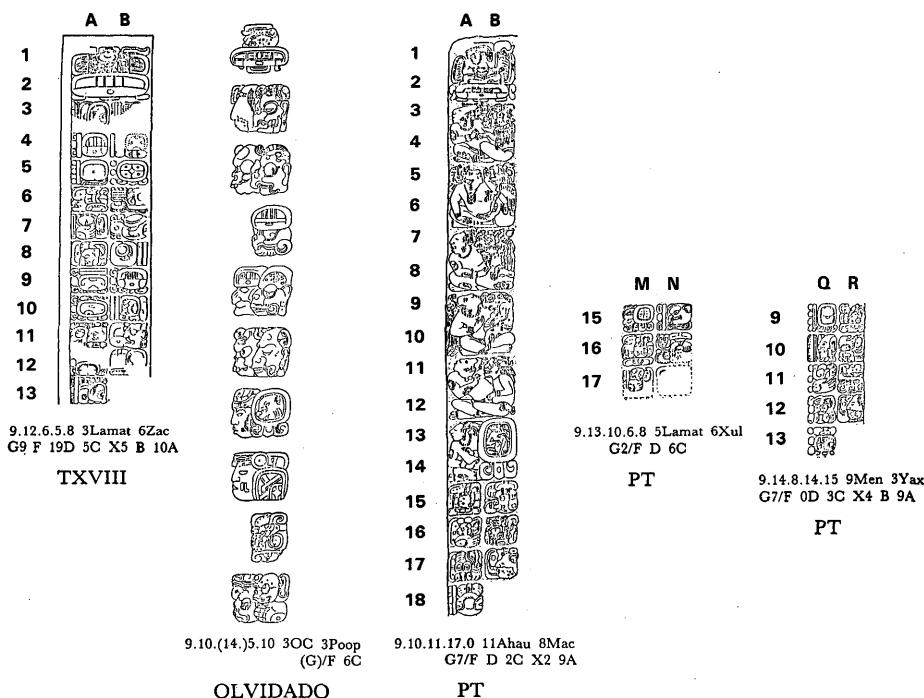


図3—(3)

図3 イニシャルシリーズの文字

のPT(2)とPT(3)の2つは、テキスト中にでてくるもので、ISとはいえないが、補助シリーズをしるしているので、ここに含めた。

IS 導入文字は5つの要素から成り立つ文字である。(1) 一番上の文字素 T 124 は3つの文字素性からなる。一部消えて不明なものもあるが、それはいずれも同じとみ

表4 イニシャルシリーズ

HS	9. 8. 9.13. 0	8Ahau 13Poop
TI	9. 4. 0. 0. (0)	13Ahau (18Yax)
OLVIDADO	9.10.(14). 5.10	30c 3Poop F 6C
TC	12.19.13. 4. 0	8Ahau 18Zec G8/F 5“bix”D 2C X3 B 9A
TFC	1.18. 5. 4. 0	1Ahau 13Mac G8/F 10D 5C X1 B 10A
TS	1.18. 5. 3. 6	13Cimi G3/F 19Ceh 6E D 4C X4 B 10A
TFClapida	(9.12.19.14.12)	5Eb G3/F 5Kayab 11D 3C X4 B 9A
TXVIII	9.12. 6. 5. 8	3Lamat G9 F 19D 5C X5 B 10A ... 6Zac
PT (1)	9.10.11.17. 0	11Ahau G7/F D 2C X2 B 9A 8Mac
PT (2)	(9.13.10. 6. 8)	5Lamat 6Xul G2/F D 6C
PT (3)	(9.14. 8.14.15)	9Men G7/F 0D 3C X4 B 9A 3Yax
IS Vase	(9.18. 9. 4.)4	7Kan (17Muan) (G/F) E D 1C B A

てよい。(2) 櫛のような要素 T 25 は、導入文字に使われる場合、2つが対になって1つの機能をはたしている。この間に月の守護神がはさみこまれているのであるが、HS と TC では T 25 は大きく下まで伸び、Tun の文字素まではさみこんでいる。これは意味に違いをもたせるためとはいいがたい。絵画的な遊びとでもいってよいであろう。(3) 月の守護神は Poop, Zec, Mac, Ceh, Zac のものがあり、Poop と Mac は2例ずつみることができる。Poop の場合は HS, OLVIDADO のどちらもジャガーの頭である。Mac の場合は TFC では Ik の文字の幾何体であるが、PT ではその全身体(全身像)である。図では判読しがたいが、写真や拓本では腕と脛に Ik の特徴である T 型の文字素性が刻まれており、Ik の全身体であることがわかる。Zec の守護神には大きく分けて Caban (T 526) と場合と空 (T 561) の場合があるが、パレンケでは Caban が用いられている。(4) Tun の文字素は、十字グループのものが標準形であり、その他は平べったくなっているが、そこに時代的な差をみることはできない。(5) 一番下の文字素は3つの丸 T 142 (T 314b) か、両端の文字素性が L 字または逆むきの L 字になった T 125 であるが、書き方に差がみられるだけの、飾りの要素である (T 142 と T 314 の関係については [八杉 1986: 182 註3] 参照)。PT には Tun の文字素の左右に火の玉のような要素がついているが、意味に差をみいだすことはできないので、これも単なる飾りとみることができる。

Baktun 以下の文字は幾何体、頭字体、全身体の3つの字体をみることができる。頭字体は、各期間の文字が現われる位置から判別されるだけだといってよいほど似ているものがある。とくに TS の Katun と Tun の頭字体は似ている。しかしそれでも耳飾りが異なるとか鼻の形が異なるなどの違いをみせている。とはいえ両者が似ているのは無理もないことである。幾何体をみればわかるように、Katun は Tun の文字素のうえに T 25.528.25 (Thompson のカタログでは T 28 とし、ひとつの文字素とみている) を載せているにすぎないからである。HS, TFC, OLVIDADO の Katun と Tun の文字を比べてみればわかるように、両者は異なる文字であり、Tun はもともと顎が骨に換っているもので、Katun は口の端から髭がでているものである。それが TS では両者とも顎が骨に換わっているのは、間違っただけといえないこともなかろうが、幾何体の構造からわかるように両者は似た構造をもっているからと思われる。

全般的には頭字体は次のような特徴を有している。Baktun の文字は顎が手に換わり、Katun では口の端から髭がはえている特徴を有し、Tun は目に3つの点があったり、顎が骨になっていたり、鳥の羽のようにになっている。Uinal はカエルで、口の

端に渦巻きがある。Kin は口の端から髭のはえた猿を表わしたような頭である。

数字は点と棒のほか、幾何体、頭字体、全身体の3つの異なる字体で書かれている。まず点と棒の特徴をいうと、一部棒の中を装飾したものを TXVIII の Baktun の係数にみる事ができるし、点の間の空間を U 字型の装飾要素で飾っているものと同じく TXVIII の Tun の係数にみる事ができる。これらは古典期後期の前半の特徴とみてよい。

幾何体は 0 を表わすものを TC の A7 にみる事ができる。IS 以外では、数 1 と 20 の場合しかその例はない。1 は親指で表わされ、20 はいわゆる月の文字、Thompson のカタログでいうと T 683 で表わされている (DN, PE の項参照)。

頭字体についてはパレンケでは多くの例をみる事ができる。以下に数とそれが生起する場所をあげる。数の頭字体は IS 以外にもみられる。それらをひろったものが PT, 96G, TFClapida, Catalog のものである。ここで Catalog とはパレンケの保存庫のカタログのことで、数字はそのカタログ番号である [SCHELE & MATHEWS 1979]。HS の B6b にも頭字体がみられる。12 という解釈が計算から導きだされてい

表5 数字の頭字体

数	テ キ ス ト										生起 度数
	HS	TC	TFC	TS	OL	PT	96G	TFClap.	Catalog		
0	B3		A7			P15			442, 469, 486		6
1			A3, A8	A3			H6				4
2							B5, D3, E8, F8		445		5
3				A6	OL, OL						3
4		A6	A6								2
5			A5	A5	OL	M15	D4, E3	C1	221, 221, 482		10
6				A7			C5				2
7							H7		463		2
8	A2, A4	A8					B1, C3				5
9	B1, B2				OL		B6, A7, F2, H1		424, 428, 458		10
10					OL, OL						2
11									436, 451, 513		3
12		A3					A1		408		3
13	A3, B4	A5		A8					468		5
14											0
15							G2		427		2
16									433		1
17									499		1
18		A9	A4	A4					422		4
19		A4									1

るが、確実ではなく、また細部が不明なのでこの表には含めていない。14の頭字体はみつけることができなかった。

各数を表わす文字の特徴を述べ、同じ数を表わす文字でも異なる場合その違いに言及する。

0は顎のところが手に置き換わっている。そして額に「死の目」の飾りをもつ。しかし HS の B3 の 0 の文字はそのどちらの特徴もみいだせない。

1は若い女性の横顔とみられる。額のところに飾りがあり、それは2つまたは3つの部分からなる。そして髪が垂れさがり、頬に IL 形マークがある。8の頭字体との区別は TS と TFC では額の飾りによってなされているようにみえるが、96G では区別しにくい。1を表わす文字か8を表わす文字かは、計算から確かめないとわからないほどよく似ている。

2は頭の部分がこぶしになっている。頬には IL 形マークがあり、大きな丸い耳飾りをもつ。

3は額に円盤の飾りをもち、それは頭にまいたターバンにひっついているようである。耳飾りの中には Ik の示差特徴である T 字が横向きに描かれている。OLVIDADO には3を表わす文字が2つあるが、どちらもターバンだけで、額のところに円盤の飾りをもたない。

4は太陽の神といわれ、目は四角で、Kin の頭字体文字素を耳の部分にもつ。口の端から髭のようなものがでている。

5はしわのある老人の顔を表わしているようで、頭に Tun の文字素をもつ。PT と 96G では Tun の上に飾りをもつ。96G の E3 は Tun の下に鼻の垂れた神話上の鳥があり、2つが一緒になって頭飾りを構成している。

6は目の玉が X になっている。6を表わす文字は2例あるが、両者の頭文字の違いは大きい。それは目のなかに X という明確な示差特徴をもつためと思われる。

7は大きな目に鉤型の瞳をもつ。

8はとうもろこしの女神とみられており、額に渦巻状の飾りをもつ。96G の C3 の額の前の飾りは大きくなり、ほぼ頭上を占めている。

9は額に T 16 (yax) の文字素をもち、鼻から下が髭で覆われたようになっており、口のまわりに点をもつ。HS の文字には T 16 (yax) の文字素はないが、頭上から額に垂れさがるように描かれている飾りに Yax の特徴がみられるので、T 16 の変形とみたい。

10は骸骨であり、顎が骨になり、額に「死の目」をもつ。

11は鼻から下が T 121:l21 で覆われている [BERLIN 1944]。

12は TC の A3 では空を表わす文字といわれる T 561 を頭にもつ。96G の A1 では鼻の下から横に線があり、その線の中央部には3つの点がある。そしてその下には3本ばかりの縦線がある。これはちょうど空の文字の下半分の要素を描いたように見え、融合文字と考えられる。なかなか同定のむづかしい文字である。

13は鼻がたれまがった鳥のような顔で、頭飾りは紐をまいたようなものと (HS の A3, B4), Uinal (T 521) をもつものと (TS の A8), Imix (T 501) をもつもの (catalog 468) がある。またそれとは別に、3の特徴と10の特徴である顎骨をもつ頭で13を表わした文字例もある (TC の A5)。

14以下は10の示差特徴である顎骨に4から9までの特徴をあわせもつ。

PT の IS は全身像で表わされているが、IS を全身像で表わした例は筆者の知る限り8例ある (表6)。

パレンケの PT の IS は 9.10.11.17.0 11Ahau 8Mac であるが、最終日付は 9.14.8.14.15 9Men 3Yax である。コパンの HS の Date 24 の日付は確かでない。Morley は 9.13.3.7.8 1Lamat 1Ch'en としているが、これだと G は G4 でなければならなくなる。実際にしるされているのは G3 の文字であるので、Morley の読みは正しくない。コパンの HS の確認できる最終日付は 9.15.12.10.10 であり、完成はそれ以後と思われる。Morley によると、HS の奉納日は 9.16.5.0.0 という [MORLEY 1920]。

パレンケのものはヤシュチランについて古い。日付からみると、全身像の文字はヤシュチランで発明されたあとパレンケに受けつがれ、つぎにコパン、キリグアで使わ

表6 全身像

遺 跡	記 念 碑	日 付	文 献
Yaxchilan	L47/48	9. 4.11. 8.16 2Cib 19Pax	Graham 1979
Palenque	PT	9.10.11.17. 0 11Ahau 8Mac	Greene 1985b, Pl. 257
Copan	HS Date 24	?	Morley 1920, Pl. 27
	St. D	9.15. 5. 0. 0 10Ahau 8Ch'en	Maudsley 1974, Pls. 47, 48
Quirigua	St. D (W) (=Monument 4)	9.16.13. 4.17 8Caban 5Yaxkin	Maudsley 1974, Pls. 24, 26
	St. D (E) (=Monu. 4)	9.16.15. 0. 0 7Ahau 18Poop	Maudsley 1974, Pls. 23, 25
	Zoomorph B (=Monu. 2)	9.17.10. 0. 0 12Ahau 8Pax	Maudsley 1974, Pls. 9-15
	Alt. O' (=Monu. 23)	9.17.14.16.18 9Etz'nab 1Kankin	Jones 1983

れたということが出来る。しかしパレンケからコパンへの道はかなり遠い。それ以上にヤシュチランからパレンケへの流れをみると時代的な隔たりが大きい。とても一世代や二世代の差ではない。200年あまりの時代的な差がある。それゆえ、それが時代をこえ地域をこえて伝わるうちにどのように変化していったのかたいへん興味深い問題となるのであるが、全身像の文字はいわば恣意的な文字の代表ともいえるものであり、時代的な変遷、地域的な差をみることはむづかしい。しかしながら、単純なものから複雑化する過程をみることはできる。すなわち次のようにいえる。最初のヤシュチランのものはまだ数字に全身像のものが使われておらず、頭字体で書かれている。Tun も頭字体で書かれている。パレンケではじめて数字と期間の文字がともに全身像で書かれるようになり、以後受けつがれるが、パレンケでは数字と期間の文字が結合しているものの、その結びつきはまだそれほど強くない。それがキリグアのものになると、識別が困難なほど複雑にからみあい、複雑な文字の極致に達している。

その他の特徴を挙げておきたい。(1) どこかに識別できる特徴をもっている。たとえば *Baktun*, *Katun*, *Tun* の期間の文字は鳥であるが、*Baktun* の場合は顎が手で置き換わり、*Tun* の場合は顎が骨になっている。それは頭字体と同じである。(2) ヤシュチランの期間の文字は(1)の特徴をもつ頭のほかに、体の部分に、わかりにくいながらもひとつ頭が描かれている。それはのちの文字には受けつがれていない。(3) *Uinal* はいずれもカエルである。(4) *Kin* の文字はかなりの違いをみせている。猿か老人か若者のいずれかのようなものであるが、同定はむづかしい。(5) コパンの石碑 *H* (*St. H*) とキリグアの祭壇 *O'* (*Alt. O'*) の *Tun* には幾何体の *Tun* が頭に描かれている。(6) キリグアの石碑 *D* の東面 (*St. D (E)*) では、*Uinal* の文字は目に3つの点が描かれているばかりでなく、顎が骨になっており、*Tun* と *Uinal* の混同がみられるように思われる。

つぎに補助シリーズの文字について述べる。補助シリーズは夜の9王に関する *G*, *F* の文字と、月の情報をしるしているところから月シリーズ (*Lunar Series*) といわれる *E/D*, *C*, *X*, *B*, *A* の文字からなる。*CR* と補助シリーズの生起パターンをみると、パレンケでは次の3つの型があることがわかる。(1) *CR* の次に補助シリーズが生起する (*TC*, *TFC*, *PT2*)。 (2) 260日暦と365日暦の間に *G/F* があり、月シリーズは365日暦のあとに生起する (*TS*, *TFClapida*)。 (3) 260日暦と365日暦の間に補助シリーズがはさみこまれる (*TXVIII*, *PT1*, *PT3*)。この3つの型から、*G/F* と *E/D* 以下の文字は明確に区別されることがわかり、それゆえ両者の機能が異なることが納得できる。ナランホでも *G/F* が *D-A* のあとに生起している例があった (*St. 14*)。

補助シリーズが現われるのは十字グループ以後の碑文からであり、それ以前、すなわち 9.13.0.0.0 以前の HS と TI にはない。パレンケを隆盛に導いた Pacal 王の時代ではなく、その息子の Chan Bahlum の時代になってやっと他の遺跡ではすでに一般的であった補助シリーズが用いられるようになったということができよう。しかしいかなり他の遺跡ではみられないマヤ紀元前後の、計算でしか導くことができない時代の月のデータをしるしているのは特記していい。Pacal 王の時代に文字を獲得したパレンケは、天文学的な興味を深め、独自の体系を確立するに至り、それを 9.13.0.0.0 以後表わすようになったとみることができよう。

G/F はパレンケでは TXVIII と OLVIDADO 以外は融合して1文字扱いとなっている。OLVIDADO では G は消失しているが、F の大きさからみて1文字ますに G と F がはいっていたとみることができる。OLVIDADO と同様 TXVIII においても G と F は1文字ますにはいっており、両者の結びつきは強いことがわかる。TXVIII の F は標準形といってもよい T 128:60:23 であるが、OLVIDADO の F は T 60 が「上向きカエル」T 740 になっている。この交替はヤシュチランのリンテル56にもみることができ (9.15.6.13.1 7Imix 19Zip)。パレンケのほうが古い。その他の例では G は F のなかにはいっているが、ひもをたばね結んだような文字素である T 60 の結び目のところにはいっており、ひもの両端は残っている。G は9つあるうちの G2, G3, G7, G8, G9 の5つしかパレンケでは現われない。そのうち、G3, G7, G8 は2例ずつみることができ、それぞれ同じ文字とみなすことができる。

E~A の文字は月の情報を伝えている。E/D は月齢を表わす。E は20以上の数を表わす場合に生起するので、D の係数に含めると、次ページのような表が得られる (表7)。計算値は 9.17.0.0.0 を月齢0として計算する Schlak の式を利用して出したものである [SCHLAK 1983]。そのあとのユリウス暦はマヤ暦元のユリウス数 (Ahau 値と称す) を584283として計算したものである。Goldstine の表を利用してそれぞれの日付の直前の新月の日と時間をだしたものが新月の項である [GOLDSTINE 1973]。マヤ地域を西経 90°として計算した。ユリウス暦の月日から新月の月日を引くと、月齢がでる。その数はほぼ D の係数と一致している。しかし計算から出した数とは約2日のずれがある。同様の計算をナランホでもしたが、ナランホの場合では逆であった [八杉 1986]。ここからパレンケではマヤ暦元のユリウス数、すなわちアハウ値は大勢の認める584283でいいことがわかる。PT(3) では D の係数ははっきり0と書いてある。9.17.0.0.0 をしるすキリグアの石碑 E では0とは書かれていない。そ

表7 D の 係 数

碑	IS	Dの係数 計算値	ユリウス暦 (A)	新月 (B)	(A)-(B)
TC	12.19.13. 4. 0	5D 24.2	3121 12/31		
TFC	1.18. 5. 4. 0	10D 2.3	2360 11/26		
TS	1.18. 5. 3. 6	26D 17.9	2360 11/12		
OLVIDADO	9.10. (14).5.10	20.4	647 2/28	2/10 8:32	18
TFClapida	(9.12.19.14.12)	11D 12.9	692 1/5	12/25 5:39	11
TXVIII	9.12. 6. 5. 8	19D 21.5	678 9/11	8/22 20:51	20
PT (1)	9.10.11.17. 0	?D 26.8	644 10/31	10/6 9:54	25
PT (2)	(9.13.10. 6. 8)	?D 29.0	702 5/28	5/1 15:59	27
PT (3)	(9.14. 8.14.15)	0D 2.1	720 8/8	8/8 12:58	0
IS Vase	(9.18. 9. 4.)4	11.1	799 11/11	11/2 1:31	9

れゆえ、計算の基準とした9.17.0.0.0を月齢0にしたものが果してよいのかという疑問がわいてくる。

十字グループ (TC, TFC, TS) の月のデータは明らかに計算して出したものである。しかしどのような計算式を用いて出したのかははっきりわからない。Teepie はパレンケでは 81 moons=6.11.12=2392 days という式が用いられたというのが [TEEPLE 1930]、まったく根拠のないものである。しかしこの式はドレスデン絵文書に描かれている月に関するデータの1/5、すなわち 405 moons=11960 days の1/5である。

Dの文字の主字は、十字グループとTXVIIIでは「上向きカエル」である。しかしPTでは異なる。目がとびでたT 1016と手が主字の2種ある。計算ではPT (1)とPT (2)は2日の差がでるが、同じ文字であるので、同一月齢と計算したに違いない。というよりむしろ実際の観測値をしるしたとみるほうがよいのかもしれない。

TCのB10では、頭にさいころの5の目のような文字素T 585をもつ頭字体T 1029に、5を表わす棒が接字化されているが、これは5日を表わす。それは96GのL1の文字からも確かめられる。T 585を頭にもつ頭字体T 1029が日の文字のかわりをする理由はわからない。日の文字としてより、数分類詞bixとして機能しているとみたほうがよいかもしれない [THOMPSON 1971: 170-171]。

Cは手の文字T 713の上に変要素、右にT 181をもつ。TXVIIIではT 181は大きく右下まで占めており、他と異なる。右下を占める方をあとに読むという原則に違反するが、意味に差があるとは考えられない。

Xは6つに分類されているが、パレンケではそのうちX1, X2, X3, X4, X5の5つが生起する。このうちX4は3度生起する。TSとTFClapidaでは足を組んだ形の文字素と死神のような頭を縦にひもでくっつけた文字素の位置が上下逆になっている。

PT (3) は前二者とはまったく異なる文字である。

B は一型の T 187 のなかに 4 つの異なる形がみられる。それら 4 つの異なる形は同価と考えられる。すなわち、 $T 513=287:110=1016=757$ である。そして接字は、T 1 と交替する接字のうちの T 7, T 11?, T 13?, T 203 がついている。

A の文字は右に数字の 9 か 10 の頭字体がくる場合、T 683 は左半分しか描かれない T 181 になっている。そして数字のほうが主字とみなせるほど大きく描かれている。

(ii) カレンダーラウンドの文字

(1) カレンダーラウンドは 260 日暦と 365 日暦の組み合わせだったものであるので、まず、260 日暦の文字からみることにする。

全体を通してまず問題になるのは主字の下につく接字 T 125 の有無である。その文字素がテキストによってどのような特徴をもつかをみるため、各テキストごとの 260 日暦の文字素と T 125 のあるなしを表 8 にしるす。十字グループは T 125 をつけるのを好まなかったことが表から理解できる。これのあるなしで意味に変化はみられないので、装飾文字ということができると、この場合、暦の文字という分類詞の役目をはたすと考えた方がよいであろう。

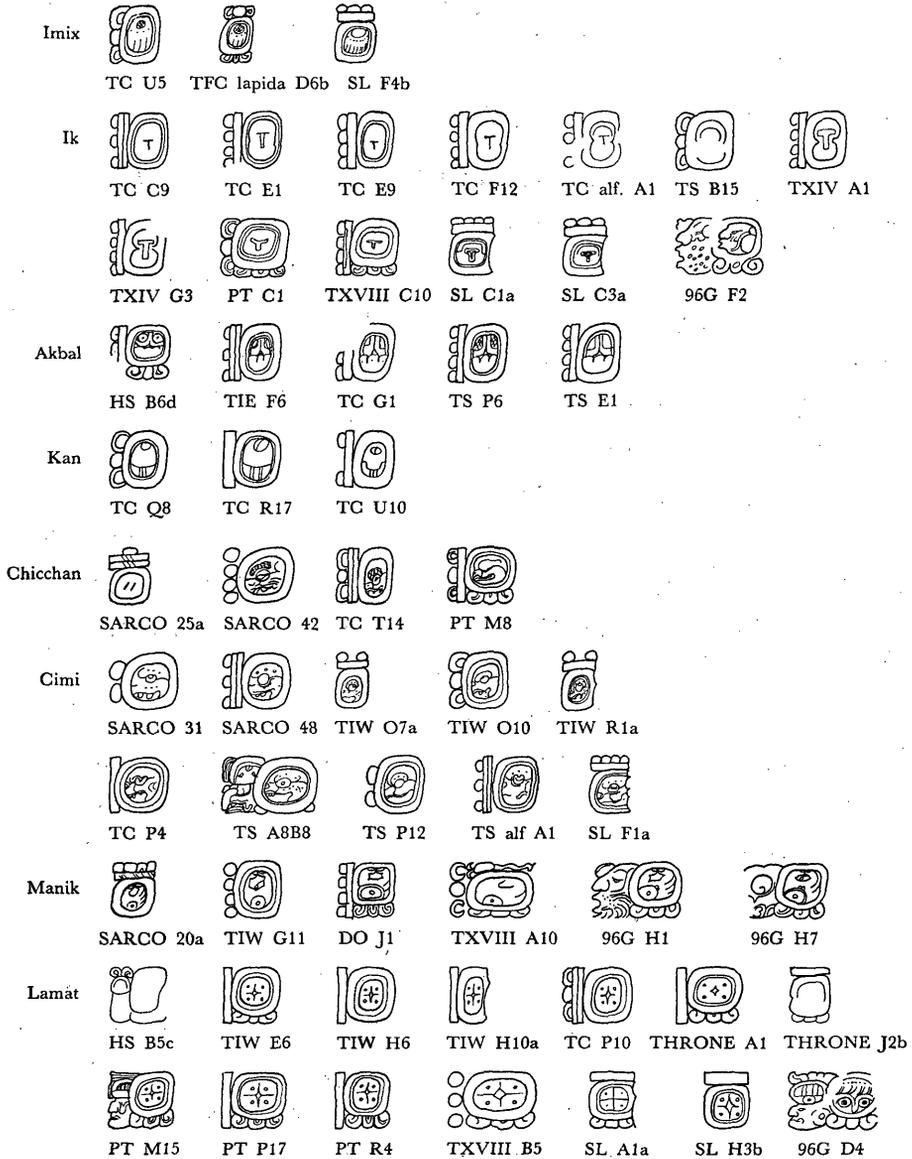
つぎに数字と文字の位置の関係はどうかというと、これは文字ますの大きさと関係があることを表 8 から導きだすことができる。すなわち通常の半分の大きさしかないところに 260 日暦の文字が描かれる場合、パレンケでは必ず数字は上に生起していることがわかるのである。文字ますと文字のバランスからとられた措置であることは文字をみれば一目瞭然である。すなわち、文字ますが半分にされると、ほぼ縦は横の倍になる。当然文字は縦長にならざるをえない。マヤ文字の主字はほぼ四角であるので、数字の文字素を上に乗くとほぼ四角が保たれる。これが横に置かれるとなると、文字はより一層縦長くなるからである。

文字ますの大きさやテキストにより好みの差がみられるのであるが、文字の時代的な差をパレンケの文字から感じとることはむづかしい。

文字には通常頭字体と幾何体があるが、260 日暦の文字においてもほぼあてはまる。パレンケに生起する文字のほとんどが図には含まれているが、すべて含まれているわけではないので、この文字には頭字体があり、この文字にはないということはできないが、図に描かれている文字だけを対象にすると、頭字体と幾何体をもっているものは 20 の日のうち Ik, Chicchan, Chuen, Cauac, Ahau の 5 つしかない。TFC の M5

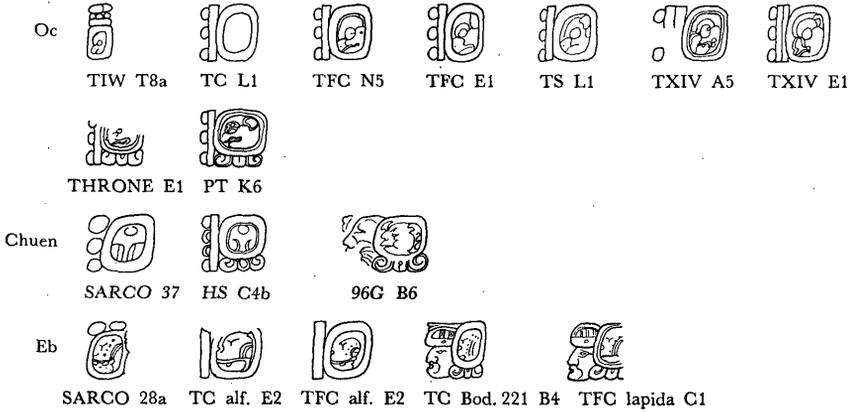
は Caban の頭字体のように思われるが、細部が不明であるので含めなかった。ちなみに頭字体しかない日の文字は、Cimi, Oc, Eb, Men である。

260日暦の文字はほとんど変化なく、また T 125 を別にすると単一の文字素からなるものであり、文字の構成や変化という点では注意をひくものはほとんどないが、若干興味あることにふれておきたい。

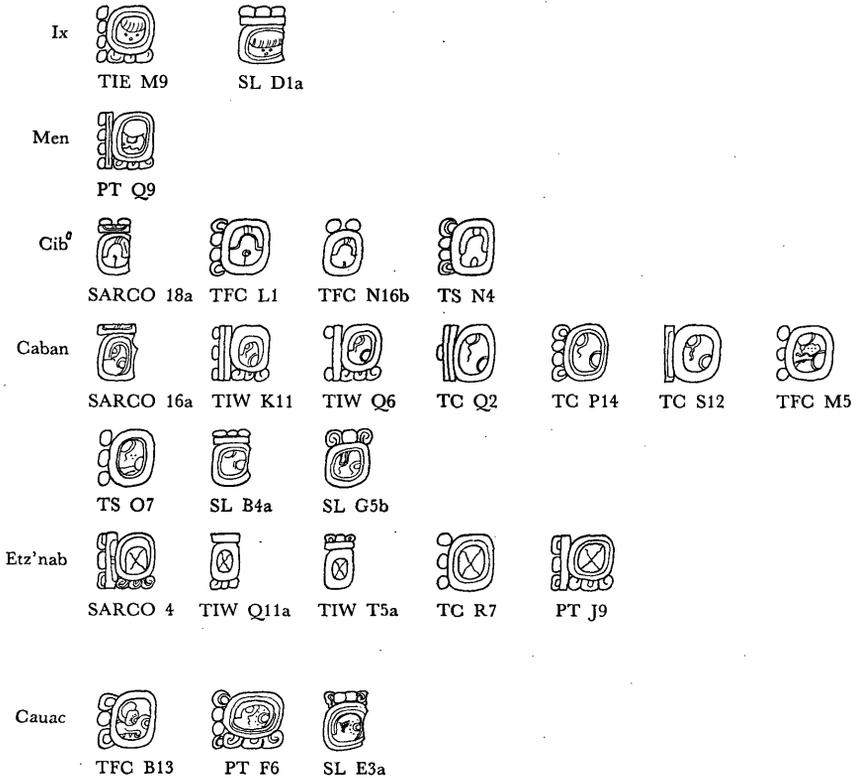


八杉 マヤ文字の分析 II

Muluc



Ben



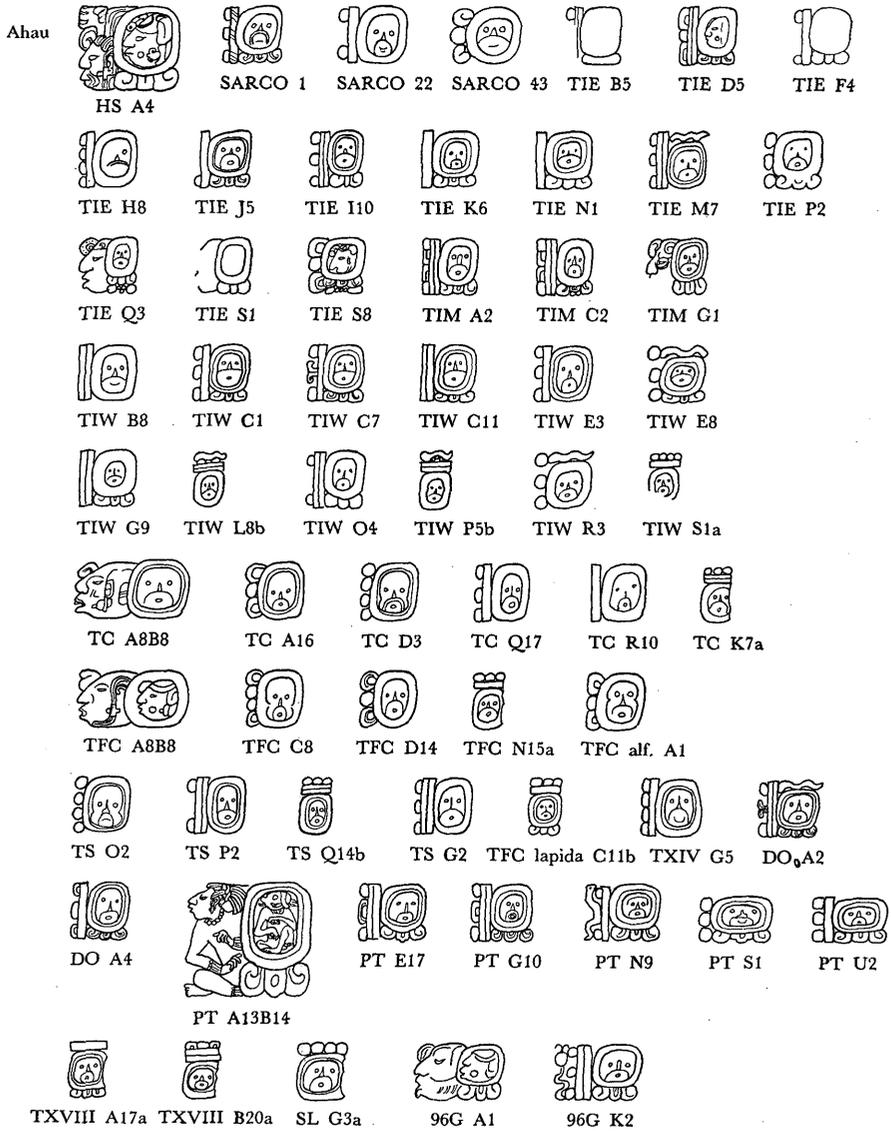


図4 260 日暦の文字

Ik の文字には Ik の文字素性の T 形要素を囲む輪の左右がくびれているものがある。ナランホでみたように、くびれは古い時代の特徴であるが、パレンケではくびれのあるなしによる時代的な違いをみることはできない。

Akbal のなかに HS の B6b を含めているが、これは Lamat と非常に似ている。

Kan の横線が直線的である場合とまがっている場合があるが、同一テキストの変

表8 260日暦の文字と係数

	260日暦 の文字	T125 つき	数字左	数字上	文字ま す半分
HS	4	4	4	0	0
SARCO	13	2	8	5	5
TI (E)	14	12	14	0	0
TI (M)	3	0	3	0	0
TI (W)	25	10	17	8	8
TC	23	0	23	1	1
TFC	10	0	10	2	2
TS	12	0	12	1	1
TFClapida	3	3	1	2	2
TXIV	5	0	5	0	0
DO	3	3	3	0	0
PT	15	15	15	0	0
THRONE	3	3	2	1	1
TXVIII	5	4	3	2	2
SL	11	1	11	11	11
96G	7	7	7	0	0

体であり、時代的な違いではない。

Manik の文字のうち TXVIII の文字には上接字として蛇がついている。これは通常関係する2つの日のうちの古い（または前）の日をしめす Ahau につく文字素である。

Lamat の文字は T 510a であるが、真ん中の十字星のような要素が四方にのびたものと、のびずに菱形になっているものと、単なる十字になって内枠を4つに分けたものがある。96G の D4 の例は、上半分は Ix と似ており、下半分は T 510b を半分描いただけのものである。

Ahau の文字は目と鼻と口と口の周りの線からなる。たくさん生起するので、それらの描かれ方や外周の形から、ナランホでは時代の変化をたどることができたが、パレンケでは時代の変化をみることはできない。Ahau に蛇がついているものがあるが、これは先に述べたように、関係する2つの日付のうち古い（または前）の日につく文字素である。8例あるうち TIE の M7 を除くと、すべて区切りのいい日、すなわち期間の完了の日である。頭字体は頬に丸がある。TIE の Q3 と S8 の 3Ahau, 1Ahau の文字の下には他にはみられない接字 T 178c (T 140?) がついている。この Ahau は、9.9.0.0.0 3Ahau 3Zotz' と 9.10.0.0.0 1Ahau 8Kayab という区切りのいい期間の終了を表わすものであり、他と機能が異なる。その違いを、接字が担っていると

みることができる。

全体的にみて、それぞれの字体は変化が少なく、かなり安定している。

(2) 次に365日暦の文字について考える。

Poop は、主字 T 551 に接字 T 130 がついた形が主体であるが、時代の新しい PT と TXVIII にはさらに T 21 がついている。TXVIII のほうは細部が不明で T 21 のようにはみえないが、同価の接字と思われる。

Uo は黒を表わす T 95 と X 字形の素性をもつ T 552 からなる。黒は格子状の素性だけをもつものと、二重丸に格子の素性をもつ SL の F5a の例の2つの形がある。図で格子状の要素がみられないのは、もちろん損傷を受けたものである。3つ丸の支え T 142 (T 314b) をもつものがあるが、これは飾りの要素である。

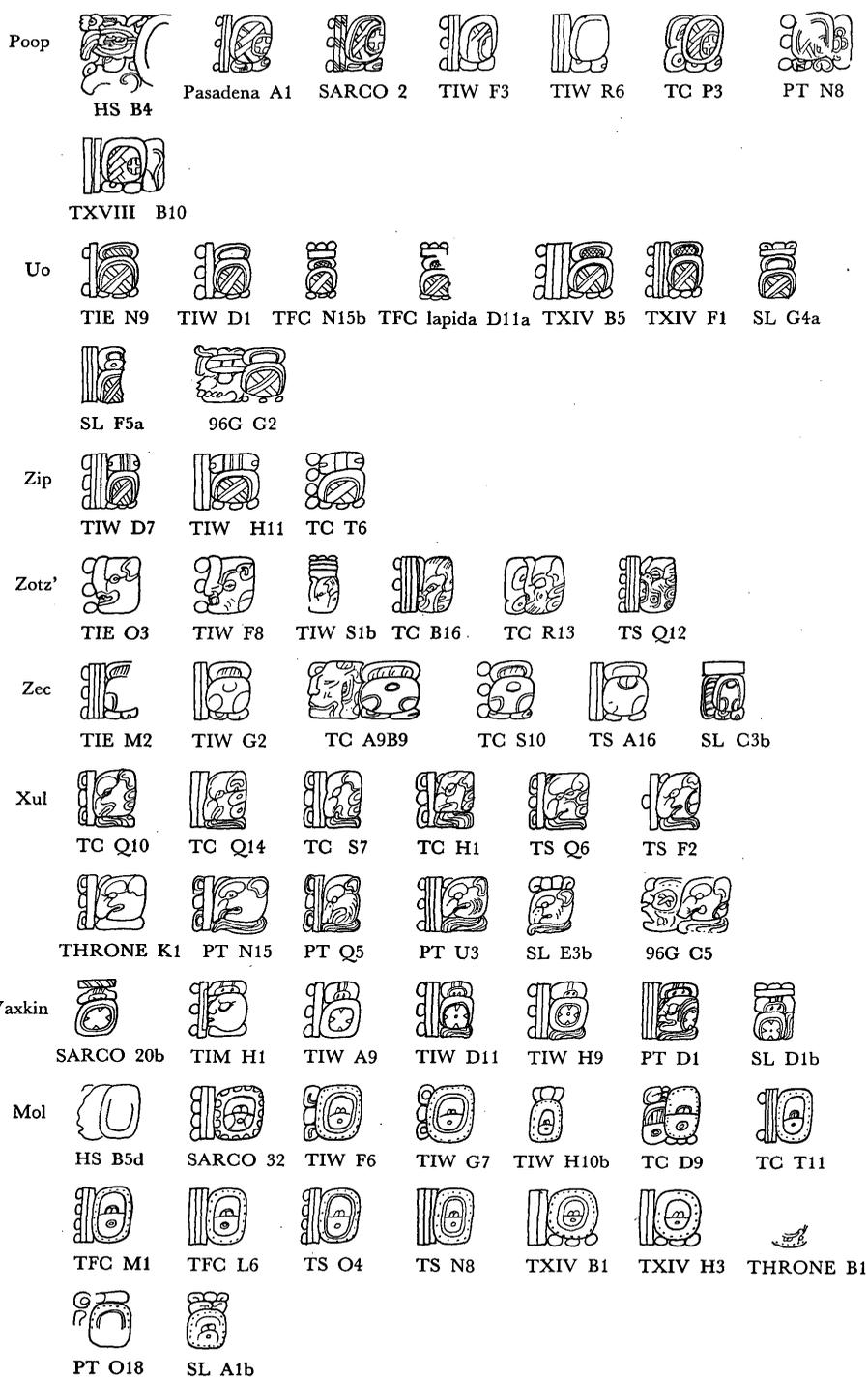
Zip は赤に X 字形の素性をもつ T 552 からなるが、赤は通常の T 109 ではなく、真ん中に垂直線が2、3本ある形である。これを T 109b となづけておく。

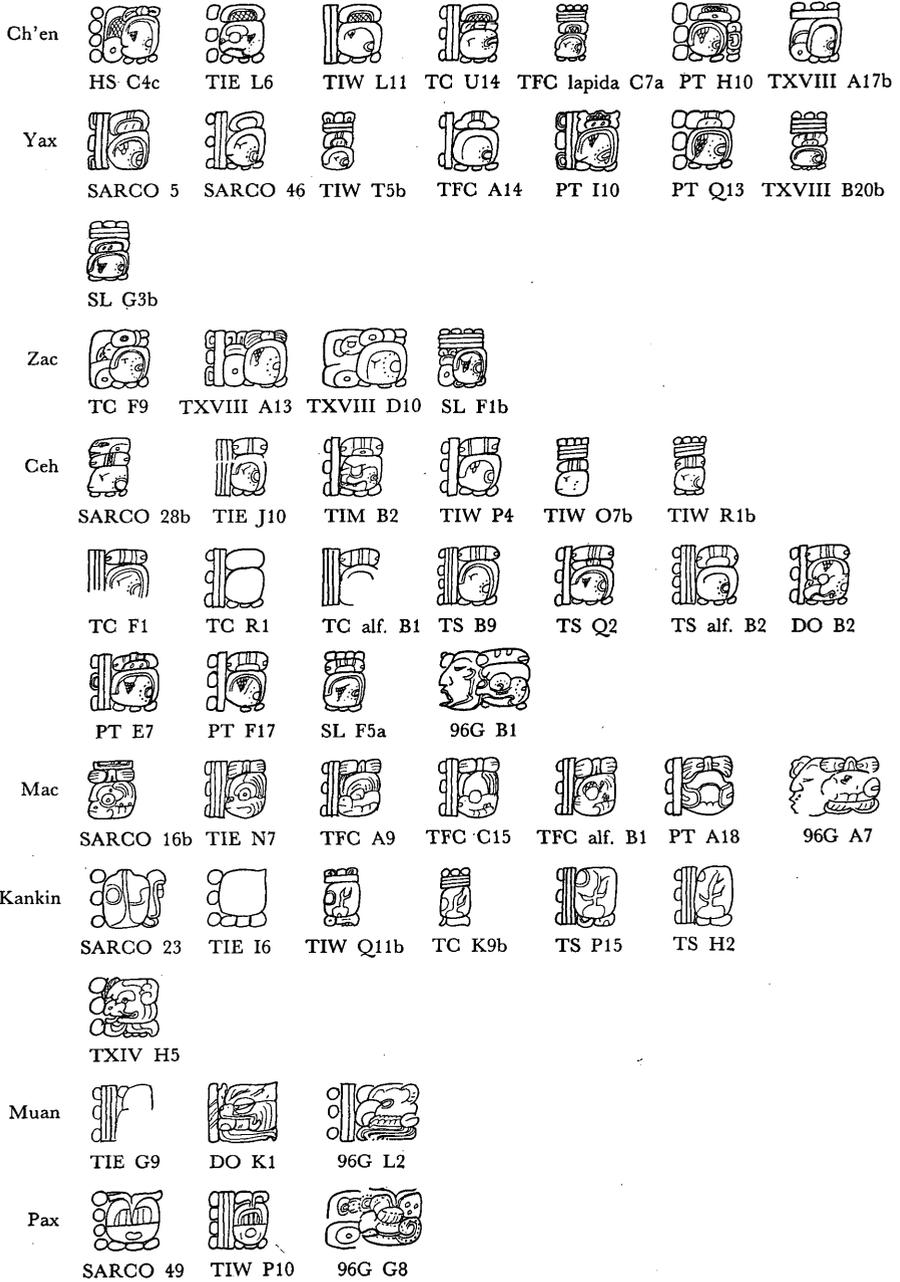
Zotz' はコウモリの頭であるが、右下に半円が2つ縦に並んでいる。TC の B16 の場合は Akbal のようである。絵文書にみられる Zotz' の文字は目のところが Akbal になっている。Akbal は暗闇を表わす。コウモリは夜活動する動物であるので、夜の動物を表わす意味でもちいられているのではないかと Kelley はおもしろい解釈をしたが [KELLEY 1976: 208], TC の B16 の右下の要素が Akbal であるなら、すでに古典期時代にそのような文字遊びの例があったとみることができよう。

Zec は T 25:520:130 (または T 25.520:130) からなる。T 130 は Kankin にもつく。 Chol 語の暦といわれている暦では Zec は Cazeu で、Kankin は Uniu というところから [THOMPSON 1971: 106], Fox & Justeson は T 130 を wa と読んだ [FOX & JUSTESON 1980: 212]。また Lounsbury は cacau の文字から同様 T 130 を wa とした [LOUNSBURY 1973: 138]。しかし Poop につく T 130 を説明できないので、正しいといいきることはできない。

Xul は動物の頭に T 116 がつく。T 116 は tab とか il と読まれてきたが [八杉 1979], Fox & Justeson は ne(ni) という読みを提案している [FOX & JUSTESON 1980: 212]。Chol の暦では Chichin という。Chichin ということばは辞書には発見できず、どういう意味かよくわからないが、他のマヤ族の暦からみて鳥を表わすとみられる (ユカテク語の ch'ich' には鳥という意味がある)。この語には n が含まれている。T 116 は Yaxkin と Muan と Kankin の文字の構成素としても生起する。いずれも n を含むので、Fox & Justeson の読みを否定することはできない。しかしたとえば kin-ne > kin をとりあげると、kin は非常によく知られた文字素であり、そ

八杉 マヤ文字の分析 II





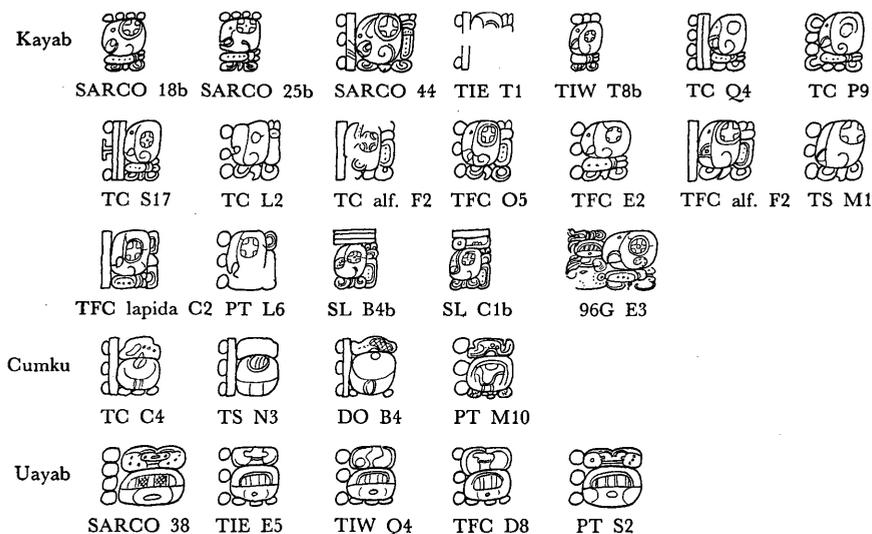


図5 365日暦の文字

れにわざわざ kin の語尾の n のために ne という音声補強符 (phonetic complement) をつける必要があるだろうか。それゆえこのような形で音節文字が現われるのは不自然な感じがしてならない。文字、文字素の読みの問題は別途扱う予定であるので、これ以上深入りはしないことにする。

Yaxkin は yax を表わす T 16 と kin を表わす T 544 からなるが、kin が頭字体に換わった例を2例みることができる。T 116 がつく例とつかない例がある。Xul の場合は義務的だと考えてよいが、Yaxkin の場合は随意的である。

Mol は Muluc を小さな丸または点で囲んだ文字である。上下を分かち線がほぼ真ん中にくるが、最後の例の SL の A1b は曲線になっている。TC の D9 の例の左の文字素は tun であり、月の最後の日 20Mol, すなわち次の月の 0Ch'en を表わす。

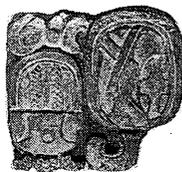
tun を用いて月の終わりを表わす例は筆者の知る限りでは11例ある。Thompson は9例挙げている [THOMPSON 1971: 121]。そのうちのナランホの HS の A1b (9.10.3.2.12 2Eb Uayeb completed?) は風化が激しく読みとめることはむづかしいが、そこに tun があるとは思えない。表9に添えた奉納日を考慮しても、それはおかしいので、表には含むべきでない判断した。この他に Berlin は3つの例を挙げている [BERLIN 1965a: 41]。それらを年代順に挙げたのが表9である。宮殿西広場 (Palace W Court) 13Manik 20Yaxkin の正確な年代はわからない。ここは KanXul II 時代の建設とされているので、奉納日として 9.14.10.0.0.0 を与えてみたいが (Greene Robertson 1985), この文字群は広場に面した C 棟の西基壇壁にあり、C 棟は Pacal

表9 Tun 文字を用いた日付

遺 跡	場 所	関連する日付	奉納日	文 献
Palenque	TC D9	13.0.1.9.2 13Ik 20Mol	9.13.0.0.0	Maudslay IV: pl. 74
	Palace W court	13Manik 20Yaxkin	9.14.10.0.0??	Maudslay IV: pl. 29
	TXVIII Stucco	? ? 20Yaxkin	9.14.15.0.0?	Schele & Mathews 1979: no. 479
Piedras Negras	MSS 16 A1-B1	9.14.16.1.7 8Manik 20Ceh		Satterthwaite 1940: pl. X
	Shell Plaque	9.14.17.14.17 1Caban 20Yaxkin		Coe 1959: fig. 53d
Aguateca	St. 1	9.15.9.17.17 13Caban 20Yaxkin	9.15.10.0.0	Graham 1967: fig. 3
Seibal	HS	8.18.19.8.7 12Manik 20Yaxkin	9.16.0.0.0?	Morley 1937-8: II, Maler 1908: pl. 6
Yaxchilan	L9 A1-A3	9.16.17.6.12.1 1Eb 20Yaxkin	Bird Jaguar	Graham & von Euw 1977
	St. 9 A1-B1	? ? 20Mac	Bird Jaguar	Greene et al. 1972: pl. 53
Naranjo	St. 19 C1-3	9.17.5.8.12 9Eb 20Yaxkin	9.17.10.0.0	Graham & von Euw 1975
Quirigua	G U'2-V'2	9.17.14.13.17 13Caban 20Yax ?	9.17.15.0.0	Maudslay II: pl. 42, pl. 43
Tonina	Palacio	? ? 20Poop		註 1

時代のものであるので、Pacal 時代の可能性の方が強い。Thompson は 9.8.18.3.7 13Manik 20Yaxkin としているが、1CR あとの 9.11.10.16.7 としたほうがよいように思われる。月の終わりを表わす tun (T 548) には通常接字 T 128 がついている。ところがこの例は接字がなく tun だけで月の終わりが表わされている。これはもっとも古い形とみたい。日付の長期暦上の位置が不明であるが、どちらにしても他の遺跡より古いことは疑いない。表からわかるように、月の終わりに tun を用いるのはパレンケで発明され、ウスマシンタ川沿いで用いられたのち、ナランホ、キリグアに伝わったとみることができる。

1) 1987年7月、メキシコの Instituto Nacional de Antropología e Historia の Juan Yadeun 氏に Tonina の発掘資料をみせてもらっていたとき、Palacio (宮殿) で発見されたスタッコ製の文字の断片のなかに tun/Poop (=20Poop) の文字をみつけた。10 cm × 10.5 cm 四方の文字で、Poop の下接字の右半分が欠けていたが、非常に洗練された美しい文字であった。Poop に tun が用いられた例は初めてであるから、氏の断わりを得てここに示すことにする。tun 文字を用いる例は圧倒的に Yaxkin の時が多いが、Mol や Ceh などのときにも用いられ、ここに Poop の場合もみつけたのであるから、Yaxkin に特有のことではないことがよくわかる。月の終わりに tun 文字を用いるのは、tun に「終わり」の意味があるからと思われる [八杉 1982: 52]。



Ch'en, Yax, Zac, Ceh は Cauac の文字素にそれぞれ黒、緑、白、赤を表わす文字素がついてできた文字である。これに T 60 と T 142 がつくことがある。これらは随意的な要素である。Cauac は幾何体と頭字体の両方の形が生起している。黒の文字素 T 95 には3つの変体がある。緑の文字素 T 16 には上部が山形になったものと、単なる曲線になったものが観察される。赤の文字素 T 109 は中央下部に半円状の要素があるものと、それがなくただ垂直に太い線が2本ひかれているものがある。

Mac の書き方に3つの違いをみることができる。いずれも ma を表わす T 74 がついているが、その下に生起する文字素は(1) ca を表わす T 25 の頭字体である T 738d(Thompson のカタログでは T 738c までしかないのでつけ加える)、(2) 亀(ac) を表わす T 626、(3) 亀を表わす T 626 に ca という音をもつ T 25 が2つついたものの3つである。(1)の場合は $ma + ca = mac$ であり、(2)は $ma + ac = mac$ と解釈できる。(3)は(2)に T 25 がついたとも解釈できるが、違う種類の亀(mac)に音決定詞の ma と ca がついたとみる方がよいように思われる。

Kankin の接字には2種ある。T 117 と T 130 である。Thompson はそのカタログで T 130 に絵文書の形を含めている。しかしこれは T 117 に似ており、こちらの方が絵文書の形になったのではなからうか。TXIV の H5 については Xul とみる人と Kankin とする人の2つに解釈は分かれている。それは前後の日付をつなぐ DN が不明なことと、この文字の形がどちらかをはっきり示す特徴をもたないことによる。しかし通常 Kankin の文字は動物の頭で、口が大きく開いており、この場合の文字との似か寄りはないが、Kankin の頭字体の例はパレンケではないこと、Xul の頭字体と似ているが接字は異なることから、ここでは Kankin とみなすことにする。

Muan は T 748:116 と書き下せるが、Thompson のカタログのムアン鳥とは大分異なる形をしている。

Pax は3例あり、そのうちの1例は頭字体で描かれている。それはカエルであり、Pax の特徴の割れ目が頭にみられる。Pax の幾何体の主要部分は Tun であり、Tun の頭字体が使われるべきであるが、Uinal の頭字体であるカエルが使われている。書記者の勘違いによるまちがいのように思われるが、ティカルの石碑21にも同じ文字があるので、正しい書き方であるといわざるを得ない。Tun と Uinal の文字の交替の理由はわからない。

Kayab は3つの文字素からなり、その配置順はほぼ守られている。SL に生起する2例だけ接字の順が逆になっている。

Cumku は T 155:506 に下接字として T 142 (T 314b) と T 178 の形となにもつ

かない3つの場合がある。これから T 142=T 178 となり、それは随意的な接字であるということができよう。

Uayab は T 157:548 に下接字 T 142 (T 314b) がつく場合とつかない場合がある。T 157 はそれぞれ若干形が異なる。

(iii) ディスタンスナンバーの文字

DN は IS と異なり、期間の文字は小さい方から順に、すなわち, Kin, Uinal, Tun, Katun という順になり、Katun 以上の単位が現われることはまれである。しかしパレンケでは、IS と同じように大きい単位から小さい単位の順に並べられた DN が4例ある。そして Katun 以上の文字として Baktun, Pictun, Calabtun の文字をみることができる。Kin の文字は通常省かれて、Uinal の文字にその係数だけがつけられる。パレンケでは Kin の係数はすべて Uinal の左にあり、しかも左上端を占めている。しかしここで扱っている DN83 例のうちの16例に Kin を表わす文字が現われている（そのうち1例は損傷を受けて不明であるが、位置から Kin の文字があったことがわかる）。Kin を表わす文字には7つの異なる形がある（表10）。T 1010b は T 544 の頭字体で、T 1029 は T 585 の頭字体である。そうすると、T 765d は T 574 の頭字体である可能性が高い。

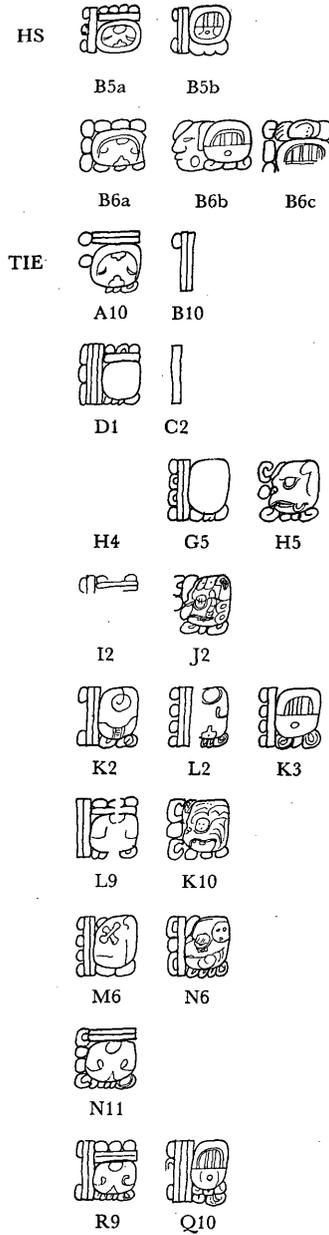
Uinal は79例あるが、そのうち頭字体は9例、, T 683 による表示は2例ある。その他は IS に用いられる文字と同じ T 521 による。

T 521 は上部の丸、左右の髭、下部の三角または3つのこぶ状の凸形要素からなる。それぞれの要素は若干異なる場合があるが、それほど大きな変化はみられない。これら3つの要素は直接外枠につく場合と、内枠をもうけ、それにつく場合がある。T 521 につく接字にはいくつかの種類がある。細部が不明で同定のむづかしいものもあるが、(1) つかない、(2) T 142 (T 314b)、(3) T 246、(4) T 88、(5) T 102、(6)

表10 Kin の文字

Thompson's Cat. No.	生 起 場 所
T 544: 116	TFC-D17, TFCalf-F1
T 1010b	TFC-D4
T 1029	96G-L1
T 574: 130	TIE-K2, TIW-L7, TFC-B12, PT-M9, PT-R2
T 765d: 130	TIE-M6, TS-C14, PT-B18, PT-G8
T ? : ?	TIW-Q3
T ?	SL-H4b

T 54 の 6 種を認めることができる。通常 DN につく T 246 とその変化形がもっとも多い。これは 96G の Uinal の文字からわかるように、T 136 と T 125 (T 126) の融合した接字とみることができる。



TIW



E1



F1



E7



F7



F9



E10



F10



E11



F11



E12



G4



H4



G5



H5



L7



K8



L8a



O5



P5a



P7



O8



P8



Q3



Q7



R7



Q8



R11



Q12a



R12



S4



T4



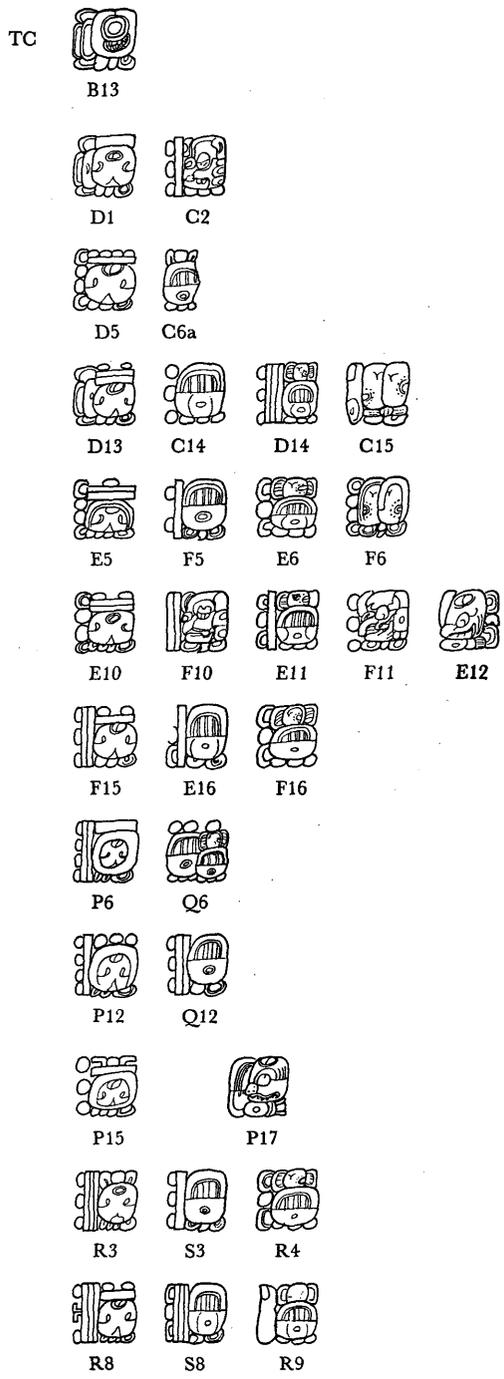
S5



T6



S7





S13



R14



S14



T1



U1



T2



U6



T7



U11



T12



U12



T15



U15



K7



K8



O2



O3

TFC



B12



A13



C3



D3



C4



D4



D15



C16



D16



C17



D17



M17



N1



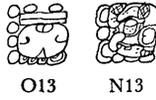
O1



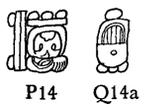
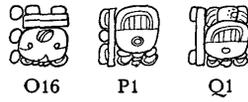
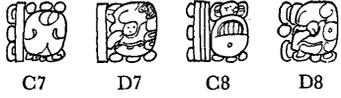
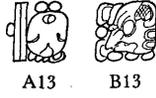
N6



O6

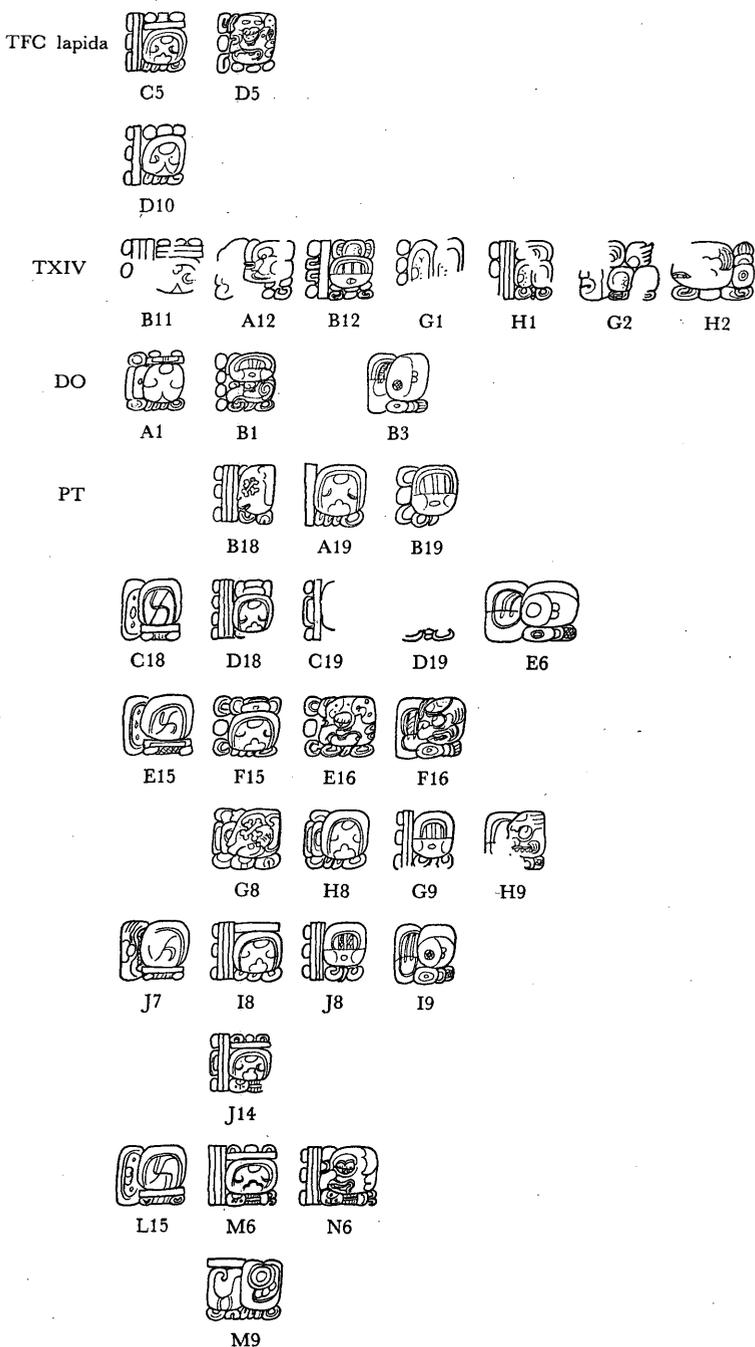


TS



TFC alf.







M13



O15



P15



O16



P16



O17



Q2



R2



Q3



R3



Q4



S5



T1



U1

TXVIII



A9



B9



B15



A16



B16



A19



B19



A20



D4



C5



D5



C7



D7



C8



D8



C9



D9

SL



H4b

96G



A5



B5



A6



C2



D2



C3



D3



C4

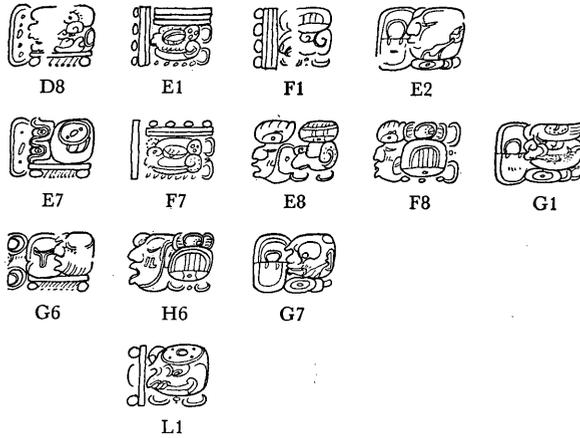


図6 ディスタンスナンバーの文字

頭字体は IS と同じカエルの文字である。

T 683 は月シリーズの A の文字からわかるように20を表わす。それを T 521 の代りに用いた例は TC の B13 と PT の M9b にある。T 521 は Uinal であるので20日を表わし、T 683 も20を表わすので交替できたと考えることができる。しかし Uinal の代りに T 683 が用いられる例はこれまでのところ Uinal が1の場合、日数にすれば、20日から39日までに限られている。つまり T 683 はそれ自体で20を表わすが、20の位の係数はつかない。T 683 についているのは日の係数なのである。たとえば TC では係数0 (T 173) がついている。この係数が Kin の係数であることは、PT の例からも裏づけられる。PT の M9a は Kin を表わす文字があり、5の係数がついているが、T 683 のある M9b には係数はないからである。そうすると T 173 は完了の意味ではなく、0の意味をもつことになり、マヤ人は0を知っていた証拠の一つとなる。

Tun, Katun, Baktun の文字は IS の文字とかわらず、幾何体と頭字体がある。Pictun と Calabtun は TIW の F11-E12 と TXIV の H1-G2 にみられる。

DN 導入文字の生起は少ないが、PT に6例、TXVIII に1例、96G に4例みることができる。さらに DN をもたない導入文字を TS にみることができる。96G にみられる4例は接字は同価であるが、主字にあたるものはいずれも異なる。その交替は興味をひくのであるが、交替の理由は不明である。

DN を足すことまたはあとの日をしめす (PDI) 文字 (T 679.513:59 または T 513 を頭字体にした T 679.738d:59) と、DN を引くことまたは前の日をしめす (ADI) 文字 (T 513:59.125 または T 738d:59.125) が生起することがある。96G に PDI

は5例ある。そのうち A6, C4, G1 は同じ文字であるが (Thompson の T 738 には適当なものがないので T 738e とし, T 679.738e:59 と転写する), E2, G7 は異なる。

(iv) 期間の完了を表わす文字

期間の完了を表わす文字には図7にみられるように多くの種類がある。以下にそれらの文字を個別に挙げるが、それらは相互に排他的ではなく、それらのいくつかが共起する。

- (1) T 1 と同価の接字群の利用。接字には T 1, T 11, T 13, T 191, T 204, T 205, T 206 がみられるが、期間の文字ばかりでなく、完了に関係する文字にもつく。

期間の文字について完了を表わす例: TIE-D6, P3, T2; TIM-A3, G2; TIW-J2, P3; TFC-O15; 96G-B2, I1

- (2) 手の文字 T 713 のうえに, Cauac (T 528 またはその頭字体) と T 116 がついたものをのせた文字。接字として(1)のものがつく。

例: TIE-C5, G8, L5, M1, O2, R12; TIW-T1; PT-F18

TIW の T1 の接字は不鮮明でよくわからないが, T 1: 158 のようである。T 158 はふつう 5 tun たりない, すなわち 15 tun を表わす文字であるが, ここでは 9.12.10.0.0 に関する節に生起しているので, その意味をもつとは思えない。

- (3) 月のはじめに用いられる着座の文字 T 644 に T 116 がついたもの。

例: TIE-N3, S2; TIW-B9

通常そのあとに T 528.116 がつく。それらが結合すると TIM の B1, E10, TIW の C2, E9, DO の A3 のようになり, T 116 は1つだけになる。融合すると, TIW の H8, O6a のような文字になる。SL の H3a では T 528.116:644 と逆の並びになっている。T 528 が頭字体で書かれると, TIM の B1 のようになる。

- (4) T 644.116 がなく, T 528.116 だけの生起。T 528 はこの場合すべて頭字体で, 係数として10または13がつく。これは Tun の代りとなるもので, 10 tun または 13 tun の完了を意味する。

10 tun の例; TS-Q15,

13 tun の例: TIW-H9, PT-G11, 96G-K3

5を表わす棒がつくと 5 tun 完了を表わす。

例: TIE-I11

- (5) 期間の半分を表わす文字。T 74:V: <606>173 と書き下せる。

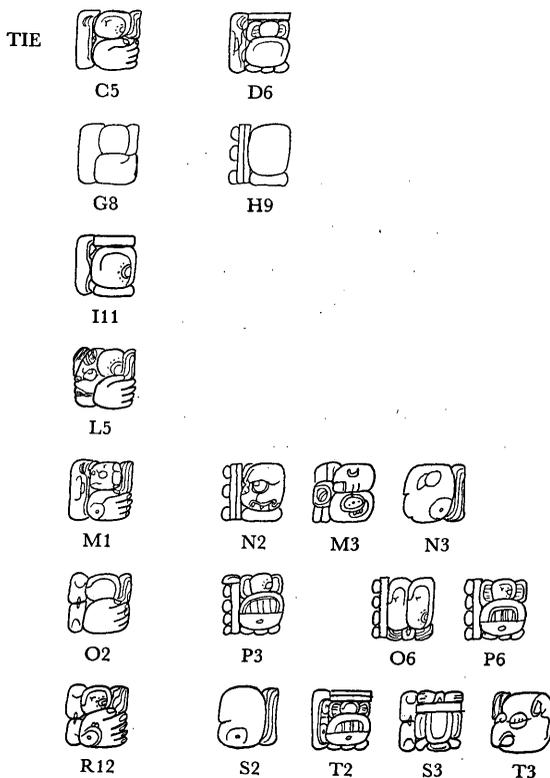
例: TIE-S3; PT-N10

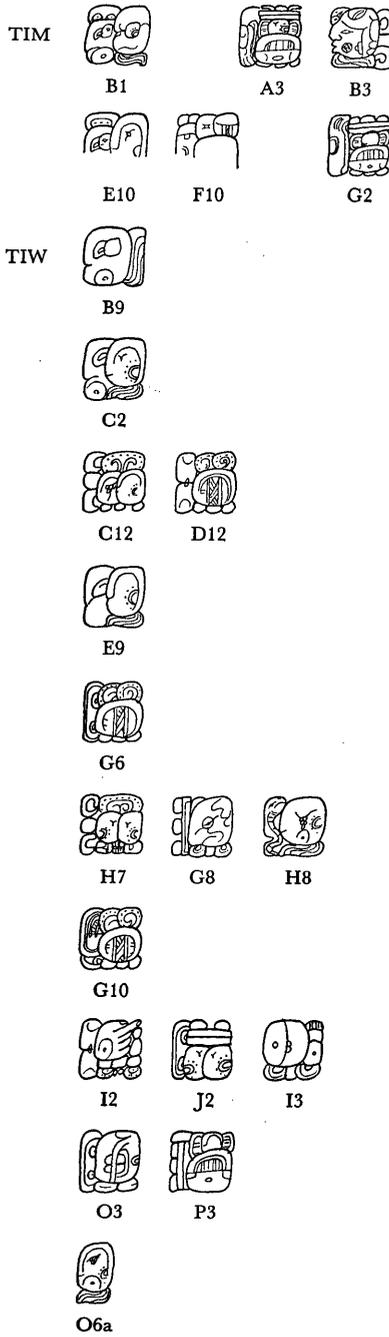
(6) T 44:563b:142 で hotun (5tun) 完了を表わす。T 44 は適切ではないが、それにあたるものがないので、便宜的に利用した。Thompson は T 44 に6つの形を挙げているが、違うものが一緒にされているようでよくない。なお図7の TIW の G6 は Hotun (5Tun) 標識である。

例：TIW-D12, G6, G10; TFC-O14; TFClapida-C11a; SL-H2b

(7) 人差し指をのばし、その他の指をまげた手を主字とする文字、または指を全部のばした手の文字。指をのばした形は SL に1例、96G に2例みられ、人差し指をのばしその他の指をまげた形は TIW, TC, TFC にそれぞれ1例ずつある。いずれも接字が異なる。パレンケだけの例からだ、時代的な差とみられるが、それが一般的かどうかはマヤ地域全体に視野をひろげてみる必要がある。

Thompson のカタログの T 713 には指をのばした形 (T 713a) と、中指以下をまげた形 (T 713b) がある。それは手の平をこちらにむけたものであるので、T 713c として中指以下をまげ、かつ手の甲をむけたものを登録することにする。そうすると TIW の I2 にみられるものは T 191.713c.165:142:178c と転写できる。TC の







T1

TC



D4



C5



S1



R2



S2

TFC



C7



D7



O14



O15

TFC lapida



C11a



D11b



C12

TS



Q15

DO



A3

PT



E18



F18



G11



N10

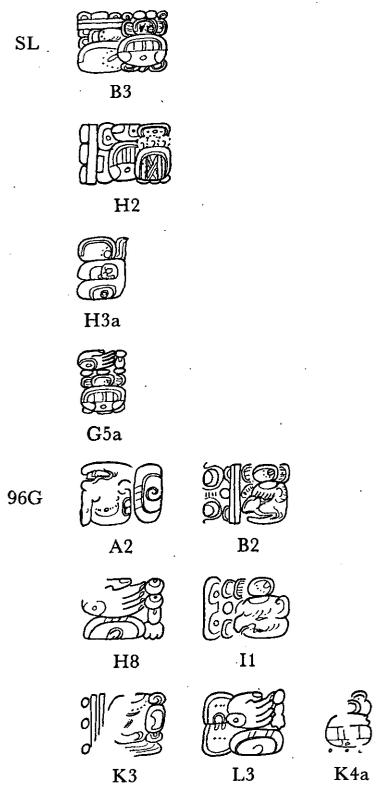


図7 期間の完了をしるす文字

D4 は T 713c.165:575 となる。しかし T 575 は主字ではないので、適切ではない。96G の2つの例も同じである。ただし L3 で T 679 がついている。また T 165 の大きさも異なる。TFC の C7 は T 713c.165:683 に T 679 がついたものとみられる。SL の G5a では T 713a.165 に 3Katun がついて、3katun 完了を表わしている。接字に変化がみられるが、いずれも T 713:165 を使って期間の完了を表わす一群である。Thompson のカタログでは T 713.165 を T 218 として

表11 さかさコウモリの生起するテキスト

遺 跡	場 所	奉 納 日	文 献
Palenque	TXVIII	9.14.10. 4. 2	
	96G	9.17.13. 0. 0	
Yaxchilan	L.2	9.16. 6. 0. 0	Graham & von Euw 1977
	L.31	9.17. 0. 0. 0	Graham 1979
Pomona	Tablero X	9.18. 0. 0. 0	Lizardi Ramos 1963: fig. 6
Quirigua	Str. 1	9.19. 0. 0. 0	Morley 1920: fig. 33

いる。文字に言及するときには、そのカタログを利用すると便利であるが、多くの文字がそれでは適切に表現できず、非常に困ることがある。Thompson のカタログはすでに古く全面的に改定しなければならないが、新しいカタログははまだ検討中であり、しばらくは Thompson のカタログに頼ざるをえない。

- (8) TIW の O3 と TC の S1 にみられる文字。Thompson のカタログにはない。
- (9) 96G の A2 にみられるように、「さかさコウモリ」による。パレンケでは TXVIII のスタッコー文字にもう1例みることができる [SCHELE & MATHEWS 1979: No. 464]。「さかさコウモリ」による期間の完了の表現はあと4例しられている(表11)。おそらくこの文字もパレンケで生み出されたものであろう。

(v) 819 日 曆

パレンケには819日曆はここであげた6例のほか、あと4例知られている [KELLEY 1976: Fig. 17]。これも全身像で描かれた IS の文字と同様、ヤシュチラン、パレンケ、コパン、キリグアにしかみられないものである。ヤシュチランに4例、コパンに2例 (T11, At. J)、キリグアに1例 (St. K) あり、そのほかもう1例、出所が不明

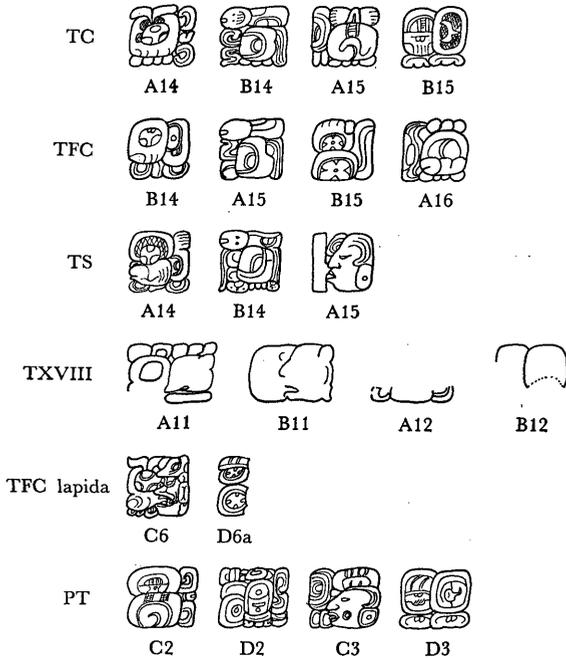


図8 819 日 曆

表12 819 日 曆

遺 跡	場 所	IS	DN	819 日曆の関する日	奉 納 日	
Palenque	Templo del Conde				9.10.15. 0. 0?	
Palenque	TC	12.19.13. 4. 0	1. 0	12.19.13. 3. 0	1Ahau 18Zotz'	9.13. 0. 0. 0
Palenque	(TFC	1.18. 5. 4. 0	14.19	1.18. 6. 0.19	1Cauac 7Yax	9.13. 0. 0. 0)
Palenque	(TS	1.18. 5. 3. 6	1. 2.11		1Ik 10Zec	9.13. 0. 0. 0)
Palenque	TFC lapida	9.12.19.14.12	1. 7.11	9.12.18. 7. 1	1Imix 19Ch'en	9.13. 0. 0. 0
Copan	St. J	9.13.10. 0. 0	4. 4	9.13. 9.13.16	1Cib 19Mac	9.13. 0. 0. 0
Palenque	House A Pier A			9.11.15.11.11	1Chuen 19Poop	
Palenque	Templo IV					9.13.15. 0. 0?
Palenque	PT	9.10.11.17. 0	1. 5.18	9.10.10.11. 2	1Ik 15Yaxkin	9.14. 8.14.15
Palenque	TXVIII	9.12. 6. 5. 8	1.10. 1	9.12. 4.13. 7	1Manik 10Poop	9.14.10. 4. 2
Yaxchilan	St. 11	9.16. 1. 0. 0	1. 3. 6	9.15.19.14.14	1Ix 7Uo	9.16. 1. 0. 0
Yaxchilan	St. 1	9.16.10. 0. 0	1. 1.10	9.16. 8.16.10	1Oc 18Poop	9.16.10. 0. 0
Yaxchilan	L29/30	9.13.17.12.10	1. 1.17	9.13.16.10.13	1Ben 1Ch'en	9.17. 0. 0. 0
Copan	TXI E. door, S. panel		2.12?	9.17. 2.10. 4	1Kan 7Yax ?	
Yaxchilan	St. 4	9.17. 5. 0. 0	2.17	9.17. 4.15. 3	1Akbal 16Kankin	9.17. 5. 0. 0
Palenque	ISvase	9.18. 9. 4. 4	1.11.11	9.18. 7.10.13	1Ben 11Zotz'	
Quirigua	St. K	9.18.15. 0. 0	10.10	9.18.14. 7.10	1Oc 18Kayab	9.18.15. 0. 0
	Walter Randel St.	10. 1.14. 9.17	17.13	10. 1.13.10. 4	1Kan 17Zec	

表13 260 日暦と方角と色

東 赤	北 白	西 黒	南 黄
Imix	Ik	Akbal	Kan
Chicchan	Cimi	Manik	Lamat
Muluc	Oc	Chuen	Eb
Ben	Ix	Men	Cib
Caban	Etz'nab	Cauac	Ahau

な Walter Randel 石碑 にみられる [MAYER 1980: pl. 61]。しかしティカルにも819日暦が 10.2.0.0.0 (889年) を刻む石碑11にあるという意見がある [JONES & SATTERTHWAITTE 1982: 30-31]。もしそうならたいへん興味深いの

であるが、残念ながら風化が激しく確認できない。全身像の文字はヤシュチランが最初の例であったが、819日暦の場合はパレンケが最初である (9.13.0.0.0:692年)。そこから、コパン、ヤシュチラン、キリグアに伝わったとみることができる。

819日暦は通常次の文字からなる節である。

- (1) T 588.126
- (2) 神を表わす文字
- (3) 色の文字 (赤白黒黄)
- (4) 方角の文字 (東北西南)

このほかに T 739 や T I.758:110 などの文字が節に含まれることがある。

819日暦は IS のすぐあとに生起し、関係する日付は IS の日付と 2tun 以内の DN でつながれる日である。その日付は IS より前であり、260日暦の係数が必ず 1 になる。方角と色と260日暦の日の間には次のような密接な関係がある。

Berlin や Kelley は図にあげた TFC と TS の819日暦を含めていない [BERLIN & KELLEY 1961; KELLEY 1976]。なぜ省いたのか不明であるが、上の条件のうちの日付の条件を満たしていないからかと思われる。すなわち、たとえば TC では、次のように IS があり、それより 1.0 (DN) まえの日の 1Ahau の日に819日暦は生起しているのに、TFC では IS より 14.19 (DN) あとの日であるし、TS では IS に DN の 1.2.11 を足しても引いても819日暦が生起する日付の 1Ik 10Zec が導き出されないのである。

TC	12. 19. 13. 4. 0	8Ahau 18Zec	(IS)
	1. 0		(DN)
	12. 19. 13. 3. 0	1Ahau 18Zotz'	
TFC	1. 18. 5. 4. 0	1Ahau 13Mac	(IS)
	14. 19		(DN)
	1. 18. 6. 0. 19	1Cauac 7Yax	

TS	1. 18. 5. 3. 6	13Cimi 19Ceh	(IS)
	<u>1. 2. 11</u>		(DN)
?		1Ik 10Zec	

しかしながら TFC と TS の節は、条件をみたしている TC とほとんど変わりなく、そのうえその他の条件を満たしている。

最初の文字 T 588 は上部が割れている場合、すなわち T 299 がついている文字とそうでない2つの形がある。Thompson のカタログはここでも不正確である。パレンケ以外では割れているので、パレンケではまだ字体が安定していなかったとみることができる。頭字的な形と幾何的な形の両方みられる。それゆえ PT の C2 の文字は幾何体とみることがはむづかしく、言い換えとみる必要がある。接字は T 181 と T 88 と T 142c があるが、意味の違いをとりだすことができない。

TC, TS, TFClapida では色の文字は生起しない。それより時代的に新しい PT と TXVIII に色の文字は生起するにすぎない。伯爵の神殿 (Temple of Count/Templo del Conde) の節も色の文字は生起していない [KELLEY 1976: fig. 17]。これは 9.10.15.0.0 頃の建造といわれている [FERGUSON 1977: 59]。それゆえ、色の文字の出現は 9.13.0.0.0 以降とみることができる。TC, TFC, TS の2番目に生起する文字は、TFClapida の2番目に生起する文字 (C6b) の幾何体とみることができる。これは神 K といわれている文字である。TC, TFC では右にたれさがる要素がみられるが、TS では左右にみられる。片方だけでも両方ついていても同じであることは、その他の文字からも確かめられる。頭字体では接字 T 84 は描かれていない。T 142 または T 178 がある場合とない場合があり、これらは期間の文字でもみられるように装飾の文字とみることができる。TXVIII では T I.758:110 に置き代わっているように見えるが、その他の遺跡では T I.758:110 と神 K は共起するので、同価の文字とみることができない。おそらく消えて細部がよくわからないふたます目の文字 B11 に黒の文字素と神 K が生起しているのではなからうか。PT の2番目の文字は他と異なる。Thompson はそのカタログで T 58.291:683b.?:142? と書き下しているが、適切ではない。この文字の左には白の文字 T 58 がみられる。それ以外はのちにみられる T 739 の先駆となるものではなからうか。

3番目に生起する文字は方角の文字である。TC では南、TFC は西、TS は北、TFClapida は東、PT は北であり、TXVIII はほとんど判別不能であるが、日付から西であることがわかる。

4番目には、TC, TXVIII, PT では T 561:23.598:23 の文字が生起している。

この文字は819日曆以外でも生起するので、直接関係する文字とみることはできない。TFC では T 203.?:565a である。

(vi) マヤ暦元に関する節

マヤ暦元すなわち 13.0.0.0.0 4Ahau 8Cumku に関する節はパレンケに2カ所ある。TC の C6b~C7 と TS の D16~N2 の部分である。両者を比べると、TS の D16b の頭文字が TC にはみあたらないだけで、あとはほぼ同じ文字素からなる。ただし TC の D6 は TS では N1 と O1 の2つに分けて書かれており、TS の O1 の左の文字素は TC にはみられない。しかしそれは D6 の右上の接字にあたるので、その接字の頭字体とみることができる。TC の D6 の左上の文字素と TS の N1 の左の文字素はどちらも一部不明であるが、両者のはっきりしている部分から判断して、この文字素は手を表わす文字素であることがわかる。

マヤ暦元は石碑ではパレンケの他には、コパンの St. 23 (9.11.0.0.0), コバー (Coba) の St. 1 (W) (9.12.10.0.0), ピエドラスネグラス (Piedras Negras) の Altar 1 (9.13.0.0.0), キリグアの St. C(E) (9.17.5.0.0), Zoomorph Altar P (9.18.5.0.0), ティラ (Tila) の St. A (10.0.0.0.0) にしるされている [BERLIN 1962: 36; SPINDEN 1924: 34; MORLEY 1937-8: IV: 274]。このうち暦元の節をはっきりとみとめる

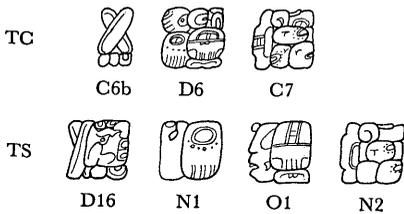


図9 マヤ暦元の節

ことができるのは、コパンの St. 23 とキリグアの St. C である。キリグアの場合は IS で 13.0.0.0.0 がしるされている。コバーを除くと、これも全身像の文字や 819 日曆と同じように、マヤの南西と南東地域でしか出現していない。

IV. 王の履歴と名前の文字

(i) 神々の文字

マヤ紀元前後から Baktun 2 頃までの出来事は、TC, TCalf, TFC, TFCalf, TS, TSalf, TXVIII にしるされている。しかし問題が多く、完全には理解できない。ここでの登場人物は少なくとも4人(体)いる。Berlin が名づけた神 I (GI), 神 II (GII), 神 III (GIII) と [BERLIN 1963], Lounsbury の名づけた Zac Kuk であ

る [LOUNSBURY 1980]。TS の D1 から D2 の文字は誕生の文字 (C1) に続くところから、これも人物のようにみられるが、この節の最後に GIII が生起していること、この日は GIII の誕生日であることから、GIII に言及した文字と解釈可能である (図10-12)。D1 は Chan Bahlum の名を表わす句に生起する文字であり、また D2 には首のないジャガーの文字 T 832 があるところから、それはジャガーを名の一部にとりいれた Chan Bahlum と関係する文字のように思われる。しかし C2D2 の文字は、ティカルの石碑3 やヤシュチランのリンテル47と石碑18、さらには壺に描かれた文字テキストにも生起するので、ジャガーを名の一部にとりいれた Chan Bahlum が好んで利用した文字ということはできるかもしれないが、Chan Bahlum を表わす文字ではないことがわかる。

まず GI, GII, GIII の誕生と考えられている日付をしるす。

GI	1. 18. 5. 3. 2	9Ik 15Ceh	TC, TCalf
II	1. 18. 5. 4. 0	1Ahau 13Mac	TFC, TFCalf
III	1. 18. 5. 3. 6	13Cimi 19Ceh	TS, TSalf

マヤのテキストでは、ふつう前後の日付が DN によりうまく結びついており、日付の解釈に矛盾は生じないのであるが、TC のテキストの場合は、多くの日付が前後とうまく結びつかない。しかしそのほとんどは、他のテキストにしるされている日付を参考にすると、うまく解釈できる。それでもできない箇所が3カ所ある。D1C2の DN8.5.0 に関する部分と、E9F9の 9Ik 0Zac の部分と、P4 から Q9 までの節に生起する日付の3カ所である。最初の箇所は GI に関するところなので、ここで扱うが、その他2つは、それぞれ登場する人物を扱う個所で問題にすることにする。

TC のテキストは IS の 12.19.13.4.0 8Ahau 18Zec ではじまる。D9 までの日付をとりだすと、次のようになる。ここで(3)から(5)までは計算どおりにならない。(3)に DN の 8.5.0 を足すと、13.0.1.8.0 となり、(5)が導きだされないのである。

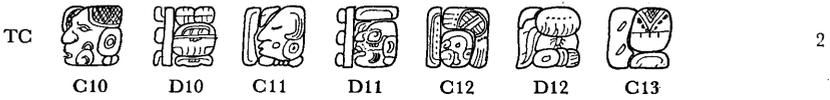
12. 19. 13. 4. 0	8Ahau 18Zec	A1-A13	(1)
1. 0		B13	(2)
<hr/>			
(12. 19. 13. 3. 0)	1Ahau 18Zotz'	A16-B16	(3)
8. 5. 0		D1-C2	(4)
<hr/>			
13. (0. 0. 0. 0)	4Ahau 8Cumku	D3-C5	(5)
1. 9. 2		D5-C6a	(6)
<hr/>			
(13. 0. 1. 9. 2)	13Ik 20Mol	C9-D9	(7)

この解釈はパレンケの碑文を研究した人々を悩ませてきたもので、たとえば

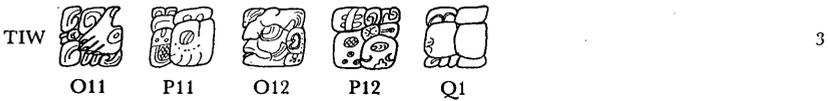
13.0.0.0.0 4Ahau 8Cumku



0.0.1.9.2 13Ik 20 Mol



0.4.12.3.6 1Cimi 19Pax



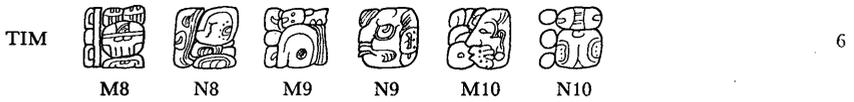
9.10.8.9.3 9Akbal 6Xul



?



9.12.0.0.0 10Ahau 8Yaxkin



9.12.19.14.12 5Eb 5Kayab



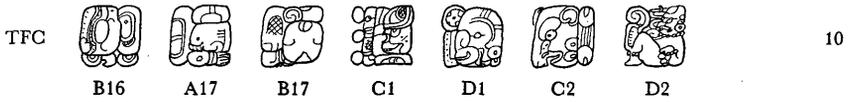
?



1.18.5.4.0 1Ahau 13Mac



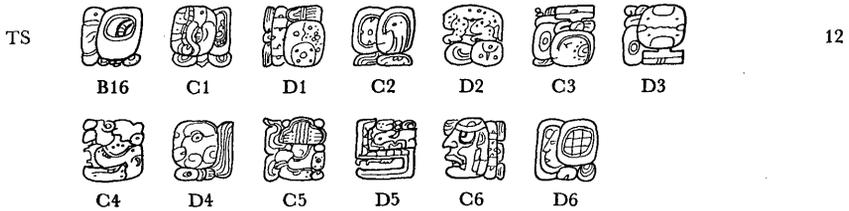
1.18.5.4.0 1Ahau 13Mac



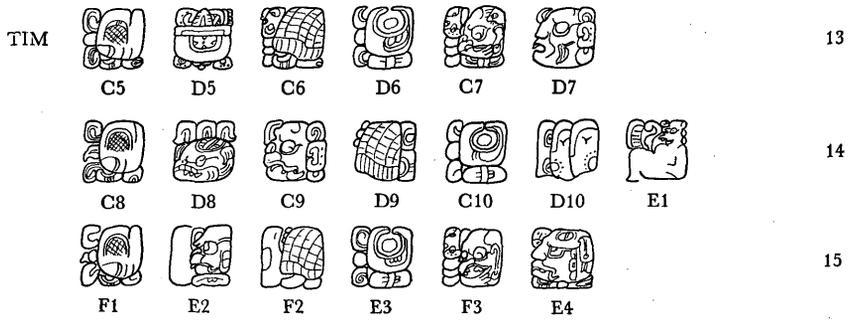
9.12.19.14.12 5Eb 5Kayab



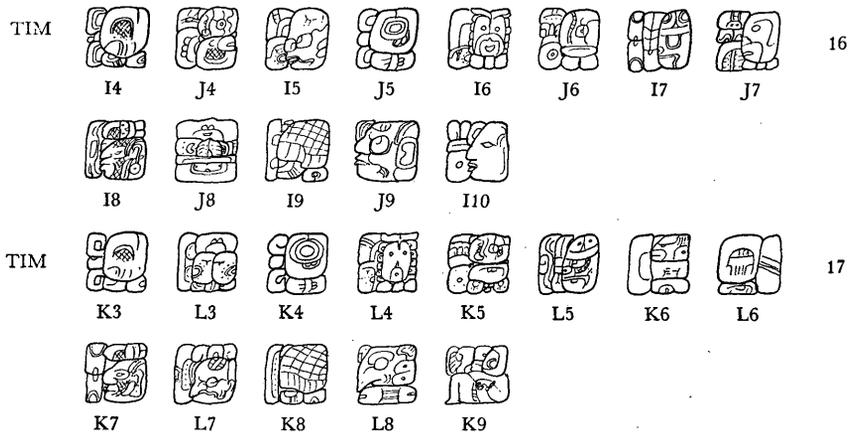
1.18.5.3.6 13Cimi 19Ceh

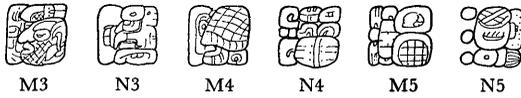
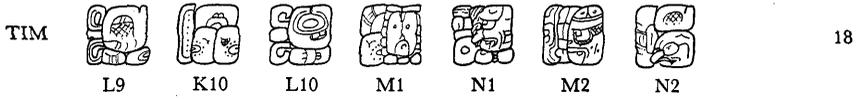


9.11.0.0.0 12Ahau 8Ceh



9.12.0.0.0 10Ahau 8Yaxkin





1.18.5.3.2 9Ik 15Ceh



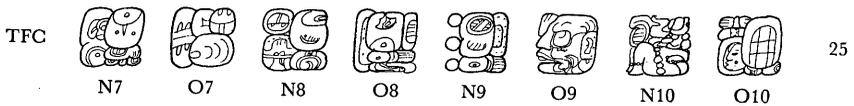
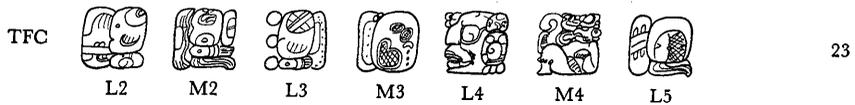
1.18.5.4.0 1Ahau 13Mac



1.18.5.3.6 13Cimi 19Ceh



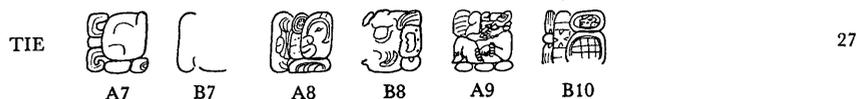
9.12.18.5.16 2Cib 14Mol



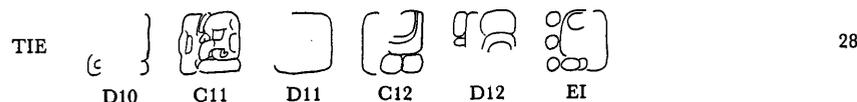
八杉 マヤ文字の分析 II



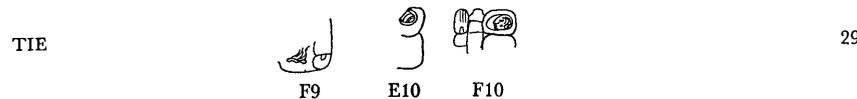
9.4.0.0.0 13Ahau 18Yax



9.5.0.0.0 11Ahau 18Zec



9.6.10.0.0 8Ahau 13Pax?



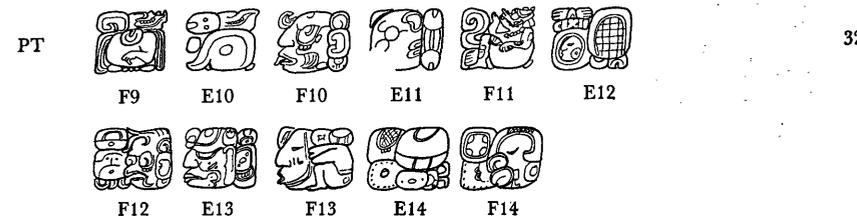
9.11.0.0.0 12Ahau 8Ceh



(9.12.0.0.0 10Ahau 8Yaxkin)



9.10.18.17.19 2Cauac 12Ceh



9.11.13.0.0 12Ahau 3Ch'en



9.12.19.14.12 5Eb 5Kayab

Palace North Façade 40. Bod. No. 208



図10 神々の文字

Thompson は DN の 8.5.0 を修正して 8.5.2 とし, C9D9 にある 13.0.1.9.2 13Ik 20Mol と結びつける説を主張した [THOMPSON 1971: Fig. 53, 1972: 21]。この部分の解釈にはいくつかの説がある。それをまとめると、次のようになる。

- (a) DN を 6.14.0 または 6.15.0 に修正して, (1)または(3)と(5)の日付を結びつける。
- (b) DN を 8.5.2 に修正して, (1)と(7)の日付を結びつける。
- (c) IS を 12.19.11.13.0 1Ahau 8Muan に変え, (4)の DN を足し, (5)の日付をもとめる。
- (d) どこも変更せず, (4)の前に日付が省略されていると解釈する。すなわち,

12. 19. 13. 3. 0	1Ahau 18Zotz'	(3)
12. 19. 11. 13. 0	1Ahau 8Muan	(x)
8. 5. 0		(4)
13. 0. 0. 0. 0	4Ahau 8Cumku	(5)

のように考える [LOUNSBURY 1980]。

8.5.0 のすぐあとには「誕生」の文字 (T 740) があり, その次の文字 (C3) には, 第Ⅱ章で検討した T 679 が接字化されている。それゆえこの部分は, 誕生から T 11: ? : 713 (C3) の文字が表わすものまでが 8.5.0 で, 13.0.0.0.0 4Ahau 8Cumku に至ると解釈できる。しかしそうすると, 主語がない。Lounsbury は次の節の主語の GI (C8D8) が省かれていると解釈している。しかしそうすると, 先にしるした GI の誕生と矛盾する。とはいえ GI の誕生をいわゆる「上向きカエル」文字 (T 740) で表わしたものはないので, この日を誕生日としてもさしつかえない。ところが TFC には GII の誕生が「上向きカエル」でしるされており, 同じ日のことがそれとは別の文字で TFCalf にある (図10-9, 20)。それゆえ, それらは誕生を表わす別の表現とみることができる。TFCalf と同似節は TCalf や TSalf にもあるので, それらも誕生を表わす別の表現と解釈する必要がある。そうすると, やはり GI の誕生は 1.18.5.3.2 9Ik 15Ceh とみななければならない。さらに, C17 には T 679 が接字化した「誕生」文字が生起している (図12-3)。そしてすぐその前には GI が生起している。すぐそのあとの文字 T 74: 565a: 140?.117 (D17) は TCalf, TFCalf, TSalf においては GI, GII, GIII にともなって生起する (図10-19, 20, 21)。これを Kelley は「出現 (emergence)」を表わす文字とした [KELLEY 1965]。しかしいずれも神の文字に密接に結びついて生起するので, これは神の名に関する文字とした方がよいように思われる。この場合 GI である。その日は TCalf にしるされている日と同じ 9Ik

15Ceh である。それゆえ E2 の文字は誕生と同意の文字とみる必要がある (図12-4)。そうすると GI は2度誕生したことになる。ここに Lounsbury の説の弱点があるが、同名の人物が2人存在したとすればよいわけであり、またこれにかわる解釈はないので、氏の説を採用しておく。最初に誕生した方を GI¹ とすることにする。

ところでいまふれた節と類似の節が TS の C9 から D13 にも生起する (図12-5)。両者を比較すると、TC の D15 の文字は、TS では C9D9 に2つに分けて書かれている。同様に、TC の E3 も、TS では C11D11 に2つに分けて書かれている。TC では2つの文字が1つの文字ますに書かれていることがわかる。TC ではその次に GI が生起するが、TS にはなく、その後の文字を比べると、TS では GI が省略されていることがわかる。TC では 9Ik 15Ceh のあと、E2F2 に誕生と同義と考えられる文字が生起するが、TS ではこれも省かれている。ここにテキストでは我々にとっては重要な部分が簡単に省略されることが納得される。

誕生と同義とみられる E2 の文字は、T 11.217:25:501 と書かれているが、alfarda では T 204.217:526 と書かれている。T 11=T 204 であることはすでにいくつもの例から確かである。同一日のことであり、同じ接字が用いられていることから同意の文字とみてさしつかえない。Lounsbury は T 25:501=T 526 であることに気がついた [LOUNSBURY 1980: 112-113]。T 25 は Landa のアルファベットの ca であり、T 526 は日の文字 Caban で cab を表わす。T 501 は Kelley により ba と読まれていた [KELLEY 1962: 306-7]。すなわち、cab という表語文字が ca と ba という表音文字で書き換えられているのである。

さて TC の C3 に登場する文字 T 11:?:713 の真ん中の部分は、Thompson も不明としており [THOMPSON 1962]、よくわからないが、もしそれが PT の E8、ならびに TXVIII の B17 に生起する同似構成の文字中の文字素と同じものであるとしたなら、たいへん興味深い(図11)。すなわち、いずれも IS の次に819日暦があり、そのあとに生起する文字であるからである。誕生から数えて、8.5.0 (TC)、7.0.19 (PT)、14.1.12 (TXVIII) となっていることもその意味を考える上で参考になるに違いない。PT と TXVIII ではこの文字の次に王名を表わす文字がきて、そのあとに T 704 があり、さらに三体の神 (GI, GII, GIII) または三体の神のいずれかを示す T III.597:59.35 が生起している。T 704 は王と神との関係を表わす文字と推測でき、問題の T 11:?:713 は王が主語とみなすことができる。TC の場合も主語が必要と思われる。それは GI である可能性が強い。TC の場合、それはマヤ暦の紀元の日であり、その特別な日を祝うことに関する文字と推測できるが、その他の生起例は誕生から8年ま

12.19.11.13.0 1Ahau 8Muan?



9.10.18.17.19 2Cauac 12Ceh



9.13.0.7.0 5Ahau 8Ch'en



図11 鹿の足と手の文字

たは14年たったときに行なう儀式ということ以上の説明はいまのところできない。**T?**と転記した文字素は **PT** と **TXVIII** の生起例からみて、鹿の足を表わしているように思われる。ちなみにこの文字素は他でも生起し、その場合ついている主字が異なる(図28-17: F2)。

T 679 は **T 181** と共起しない。**T 1** もほとんど **T 181** と共起しないが、**TXVIII** の **B17** の場合は共起している。**T 181** はユカテク語の動詞の過去(完全相)の **-ah** を表わす文字素として広く認められている。しかし **-ah** はふつう他動詞につく形態素である。「誕生する」はいうまでもなく自動詞である。自動詞の過去にはふつう **-ah** はつかない。もっとも自動詞の下位類の位置動詞の場合に **-l-ah** が生起するし、本来的には名詞根と思われる自動詞の完全相でも **-n-ah** という形で **ah** をとりだすことができる。それゆえ **T 181** を **-ah** と読むことを否定することはできない。しかしそうすると、**-l-** とか **-n-** にあたる文字素がないといけない。誕生を表わす文字、いわゆる「上向きカエル」は **pok'** と読みうるが、その語彙は現代ユカテク語には残っていない。それゆえ **-n-** を必要とするかどうかわからないが、現在誕生を表わす語彙である **sihil** から類推すると、**-n-** が用いられたと考えてもよい。そうすると、「誕生」の文字についている接字がそれを表わすと仮定できる。しかしながら、その文字素は少なくとも **T 24**, **T 126**, **T 246** とあって、しかも細かいところが異なり、一定ではない。しかも **T 181** がつく場合もつかない場合にも生起しており、言語学的にきれいに説明できるものではない。

もともと **-ah** という読みは **Landa** の残したアルファベットの **ha** からであり、そ

れほど根拠のしっかりしたものではない。これに対し T 1 は Landa のアルファベットの u であるが、こちらは3人称の人称接辞を表わすことが広く認められている。これが T 181 とふつう共起しないことは言語的に説明可能である。碑文時代のマヤ語はユカテク語に近いことはすでに論じた [八杉 1983]。ユカテク語そのものではないにしても、低地マヤ語であることはもはや疑いの余地はない。低地マヤ語の特徴の1つに、相の違いによって人称のとり方の異なる、いわゆる分裂能格 (split ergative) がある。すなわち自動詞の不完全相では人称A型一動詞という形をとるが、完全相では動詞一人称B型となる。人称A型 (ergative) の3人称は u であるが、人称B型 (absolutive) の3人称はゼロ (-#) である。それゆえ u を表わす T 1 は、自動詞の不完全相と他動詞には必要であるが、自動詞の完全相では必要ない。つまり、T 181 があり、T 1 がいないのは自動詞の完全相であり、T 1 と T 181 が共起している文字は、他動詞の完全相ということができる。この見方が正しいとすると、T 181 は動詞の過去 (完全相) 標識と、さらに限定してもよいことになる。ところが言語的な特徴をそのまま動詞と考えられている文字に適用することはできない。たとえば有名なヤシュチランのリンテル8は他動詞文で「鳥ジャガーが宝石頭蓋骨を捕えた」という意味になるのであるが、捕えたという動詞には T 181 は生起するものの T 1 は生起していない。受身文という見方も可能であるが、そうするとこんどは受身標識がないので、その見方を採用するわけにもいかない。

T 181 が T 679 と共起しないことは、T 679 を前置詞とみなしたことから説明可能である。前置詞のあとには動詞は生起しないといえよ。ところがパレンケのテキストの中にすでにそれに違反するものがある。PT の N7 には T 679 と T 181 が共起しているのである。この文字は死を表わす。それゆえ動詞とみられる。T 181 を動詞の標識として認めると、ではなぜ T 679 が共起しているのか説明できない。言語的なアプローチが簡単には通用しないのである。

T 679 の検討から横道にそれたが、ふたたび三体の神の文字にもどりたい。GI, GII, GIII の文字が生起する場所をとりだすと、表14のようになる。少なくとも GI は22回、GII は17回、GIII は14回生起する。GIII は登場すべきところが損傷をうけている場合 (TSalf-C1) と、違う文字で置き換わっている場合 (TIM-E4) があり、それらを含めている (表では*でそれらを表わしている)。GI が単独で生起する例は9例で (表14-1)、GII, GIII が単独で生起する例はそれぞれ3例 (表14-2) と1例 (表14-3) である。それぞれの節では単独であるが、同似節をあわせてみると、GI, GII, GIII が一組になる例は4例あり (表14-4, 5, 6)、GI, GII, GIII が一組に

表14 神々の文字の分布

		I. 512	GI	758.110	GII	GIII	III. 597. 35:59	III. 597:59. 35
1	TC	C8	D8					
	TC		D11?					
	TC	C16	D16					
	TS		Q10					
	TCside		5					
	TXIV		H7					
	TIM	M9	N9					
	TIW		O12					
2	TCbod. Cat. 273	B6a	B6b					
	TFC			C2	D2			
	TFC			D5	C6			
3	TFClap			D9a	C8			
	TS					C6-D6		
4	TIM		D7		E1	*E4		
	TIM		J9	L8	K9	M5	N5	
5	TCalf.		B2					
	TFCalf.				C1			
	TSalf.					*C1		
6	TC							O8
	TFC				M4			L3
	TS					O6		N6
7	HS		C2b		C2c	C2d		
	TFC		O9		N10	O10	N9	
	PT	E10	F10	E11	F11	E12		
	PT	H15	I6		J6	I7		
	TIE		B8		A9	B9		
	TIE		D11		C12	D12	E1	
	TIE		F9		E10	F10		
	TIM		E6		F6	E7	F5	
	TIW		A5		B5	A6	B6	
	8	Palace North		H5a		H5b		
Façade, Cat. 40								
TIW								N11
	TXVIII							B18a

なって生起する例は9例ある(表14-7)。

GIが単独で生起する例は9例あるが、そのうち4例にはT I.84:512(785?)がその前に生起している(図10-1,6,7, 図12-3)。GI, GII, GIIIが組になって生起する例中でも2回その文字T I.84:512が生起するので(図10-32), それはGIに密接に関係する文字とみることができる。同様に, GIIに密接に関係する文字はT 758.110 また

は T 758:110 である。(T 758 は Thompson のカタログでは3つにわけられているが、いずれもここで生起する文字とは異なる。T 758a では右上に T 110 が接中文字化されている。これをとると、ここで問題にしている文字と同じになる。しかし問題にしている文字では、T 110 は後接字として生起するので、T 758 とは別の番号をあたる必要がある。ここでは T 758d と仮に番号をつけておく。) GI の文字は T 1011 と分類されているが、生起する例はいずれも Thompson のカタログどおりである。横顔で、目は大きく、目の中に上からノの字で瞳が描かれている。そして、口のうしろにえらのようなひげをもち、後頭部は3つの要素からなっている。耳飾りは貝である。描き方に若干の差はあるものの、すべて同じ文字である。ただ1例だけ接字がついており、GI を表わしているとは思えないものがある(図10-2)。TC の D11 に生起する文字で、8の数字と T 48? がついており、GI を表わしていないように思われるが、主字は T 1011 であり、GI そのものである。まわりの環境にも GI とともに生起する文字があるので、この文字(D11)は、接字がついているが、GI を表わすものとみることができそうである。8を表わす頭字体の文字はとうもろこしの神を表わすといわれる [THOMPSON 1971: 134-135]。またコパンの石碑 I の C6a やドレスデン絵文書に8の数字を線で囲み、接字にとうもろこしを表わすといわれる T 84 が生起する [THOMPSON 1971: 272]。T 84 はさきほど述べたように、GI の前に生起する文字の接字である。そういう連関から8が T 1011 の接字として生起しているように思われる。そうすると、C11 の女性の頭文字 T 1000F は数1を表わすのではないかと考えられてくる。すなわち T I.84:512 を T 1?.1000F:178? と T VIII.48? と書きかえていると解釈できるのである。T I.84:512 の T I が T 1?.1000F:178? にあたり、T 84:512 が T VIII.48? にあたるとみると、GI を表わす文字と推測された C11-D11 がすっきりするのである。

いまふれた節には、T VI.168.561:23 (D10) と T 11.187:1016 (C12) が生起している。これは GI とともに3例生起する(図10-2,5,7)。ここで T 11 は同価の T 1, T 232 と交替しているので、一括して T 1.187:1016 と書くことにする。T 1.187:1016 はないが、T VI.168.561:23 が生起する例は図10-6にみられる。保存庫にある『十字の神殿』の断片 TC Bodega 221 (Catalog 273: [SCHELE & MATHEWS 1979]) では、6が頭字体で表わされている(図10-7)。A6b はその他3例にはみあたらない文字であるが、これはこの節が生起する 9.12.19.14.12 5Eb 5Kayab に関係する文字であることは、同じ日の節をみることでわかる。すなわち TFCalf の G2 に同じ文字が生起しているし、主字を幾何体にしたものは TCalf の G2 と TSalp の

G2にある。

図10-5の3番目の文字 T 1.528.151:24 は図10-6では T 204.528:151:24 となっている。T 1 と T 204 は同価であることはすでに幾多の例から明らかである。T 151の向きは逆であるが、同じであることはその生起環境から問題ないであろう。図10-2, 5, 6, 7を比較すると、T VI.168.561:23 と T 1.187:1016 の中間に文字があることから句ではないこと、T 1.187:1016 は図10-6では省かれていることから、省きうる文字であることがわかる。またこれらの文字は GII でも使われているので(図10-11)、GIの称号ではないことがわかる。図10-11ではその前に9の係数をもつ頭字体が生起している。GIでは6であったものが GII では9になっており、T 561は空を意味するところから、層状になったマヤの天空観念を思い起させられるが、それと直接に関係づける証拠は残念ながらない。

図10-13, 14, 15 は同似節である。また図10-16, 17, 18 も同似節である。TIM の D5 (図10-13) は J8 (図10-16) と同じ文字であるが、この文字は TC や SARCO の場面に登場するばかりでなく、王の肖像の頭飾りとしてもよく生起する(たとえばコパン石碑 H, I, 彫刻紋壺など)。GIに関係する称号が王の頭飾りとして使われているので、神聖なる王権の象徴とみなせよう。これと同位置に生起するのが、D8, L7 と E2, N3 であり、それぞれ GII, GIII に関係する称号とみなすことができる。ほとんど同一の文字が用いられているので、T 1, T 11, T 191, T 204, T 232 の接字が交替できることがわかる。D10では Baktun が幾何体で書かれているが、C7, F3では頭字体になっている。Baktunの幾何体は L3, K10にも生起する。下接字として T 60がついているものと、ついていないものがあるので、これは随意的な要素とみなせる。J6, K5, N1 は同価の文字と考えられるので、T 740:23 が N1 の頭文字と同価となりそうである。

生起環境から、I10 は TIM の M10 (図10-6) と同じ文字とみられる。白 (T 58) と数9の頭字体 (T 1003a) からなりたっているように思われる。

TFC の L4 は TXIV の G8 と同じ文字である(図10-23, 10-8)。TFCでは GIIの文字と関係しており、TXIVでは GIの次に生起する。

TFC の N11-N12 (図10-25) は PT の F13-F14 (図10-32) と同じ文字であり、同じ生起環境にある。TFC の N12 は、TXIV の H9 と同じであり(図10-8)、おそらくハゲタカを表わしている頭の部分は、F14では T 168 に置き換わっている。頭の部分には Ahau があるので、Ahau と T 168 が交替できるものと考えられる。

(ii) *Zac Kuk I*

Zac Kuk は白 (*zac*) の文字素とケツァル鳥 (*kuk*) の文字素からなるので, *Zac Kuk* と名づけられているが, 同名の人物が別に登場するので, *Zac Kuk I* とする。しかしながらよくみると, 接字は白を表わす T 58 ではなく, T 348 である。そして主字はケツァル鳥 T 744 ではなく T 793b である。それゆえ *Zac Kuk* と呼ぶのは問題である。のちに *Zac Kuk II* のところで述べるように, *Zac Kuk II* がしるされている SARCO の 45, 47, 54 では T 58 が使われているが, その場合は T 744 についているのであって, T 348:793b と交替することを裏づける証拠は日付による以外にないのである。しかし T 348:793b をどのように呼んだらよいのか適切な名がないので, 単にあだ名として *Zac Kuk I* ということにする。

Zac Kuk I は TC, TFC, TXVIII に登場する。関係する日付をあげると, 次のようになる。

12. 19. 13. 3. 0	1Ahau 18Zotz'	誕生	TC
13. 0. 0. 0. 0	4Ahau 8Cumku	PE	TC
1. 18. 5. 3. 2	9Ik 15Ceh		TC
2. 0. 0. 0. 0	2Ahau 3Uayab	PE, 儀式	TFC
2. 0. 0. 10. 2	9Ik 0Zac	即位	TXVIII, (TC)

まず TC からみる。IS 12.19.13.4.0 8Ahau 18Zec の次には, いわゆる 819日節がある。その日付は 12.19.13.3.0 1Ahau 18Zotz' である。この日に *Zac Kuk I* (C1) は誕生したと考えることができる。誕生の文字は E7 にもある。その前の DN は 2.1.7.11.2 であり, これはテキストの構造からみて, 誕生の日と即位の日 9Ik 0Zac (E9F9) をつなぐ数とみなすことができる。ところが, 計算で導き出した日付と実際の文字とのあいだにくい違いがある。通常は819日節の日とは DN は結びつかないが, この場合, IS の日とではなく819日節の日と DN を結びつけないと, (2.1.0.14.2) 9Ik 0Yax の日が導きだせない。

(12. 19. 13. 3. 0)	1Ahau 18Zotz'	(A16–B16)	819日節
<u>2. 1. 7. 11. 2</u>		(E05–F06)	DN
(2. 1. 0. 14. 2)	9Ik 0Yax	(E09–F09)	
<u>3. 6. 10. 12. 2</u>		(E10–F11)	DN
(5. 7. 11. 8. 4	1Kan 2Cumku)		

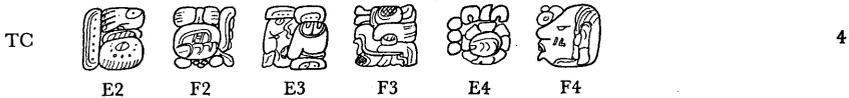
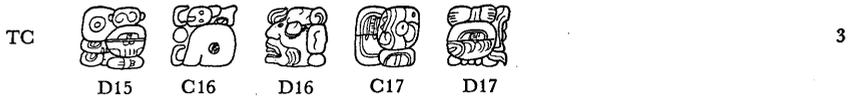
ところが F9 の文字は, 明らかに Yax ではなく Zac である。TXVIII には 2.0.

0.10.2 9Ik 0Zac という日があり、それは Zac Kuk の即位の日であることが示されている (TXVIII: C10-DC12, 図12-7)。TC のテキストでも 9Ik 0Zac と書かれている。それゆえ、それを導きだす数をまちがえたとみることができる。すなわち、2.0.0.10.2 9Ik 0Zac であらねばならないのに、2.1.0.14.2 9Ik 0Zac と勘違いした

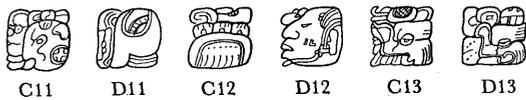
12.19.13.3.0 1Ahau 18Zotz'



1.18.5.3.2 9Ik 15Ceh



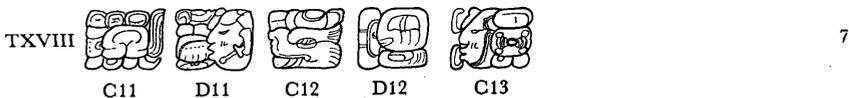
1.18.5.3.6 13Cimi 18Ceh



2.0.0.0.0 2Ahau 3Uayab

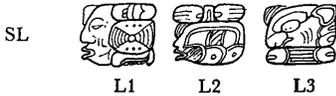


2.0.0.10.2 9Ik 0Zac





8



9

図12 Zak Kuk I

と解釈したい。しかし、文字 Yax の接字 yax を zac とまちがえてしまったとみる見方もある。これだと、TXVIII の 2.0.0.10.2 9Ik 0Zac の日付、ならびに TC の 9Ik 0Zac の文字を説明できなくなり、やはり先に解釈したもののほうがよいように思われる。

日付が計算からうまくあわない場合、テキストのまちがいで済むのが一番簡単な方法であるが、マヤのテキストにはまちがいはきわめて少ないので、表面上はまちがいとみなされるものがあったとしても、その裏にはなにか隠された意味があるのではないかと考えるほうが、より健全な見方であることは十分承知している。しかしこの場合、碑文をしるした時代より3000年も前の時についてのことであるし、TC 以外のテキストである TXVIII からの支えもあるので、まちがいとみて問題ないのではなからうか。

Zac Kuk I を表わす句は最大限3つの文字からなる。それをよく示しているのが TS の C12-C13 である (図12-5)。T 86:69:610, T 1000, T 314:793b と書ける。それを TFC と TXVIII では2文字ますに縮めて書いている (図12-6, 7)。TC の B17 では T 69:1000 となっているが (図12-1)、それは T 86:69:610, T 1000 を縮めたものと思われる。TC の F3-F4 はよく似ているが、E4 の文字がまったく異なり、T III.125:831 となっている (図12-4)。F4 は T 1000 で同じであるが、Zac Kuk の文字が最初にあり、生起順が逆になっている。構造的には異なるが、3つのうち2つの文字が同じであるので、よく似た意味を表わしているものと思われる。

TFC の D12-C13 の文字は、TFC の中央場面の左下に描かれているいわゆる Cauac Monster の目の中に刻まれている文字と同じ文字である (図12-6)。そして C14 は TFCalf の H2 に生起する文字と同じである。

TXVIII の C13 は (図12-7)、SL の L1 の文字と同じである (図12-9)。これは SL に登場する右の女性を表わす文字にちがいない。その女性と Zac Kuk I の関係を示すのが、TXVIII の D12 の文字と考えられる。この女性の文字は、TXVIII のスタッコー文字にもみられる (図12-8)。

Zac Kuk I はその履歴からみて、神話上の人物である。12.19.13.3.0 1Ahau 18Zec

が誕生した日であるが、それより 1.8.0(520日)まえの 12.19.11.13.0 1Ahau 8Muan は GI¹ の誕生であった。これが父で、Zac Kuk I が母であり、子供が GI, GII, GIII であると、年代的に非常に都合がよい。

(iii) *Kiix Chan*

Kiix Chan は TC にのみ生起する。kiix とはとげとか針という意味であり、chan とは蛇の Chol 語読みである。上接字の葉のようなものを血を流す儀式につかう刺針とみ、主字を蛇とみてあだ名をつけたものである²⁾。

TC の F12 の 9Ik はその前にある 9Ik 0Zac (E9-F9) の略と思われる。E12 はいわゆる Anterior Date Indicator であり、誕生の文字には T 679 が接字化されているので、すでに第 II 章で考察したように、E10 から E13 までは、9Ik から数えて誕生までが DN 3.6.10.12.2 であると解釈できる。

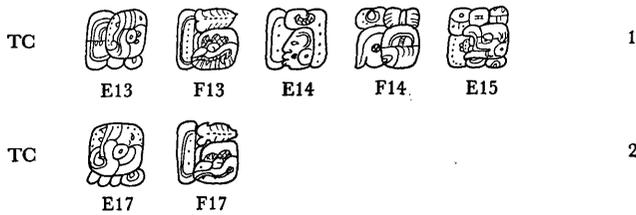
(2. 1. 0. 14. 2)	9Ik 0Zac (Yax)	E9-F9	
<u>3. 6. 10. 12. 2</u>		E10-E12	DN
(5. 7. 11. 8. 4	1Kan 2Cumku)		誕生
<u>1. 6. 7. 13</u>		F15-F16	DN
(5. 8. 17. 15. 17)	11Caban 0Poop	Q2-P3	即位

上記の計算から、すでに述べたように、計算の基準は 2.1.0.10.2 9Ik 0Zac ではなく、2.1.0.14.2 9Ik 0Yax であることがわかる。

3 回生起する名前の文字は同じものとみることができ、F13 の名前のあとには、他 2ヶ所では生起しない文字がある (E14-F14)。F14 の文字は GI に関する文字のようであり、それが GI を表わすとすると、E14 は Kiix Chan と GI の関係をしめす文字と推測される。たしかに F14 の左の文字は GI に密接に関係する文字であり、F14 の右の文字も後接字 T 178c.117 のついた形で生起した。しかし F14 の右の文

2) 筆者はすでに碑文時代の古代マヤ語では k は ch に口蓋化してはいないと指摘している [八杉 1983]。Schele も、Oc の文字が後継指名を表わす文字ではないかという議論のなかで、k は ch に口蓋化してはいないことに気がついたようである [SCHELE 1984]。chan と読んだ T 764 が蛇を表わし、それが名として使われていたとしたら、kiix can [k'iix kan] と表記しなければならぬであろうが、どちらにしても表音表記による例がないので、証明はできない。そこで Kiix chan と呼んでおくことにする。同様に、Chan Bahlum という名の王をのちに扱うが、Chan Bahlum とは、この王の文字が蛇とジャガーの結合した文字であるところから名づけられたものである。すなわち Chol 語の蛇は chan であり、ジャガーは bahlum であるところから名づけられたものである。これも、もし Chan Bahlum の文字が蛇とジャガーからなり、蛇=ジャガーと読まれていたのなら、chan は can にしなければならないのであるが、その文字を表音的に書き換えた例はないので、それを証明することはできないし、またすでに有名になってしまったので、Chan Bahlum と表記することにする。

5.7.11.8.4 1Kan 2Cumku



5.8.17.15.17 11Caban 0Poop



図13 Kiix Chan

字はその他の王にもよく生起する文字であり、Kiix Chan のタイトルとみたほうがよいように思われる。ともあれ、Kiix Chan 以前の登場人物が神話上の人物、神であったのに対し、Kiix Chan は人間であることが、誕生から即位の年数が人間の生存範囲にあることや、パレンケの紋章文字 (E15, Q3) がついていることからわかる。しかしそれが実在の人物であったかどうかはわからない。

(iv) *Kuk I*

Kuk I は TC の P4 から Q9 の部分に登場する。Q5 に生起する文字はケツェル鳥 (kuk) と認められている文字であるところから、Kuk と呼ぶことにする。しかしこの文字をもつ人物は他にもいるので、Kuk I ということにする。

P4 から Q9 の部分は、「5Cimi 14Kayab に誕生し、誕生から即位まで 1.2.5.14 で、即位の日は 1Kan 2Kayab」と読み下すことができる。しかしそれらは長期暦のいつにあたるのであろうか。Berlin はテキストの左を神上話の出来事、右を歴史上の出来事とみたが [BERLIN 1965b], ここでもそのようにみると、次のように長期暦上の日を設定することができる。

8. 18. 0. 13. 6 5Cimi 14Kayab 誕生

8. 19. 15. 3. 4 1Kan 2Kayab 即位

しかし、2つの日は DN 1.2.5.14 により結びつかない。

(8. 18. 0. 13. 6) 5Cimi 14Kayab P4-Q4 CR

1. 2. 5. 14 P6-Q6 DN

(8. 19. 15. 3. 4) 1Kan 2Kayab Q8-P9 CR

8.18.0.13.6 5Cimi 14Kayab



8.19.15.3.4 1Kan 2Kayab



図14 Kuk I

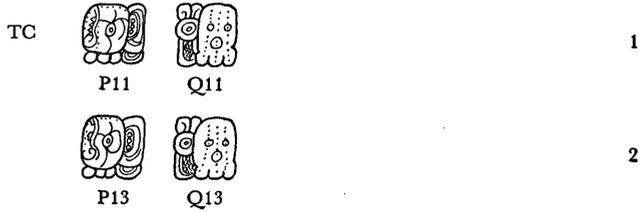
5Cimi 14Kayab と 1Kan 2Kayab の日の間隔は 1.14.7.18 であり、どこに長期暦の日を設定しても両者は結びつかないのである。テキストの構造から、「5Cimi 14Kayab に誕生し、誕生から即位まで 1.2.5.14 で、即位の日は 1Kan 2Kayab」と解釈して問題はない。すると CR か DN の書きまちがいとしか解釈のしようがない。

Kuk I の文字は TFC の E8 にも登場するように思われる(図14-4)。Kuk I に続く文字、TC の Q9 と TFC の E9 が非常によく似ているからである。しかし、左接字が異なる。TC の Q9 は紋章文字の資格をそなえているのに対し、TFC の E9 の方はそなえていない。後者は TC の S2 と同じ文字のように思われる。TC の S2 は下接字がついているが、同じ文字としたなら、TC の S2 はその環境から紋章文字ではないので、TFC の E9 も紋章文字ではないということが出来る。さらに、TC の Q5 でははっきりしないが、TFC の E8 では、耳がジャガーの耳で描かれているし、TFC の文脈で Kuk I が登場する必要は認めがたい。それゆえ TFC の文字は Kuk I ではない可能性が強い。

(v) *Octopus*

この人物も手持ちの文献では X とか Casper と名づけられている。この人物を表わす文字は TC の Q11, Q13, Q16 に生起する。いずれも同じ文字であるが、何を表わす文字かわからない。しかしここに似ているので、Octopus とあだ名をつけて

8.19.6.8.8 11Lamat 6Xul



8.19.19.11.17 2Caban 10Xul



図15 Octopus

おく。T 93.543 と書き下せる。P10 から R2 までの部分は、「11Lamat 6Xul に誕生し、誕生から 13.3.9 たった日 2Caban 10Xul に即位し、即位から 9Baktun という期間の完了の日 8Ahau 13Ceh までに 6.3」と読み下すことができる。長期暦上の日に直すと、

(8. 19. 6. 8. 8)	11Lamat 6Xul	P10-Q10	誕生
<u>13. 3. 9</u>		P12-Q12	DN
(8. 19. 19. 11. 17)	2Caban 10Xul	P14-Q14	即位
<u>6. 3</u>		P15	DN
9. (0. 0. 0. 0)	8Ahau 13Ceh	Q17-R2	PE

となる。

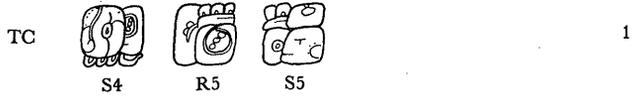
(vi) *Moon Cauac*

Moon Cauac は、それを表わす文字 (TC の R5-S5) の主字にそれぞれ月と Cauac の文字素があるところから、そのように呼ばれる人物である。Moon Cauac が登場する節 R3 から S7 の部分は、「Moon Cauac の誕生から即位の日 3Etz'nab 11Xul まで 1.8.1.18」と読み下すことができる。長期暦に直すと、次のようになる。

(9. 1. 4. 5. 0)	12Ahau 13Zac		誕生
<u>1. 8. 1. 18</u>		R3-R4	DN
(9. 2. 12. 6. 18)	3Etz'nab 11Xul	R7-S7	即位

TC にしか登場せず、しかも文字の細部が不明であるのでよくわからないが、名前を表わす R5-S5 は T 21.68:683b, T 58.219:528 と書けるのではなからうか。

9.1.4.5.0 12Ahau 13Zac



9.2.12.6.18 3Etz'nab 11Xul



図16 Moon Cauac

(vii) *Cauac I (Chaac I|Chaacal I)*

Cauac I は TC と TIE, SARCO に登場する。名を表わす文字に Cauac の文字素をもった人物はさらに 2 人登場するので、Cauac I とする。関係する日を取りだすと、次のようになる。

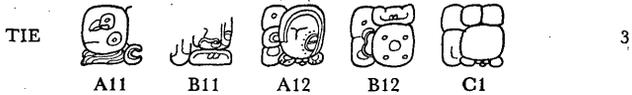
9. 1. 10. 0. 0	5Ahau 3Zec	誕生	TC
9. 3. 6. 7. 17	5Caban 0Zotz'	即位	TC, TIE
9. 4. 0. 0. 0	13Ahau 18Yax	PE	TIE
9. 4. 10. 4. 17	5Caban 5Mac	死	SARCO

TC では1文字ますに書かれているが(図17-1), TIE では2文字ますに分けて書か

9.1.10.0.0 5Ahau 3Zec



9.3.6.7.17 5Caban 0Zotz'



9.4.10.4.17 5Caban 5Mac



図17 Cauac I

れている(図17-3)。TC では文字
ますを節約するために2文字を1文字
ますに書いたと思われる。TC に生起す
る Cauac I を表わす文字の右上と左
上の文字素は細部が不明であるが、
TIE に生起する文字から復元可能で
ある。TC の左上の文字素は T 229 で

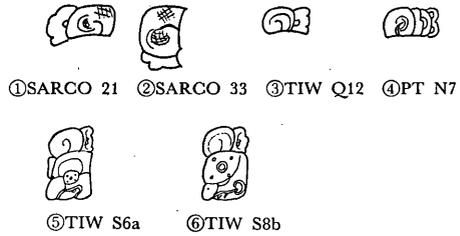


図18 死を表わす文字

ある。生起環境からみて、形は若干異なるが、TIE の A12 の左の文字素、SARCO
の真ん中上の文字素と同じものとみる必要がある。そして右上の文字素は T 238 と
T 23 である。

3度生起する Cauac I の文字の比較から、SARCO の17の文字ますには3つの文
字が収まっていることがわかる。ここでは T 23:585a は T 244?:522 と書き換えら
れている。Thompson は T 244? としているが、その文字素ではないので、T 244
を T 244a として、SARCO に生起するこの文字素を暫定的に T 244b としておく。

SARCO に生起する左の文字は死を表わすものとみられている。その主字は T
585a である。T 585a は TC と TIE でも主字として生起している。しかし接字は
異なる。TC と TIE では T 238.23 に対して、SARCO では T 100 である。両者
は意味が同じとは思えない。主字が同じでも接字が異なると、意味が違うという例に
あげられよう。

Thompson は SARCO の接字を T 100 としているが、生起場所の違いで形が異な
るので、ここにその異なる形を掲げておきたい(図18)。この文字素は2つの部分から
なりたっている。しかし1つの文字素であることは、横位置に生起する形と縦位置に生
起する形を比べてみれば納得できる。2つの文字素でできていれば、縦位置の文字の構
成が逆に、すなわち小さな山形の要素が上にくるはずである。横位置だと順序が逆と
なる。これはたとえば T 59 などの文字素にみられるもので、よくおこる現象である。
これも1つの文字素である判定になる。この文字素は貝を表わしているように思われ
る。貝は地下世界のシンボルであり [THOMPSON 1971: 133-134, 173*etc.*], 死を
表わす文字に生起するにふさわしい。TIW の S8b, S6a では T 585a は頭字体に置
き換わっている(図18-5,6)。目や額に T 585 の特徴である5つの点が描かれている。

(viii) *Kan Xul I (Hok I)*

Kan Xul I は TC, TIE, TS, SARCO に登場する。「歯痛の文字」のように帯を

9.2.15.3.8 12Lamat 6Uo



9.3.1.15.0 12Ahau 8Ceh



9.4.14.10.4 5Kan 12Kayab



9.6.11.0.16 7Cib 4Kayab



図19 Kan Xul I

頭から顎にかけて巻いているところから Hok といわれており、また Kan の文字と動物 Xul または365日暦の Xul の文字からなるところから、Kan Xul とあだ名がつけられている。同一の名がのちにもでてくるので、ここでは Kan Xul I ということにする。関係する日付は次のようになる。

9. 2. 15. 3. 8	12Lamat 6Uo	誕生	TC
9. 3. 1. 15. 0	12Ahau 8Ceh		TS
9. 4. 14. 10. 4	5Kan 12Kayab	即位	TC, TIE
9. 5. 0. 0. 0	11Ahau 18Zec	PE	TIE
9. 6. 0. 0. 0	9Ahau 3Uayab	PE	TIE
9. 6. 11. 0. 16	7Cib 4Kayab	死	SARCO

TIE は名を表わす部分が損傷を受けており、文字を識別できない。名を表わす文字は4度生起する。TC の S15 と TS の P4 は同じ文字である。T 281 (kan) と T 23 が T 684b についている (T 281:23.684b:142)。SARCO の 19b では T 281 (kan) と T 23 は T 684b の上にあり、SARCOwall では T 281 が T 684b の目にはいつて、T 23 は省略されている。

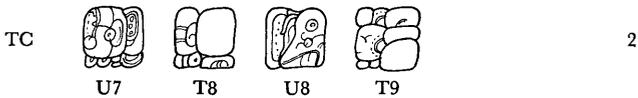
(ix) *Cauac II (Chaac II|Chaacal II)*

Cauac II の文字がはっきりみられるのは SARCO の 21 と SARCOwall であり、その他は不鮮明である。関係する日を挙げると次のようになる。

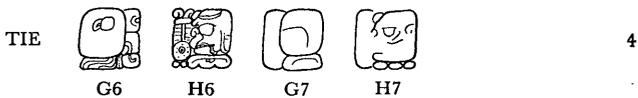
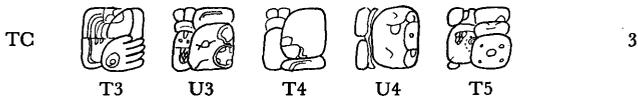
9. 4. 9. 0. 4	7Kan 17Mol	誕生	TC, TC
9. 6. 11. 5. 1	1Imix 4Zip	即位	TC, TIE
9. 6. 13. 0. 0	9Ahau 18Muan	PE	TIE
9. 6. 16. 10. 7	9Manik 5Yaxkin	死	SARCO

TC の T9 と T5 は細部が消えているが、T9 は Cauac I と同じ T 229:528:142. 238:23:585 であろう。その文字の前に2文字生起している。TC の T4-U4 と TIE の G7-H7 はよく似ており、おそらく同じ文字であろう。そうみると TIE では名前の文字 T 229:528:142.238:23:585 がなく、G7-H7 だけでよいので、それは Cauac II の名の延長とみることができる。TC の T8-U8 は、TC の T4-U4 と TIE の G7-H7 の文字とは異なる。しかし生起環境が同じなので、言い換えとみた

9.4.9.0.4 7Kan 17Mol



9.6.11.5.1 1Imix 4Zip



9.6.16.10.7 9Manik 5Yaxkin



図20 Cauac II

い。SARCO では、Cauac I と同様、T 23:585 は T 244b:522 と書き換えられている。SARCOwall では T 23:585 は省略されて、T 229?:23?.528.238.142 となっている。接字のつき方が異なるが、同じ接字であるので、それぞれの位置はこの場合かなり自由であったと考えなければならない。

9.4.10.1.5 11Chicchan 13Ch'en

TC			1
	U9	T10	
TC			2
	T13	U13	
TC			3
	T16	U16	

9.6.18.5.12 10Eb 0Uo

TC			4
	T17	U17	
TIE			5
	I3	J3	
			
	I4	J4	

9.7.0.0.0 7Ahu 3Kankin

SARCO		6
	24	

9.7.5.0.0 13Ahu 18Ceh

TIE						7
	I11	J11	I12	K1	L1	

9.7.9.5.5 11Chicchan 3Kayab

SARCO			8
	26	27	
SARCO Wall			9

図21 Bahlum

(x) *Bahlum* (*Chan Bahlum I*)

Bahlum はのちの Chan Bahlum とほぼ同じ文字であるので、Chan Bahlum I と呼ぶべきかもしれないが、ここでは単に Bahlum と呼ぶことにする。Chan Bahlum にとってはかなり重要な王であったようで、TC に3度その文字は生起している。その他 TIE と SARCO, SARCOwall にもその文字はみられる。

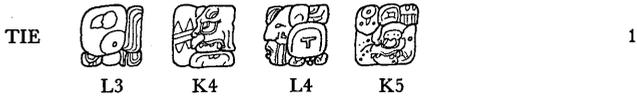
9. 4. 10. 1. 5	11Chicchan 13Ch'en	誕生	TC
9. 6. 18. 5. 12	10Eb 0Uo	即位	TC, TIE
9. 7. 0. 0. 0	7Ahau 3Kankin	PE	SARCO, TIE
9. 7. 5. 0. 0	13Ahau 18Ceh	PE	TIE
9. 7. 9. 5. 5	11Chicchan 3Kayab	死	SARCO

口からしたに縦線が数本あり、口の端から髭がでているのが特徴であるが、TC の T10 や SARCOwall ではその特徴は曖昧であり、TIE の K1 ではかなり異なった顔をしている。SARCOwall では Kin の称号が前にある。

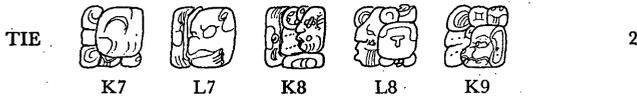
(xi) *Kan Ik*

Kan Ik は Kan と Ik の文字をもつところからつけられた名であるが、それがは

9.7.10.3.8 9Lamat 1Muan



9.8.0.0.0 5Ahau 3Ch'en



9.8.11.6.12 2Eb 20Ceh



図22 Kan IX

っきり示されているのは **SARCO** wall である。その他では、**Kan** が女性表示文字 **T 1000F** のなかにとりこまれている。**Ik** の方は上に **T 86**、下に **T 178** がつき、左右を髪が垂れているような要素で飾られている。**T 86** はとうもろこしを表わすというので、とうもろこしのひげであろう。これが飾りであることは、**TIE** の **L4, L8** ではついていないこと、**SARCO** wall で片方しかないものがあることからわかる。

9. 7. 10. 3. 8	9Lamat 1Muan	即位	TIE
9. 8. 0. 0. 0	5Ahau 3Ch'en	PE	TIE
9. 8. 11. 6. 12	2Eb 20Ceh	死	SARCO

(xii) *Ahc Kan*

Ahc Kan は **TIE** と **SARCO** に登場する。関係する日は次のようになる。

9. 8. 11. 9. 10	8Oc 18Muan	即位	TIE
9. 8. 13. 0. 0	5Ahau 18Zec	PE	TIE
9. 8. 19. 4. 6	2Cimi 14Mol	死	SARCO
9. 8. 17. 9. 0	13Ahau 18Mac		TIE
9. 8. 17. 15. 14	4Ix 7Uo		TIE

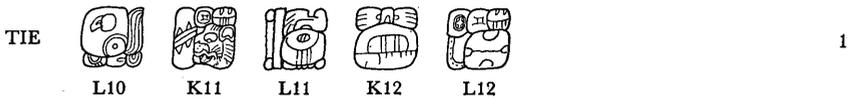
最後の2つの日付は、**Ahc Kan** の生存中の日付であるが、この日に関する節には **Ahc Kan** の名は生起していない。図ではこの日付順に線形にしるしている。

Ahc Kan を表わす文字は3つの節とも2つの文字ますからなっている。それぞれ書き方に差がある。**Ahc Kan** の名のもととなったのは **SARCO** の34からで、**亀** (**ahc**) と **Kan** (**T 506**) からなっている。しかしその他の2例中の名の文字には**亀**はなく、それは **T 12** に置き換わっている。主字 **Kan** (**T 506**) と接字 **T 178** はいずれも同じである。もっとも **TIE** と **SARCO** の **Kan** の文字素の書き方には差がある。また下接字 **T 178** は **TIE** にはあるが、**SARCO** では省かれている。

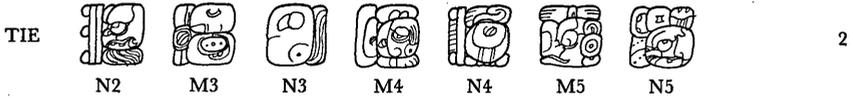
名を表わす句の2番目の文字は、**TIE** の **K12** と **SARCO** の35では **T 74:565** であるが、**TIE** の **M5** では鼻に特徴のある頭文字に置き換わっている。それが同価であることは **PT** や **SL** のテキストからも確かめられる。これは神 **GI, GII, GIII** についた文字と、**T 116** を除けば同じであり、関係する文字といえるのではなかろうか。この文字についてはのちにもう一度ふれることにする。

図の2番目の節は **9.8.13.0.0** の節であり、最初から4つ目までは **13Tun** の完了に関係する句とみることができる (**N2-M4**)。4番目の文字 (**M4**) の主字は**亀**とよく似ており、名の一部とみられるかもしれないが、これは区切りのいい節に生起する文字

9.8.11.9.10 8Oc 18Muan



9.8.13.0.0 5Ahau 18Zec



9.8.19.4.6 2Cimi 14Mol



9.8.17.9.0 13Ahau 18Mac



9.8.17.15.14 4Ix 7Uo



図23 Ahc Kan

であり (TIM-C3, H2; TIW-K1), おそらくオオムを表わす別の文字であろう。

Ahc Kan の文字が生起しない最後の2つの節は理解しがたい (図23-4,5)。M11は紋章文字である可能性が高い。もしそうならその前の文字は名を表わすことになるが、よくわからない。M8の文字の主字は T 683 であり、同じく T 683 を主字とする文字は2番目の節の M3 にあった (図23-2)。

(xiii) *Pacal I*

Pacal と呼ばれる人物は2人登場する。そこで Pacal I と Pacal II としたいが、Pacal II の方はパレンケを隆盛に導いた人物であり、ふつう Pacal といえばこちらの方であるので、Pacal II は混同の危険がない場合は単に Pacal ということにする。Pacal I は SARCO の蓋 (Lid) と棺壁 (Wall) に登場するだけである。パレンケを隆盛に導く Pacal II と同名であるが、王の称号である T 74.184 はついていない。楯では蓋の表意文字と音声文字の pa-ca-la の2重表記であり、それはたとえていう

と、漢字に仮名をそえた構造と同じであるが、側壁に生起する名の文字は音声文字だけである。関係する日は次の一つしかない。

9. 8. 18. 16. 11 3Chuen 4Uayab 死 SARCO

Pacal II の誕生は 9.8.9.13.0 であるので、Pacal I が生存中に誕生したことになる。同名の人物であるので、少なくとも同世代の人物ではないと考えることができよう。

この次に検討する Zac Kuk II と Kan Bahlum

Moo は Pacal II の母と父であるので、Pacal I は祖父という推測がなりたつ。しかし Ahc Kan の死は 9.8.19.4.6 であるので、その推測には疑問がわく。Ahc Kan は TIE の歴代の王の歴史を述べた部分に登場するばかりでなく、SARCO に登場するのに対し、Pacal I

9.8.18.14.11 3Chuen 4Uayab

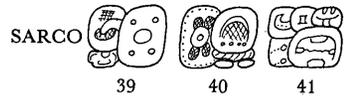


図24 Pacal I

のほうは SARCO に登場するだけであり、歴代の王と認められていない。しかし Pacal II の墓碑 SARCO に登場するばかりでなく、Pacal II と同じ名をもっているからには、Pacal II に密接に関係する人物とみることができよう。とはいえ同一名がついていても直接の血族関係をもつとはいえない例はいくつかある。たとえば Zac Kuk は、神である Zac Kuk I と女王である Zac Kuk II の関係であるし、Cauac の文字をもつ Chaac は Cauac I や Cauac II と直接の関係をもっていない。しかし Pacal I は、少なくとも Ahc Kan より Pacal II に密接に関係する人物とみることができるのではなからうか。そうみると、Pacal II の父母は Kan Bahlum Moo と Zac Kuk II であるところから、Pacal I は Pacal II の祖父であるとみるのはやはり健全な見方ではなからうか。では Ahc Kan と Pacal I の関係はどうであったのだろうか。この問題に関係する人物の関係ある日をまず挙げることにする。

	誕生	即位	死
Bahlum	9. 4. 10. 1. 5	9. 6. 18. 5. 12	9. 7. 9. 5. 5
Kan Ik (女)		9. 7. 10. 3. 8	9. 8. 11. 6. 12
Ahc Kan		9. 8. 11. 9. 10	9. 8. 19. 4. 6
Pacal I			9. 8. 18. 14. 11
Zac Kuk (女)		9. 8. 19. 7. 18	9. 10. 7. 13. 5
Kan Bahlum Moo			9. 10. 10. 1. 6
Pacal II	9. 8. 9. 13. 0	9. 9. 2. 4. 8	9. 12. 11. 5. 18

Zac Kuk の誕生は、Pacal II の母であり、Pacal II を生んだ年齢は常識的には20

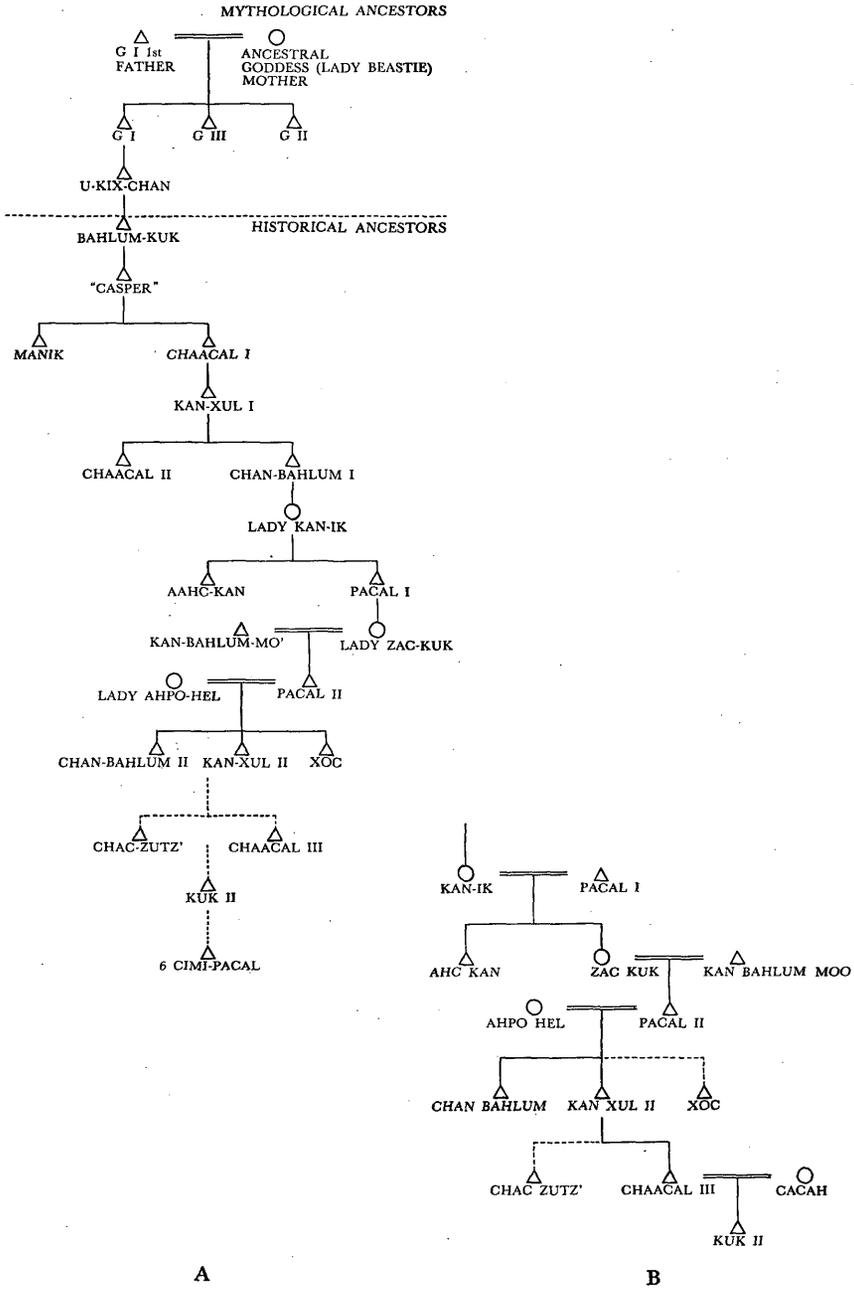


図25 王の系図

から30歳ぐらいであるので、9.7.0.0.0 頃から 9.7.10.0.0 頃と推測することができる。Pacal I が Pacal II の祖父ならば、Zac Kuk は子と考えられるので、同様20から30歳ぐらいに Zac Kuk が生まれたとすると、Pacal I の推定誕生年は 9.5.10.0.0.0 頃から 9.6.10.0.0 頃となる。今 Pacal II から時代をさかのぼって考えてみたが、Bahlum から考えてみると、次のようになる。Kan Ik が Bahlum の子とすると、Kan Ik の誕生は 9.5.10.0.0 頃から 9.6.0.0.0 頃となる。Ahc Kan が Kan Ik の子とすると、Ahc Kan の誕生は 9.6.10.0.0 頃から 9.7.10.0.0 頃となる。Greene Robertson は図25-A のような系統図を描いているが、先の考察から、図25-B のような系統図も描きうる。しかしこれは、親族関係をしめす文字があれば確かめられるのであるが、そうではない多くの仮定がはいった不完全な図である。

(xiv) *Zac Kuk II*

Zac Kuk II は十字グループの神話部分に登場した Zac Kuk I と同一文字であり、それと区別するため Zac Kuk II と呼ぶことにする。関係する日は次のとおりである。

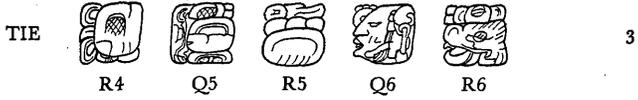
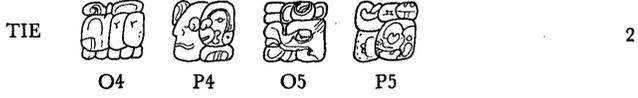
9. 8. 19. 7. 18	9Etz'nab 6Ceh	即位	TIE
9. 9. 0. 0. 0	3Ahau 3Zotz'	PE	TIE
9. 10. 0. 0. 0	1Ahau 8Kayab	PE	SARCO
9. 10. 7. 13. 5	4Chicchan 13Yax	死	SARCO

Zac Kuk II の名は10回生起する。TIE では4度生起し、いずれも T 348:793b である。しかしこのうち R6 は、その前に Zac Kuk I と同じ文字があるところから (R5-Q6)、他の3例と区別できないが、Zac Kuk I を表わすものと考えられる。これに対し SARCO では T 744:58 で2度、もう1例は T 1000F:58:x.x で書かれている。SARCO wall では2例とも T 1000F.58:744 である。OVAL では T 50.1000F と T 744 に分けて書かれている。主字は T 793b か T 744 であり、T 793b のときは接字は T 348 であるのに対し、T 744 のときは T 58 または T 50 である。きれいに接字と主字の使い分けができていたので、別の人物とすべきである。ところが、本来ならば異なる文字とみるべきものを、年代的にみて、また構成がよく似ているところから、同一人物とみなされている。年代的に同時代だといっても、違う人物でありうる。両者はよく似た構成の文字であるが、両者が同じ人物であることを裏付けるものはないのである。ところがそうすると、Zac Kuk II は即位の 9.8.19.7.18 9Etz'nab 6Ceh と 9.9.0.0.0 3Ahau 3Zotz' という PE にしか登場しないということになる。死に言及したテキストがないことになり、それまでの王達の例からはずれることにな

9.8.19.7.18 9Etz'nab 6Ceh



9.9.0.0.0 3Ahau 3Zotz'



9.10.0.0.0 1Ahau 8Kayab



9.10.7.13.5 4Chicchan 13Yax

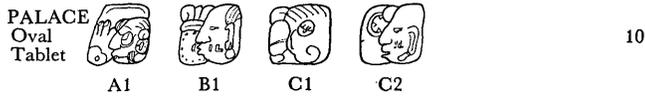


図26 Zak Kuk II

る。それゆえやはり同一人物とみるのが無難である。

SARCO と OVAL に登場する人物は **Zac Kuk** と読める。SARCO 54 の T x.x と転写した文字は Thompson のカタログのどれにあたるのかわからないので、そのように書いたが、同一文字素の並列である。これは T 744 にあたる。これは **Kuk** を **ku** という音をもつ文字素で書き換えたものと思われる。すなわち **Kuk=ku+ku** と、同一音節をもつ文字素で書き換えたものと考えられる。もしそうなら、逆に T 744 はケツァル鳥 **kuk** を表わすことが証明されたことになる。

SARCO の54の左の文字 T 11:I:606 は母親と子の関係をしめす文字である。このテキストの主人公 **Pacal II** の母親であることをしめす句と考えることができる。

OVAL では **Zac Kuk** のあとに女性の称号を表わすと考えられる文字が C2 にある。そのあとに T ?.I:1000? (D1) があり、**Pacal** の文字 (D2)、パレンケの紋章文字 (D3) が続く。D1 の文字は母親である **Zac Kuk** と子である **Pacal** の間にあるので、両者の関係を示す文字とみられる。

TIE の Q6, SARCO の 54b 上, SARCOwall の女性を表わす横顔, OVAL の B1b は形は異なるが、女性を表わす文字素とみたい。それらを一括して T 1000F と転写する。

9.9.0.0.0 には3つの節がある(図26-2, 3, 4)。いずれも T 125.669b:130 で始まる節である。これは TI のテキストでは 9.4.0.0.0 から **Katun** の終了時にみられるものである。これはスペイン人征服後アルファベットで書かれた『チラム・パラムの書』にみられるカトゥンの記録 (**Kahlay katunob**) に対応するものかもしれない。しかしその文字のあとには (O4b と R7), **Baktun** 文字が生起している。この O4b と R7 は幾何体と頭字体の書き換えであり、同価である。O4b は **Baktun** を幾何体で書いているのに対し、R7 は頭字体で書いているからである。**Katun** の終了時になぜ **Katun** の文字ではなく、**Baktun** 文字が現われるのであろうか。それが説明できないと、『チラム・パラムの書』にみられるカトゥンの記録 (**Kahlay katunob**) に対応するものと簡単にみなすことはできないが、カトゥンの記録をすぐさま連想させる節である。

(xv) *Kan Bahlum Moo*

Kan Bahlum Moo は SARCO の 50, 53 と SARCOwall にしかみられない。関係する日付は次の1つにすぎない。

9.10.10. 1. 6 13Cimi 4Pax 死 SARCO

9.10.10.1.6 13Cimi 4Pax

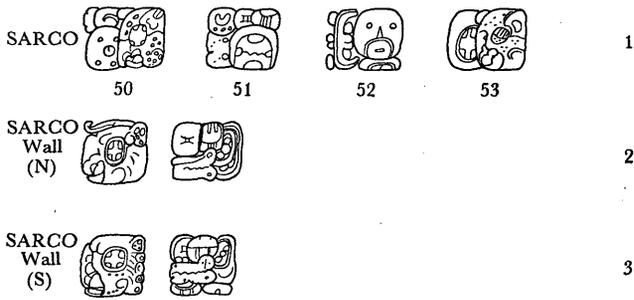


図27 Kan Bahlum Moo

Thompson はカタログではジャガー T 751 として登録しているが、図をみてわかるように、ジャガーの特徴をもつものの、口はオウム moo であり、さらに kan (T 281) をもつので、Kan Bahlum Moo というあだ名がついたものである。SARCO の53では kan は左接字として生起しているが、その他3例はいずれも目に接中字としてはいつている。kan が目に接中字としてはいつている例はすでに Kan Xul にみている。

(xvi) *Pacal (Pacal II)*

パレンケの碑文でもっとも多く登場するのは Pacal 王である。Pacal は 9.8.9.13.0 8Ahau 13Poop (603年) に誕生し、9.12.11.5.18 6Etz'nab 11Yax (683年) に死んだことが碑文からわかる。埋葬されたのは、『碑文の神殿 (TI)』であり、墓蓋の碑文にも登場するのでまちがいないと思われるが、そこから発見された骨の調査から出された年令は4、50代のものであったので、解説そのものに疑問を投げかける人がいる(たとえば墓を発掘した [Ruz 1976])。しかし、その他の王に関して生起する「誕生」や「即位」や「死」などの文字を考慮すると、その解説には矛盾がない。

まず Pacal が関係する日付を取り出す。誕生と即位と死以外なにをしたかほとんど不明である。

9. 8. 9. 13. 0	8Ahau 13Poop	誕生	HS, SARCO, TIW, TIW, Pasadena
9. 9. 0. 0. 0	3Ahau 3Zotz'	PE	TIW
9. 9. 2. 4. 8	5Lamat 1Mol	即位	HS, TIE, TIW, THRONE, PT, SL
9. 10. 0. 0. 0	1Ahau 8Kayab	PE	TIE
9. 10. 11. 17. 0	11Ahau 8Mac		PT
9. 11. 0. 0. 0	12Ahau 8Ceh	PE	TIM, TIW, TIW, PT, 96G

9. 11. 1. 12. 6	7Cimi 4Xul		Palace South Façade (Cat. 36)
9. 11. 1. 12. 8	9Lamat 6Xul		Palace South Façade (Cat. 36)
9. 11. 1. 16. 3	6Akball Yax?		HS
9. 11. 2. 1. 11	9Chuen 9Mac		96G
9. 11. 4. 7. 0	Ahau 8Cumku		DO
9. 11. 6. 16. 11	7Chuen 4Ch'en		HS
9. 11. 6. 16. 17	13Caban 10Ch'en		TIW
9. 12. 0. 0. 0	10Ahau 8Yaxkin	PE	TIM, TIW, TIW
9. 12. 3. 6. 6	7Cimi 19Ceh		TIW, TIW
9. 12. 7. 4. 10	7Oc 3Yax		TIW
9. 12. 10. 0. 0	9Ahau 18Zotz'	PE	TIW
9. 12. 11. 5. 18	6Etz'nab 11Yax	死	SARCO, TIW, PT
9. 13. 0. 0. 0	8Ahau 8Uo	PE	TIW
10. 0. 0. 0. 0	7Ahau 18Zip	PE	TIW

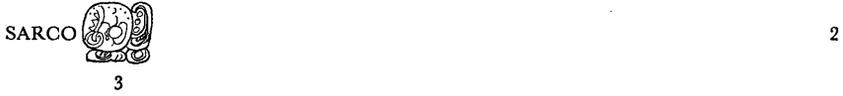
Pacal は Subject A とか Sun Shield などと呼ばれていたが, Kelley や Lounsbury により Pacal ([pakal]) と読まれることがわかった。楯の表意文字とともに、楯を意味する pacal ということばが、表音文字で pa-ca-la と書かれていたので、これはマヤ語で解読された王名ということが出来る。その他の王名は、いかにも解読されたようにみえるが、たとえば Chan Bahlum のように、単に文字の表わすものに従って Chol 語の単語を与えただけのものであり、証明されていない。Pacal はマヤ碑文に登場する王名で確実に読まれるほとんど唯一の例である。

Pacal を表わす文字は、生起例が多いことに加え、上で述べたように、すでに解読された文字であるので、マヤ文字の構成法を考える上でたいへん興味深い例を提供している。

Pacal の文字は、基本的には称号である T 74.184 または単に T 184 がついた楯の表意文字で表わされる。しかし厳密にいうと、楯の文字に T 86 または T 129 という上接字か、T 178 の下接字のついたものが含まれているし、楯の文字素が頭字体にかわった例もある。また称号である T 74.184 または単に T 184 がついた楯の表意文字は単独で生起するばかりでなく、Pacal を表わす表音文字があとについた形でも生起する。そこでその構成の仕方を検討することにする。表15の左は各文字素の並び方を Thompson のカタログ表記法によってしめたもので、真ん中は楯の文字が単独に生起する場所(1)、右は楯の文字と pacal の表音文字が生起する場合の楯の文

八杉 マヤ文字の分析 II

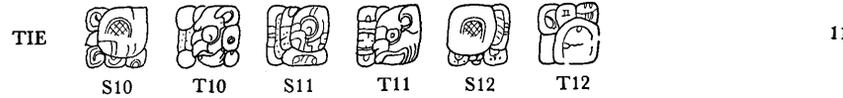
9.8.9.13.0 8Ahau 13Poop



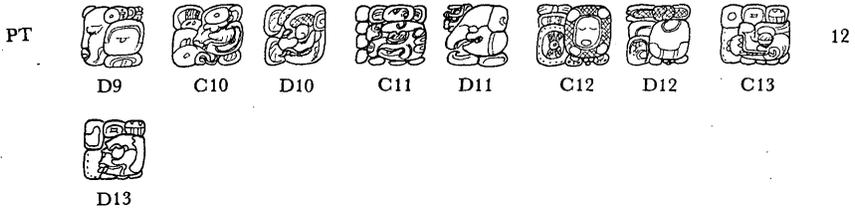
9.9.2.4.8 5Lamat 1Mol



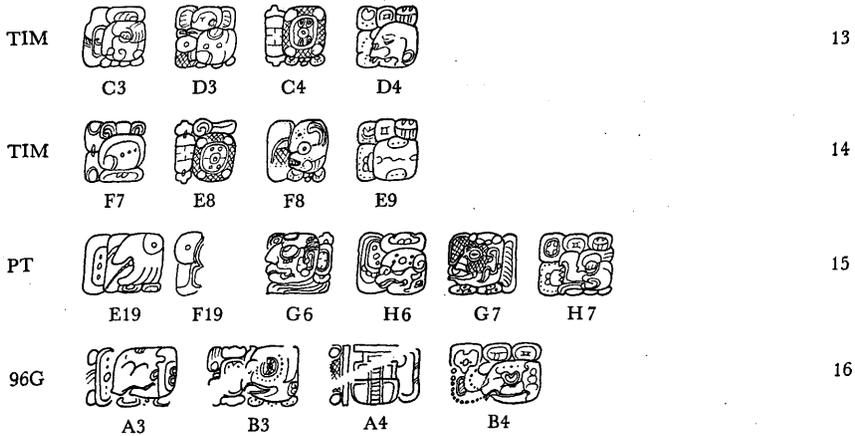
9.10.0.0.0 1Ahau 8Kayab



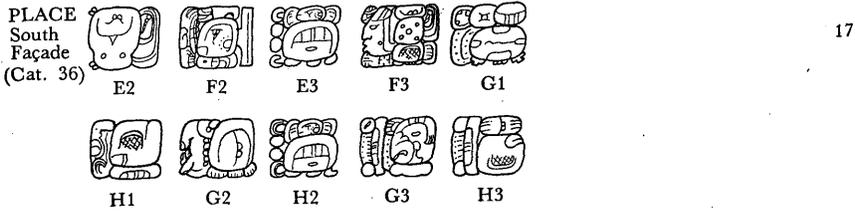
9.10.11.17.0 11Ahau 8Mac



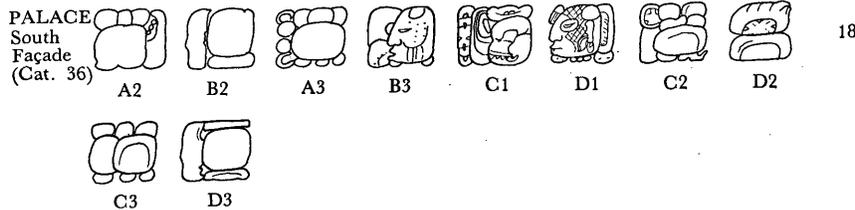
9.11.0.0.0 12Ahau 8Ceh



9.11.1.12.6 7Cimi 4Xul



9.11.1.12.8 9Lamat 6Xul



9.11.2.1.11 9Chuen 9Mac



9.11.4.7.0 6Ahau 8Cumku



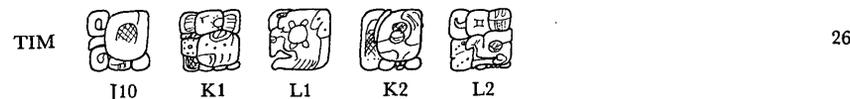
9.11.6.16.11 7Chuen 4Ch'en



9.11.6.16.17 13Caban 10Ch'en



9.12.0.0.0 10Ahau 8Yaxkin



9.12.3.6.6 7Cimi 19Ceh



9.12.10.0.0 9Ahau 18Zotz'



9.12.11.5.18 6Etz'nab 11Yax



S6

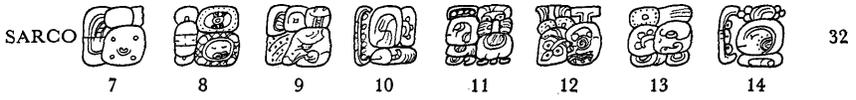


S11

T11

S12

T12



7

8

9

10

11

12

13

14



15



J10

I11

J11

I12

J12

I13

J13

I14

6.19.19.10.7 1Manik 10Zec

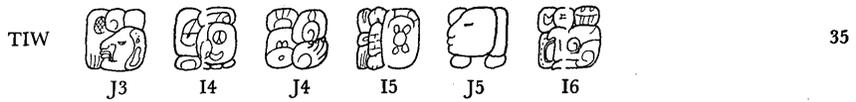


H2

G3

H3

12Baktun



J3

I4

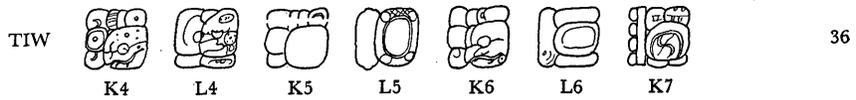
J4

I5

J5

I6

14Baktun



K4

L4

K5

L5

K6

L6

K7



A7

A8

A9



B1

八杉 マヤ文字の分析 II

TC side				39		
	E5	E6	E7			
TC alf.				40		
	I2	J2				
TFC alf.				41		
	I2	J2				
TC				42		
	K4					
TFC					43	
	H1	I1	J1	K1		
TS				44		
	L4	M4	L5			
PALACE North Façade (Cat.38)				45		
PALACE Northwest Court (Cat. 81)				46		
PALACE Bench 1						47
	G	H	I	J	K	

図28 Pacal II

字の生起場所(2)である。ここでカタログ番号のあとに P がついているのは、幾何体を人物化、すなわち頭字体にした文字であることを表わす。表の 1 から 3 は T 624 に T 74.184 または T 74:184 がついた例を、4 から 7 は T 184 がついた例をあげている。そして 8 から 10 は下接字 T 178 がついたもので、11 は接字をもたない例である。12 以下は幾分異なる構成の文字についてしている。同じ文字素からできている文字でも、接字が前につくか上につくかで形が少しかわるが、それらは 1, 2, 4, 10

表15 Pacal の 文字

	楯の文字の構成素	生 起 場 所 (1)	生 起 場 所 (2)
1a	T 74.184.624	96G-C1, K7; TS-L5	TIW-E5, G3*, I5
b	T 74:184:624	TIW-S6b, T12a; SL-B1b	TIW-A3a, F2a, S2a
2a	T 74.184.624P		HS-C6a; TIW-M2
b	T 74:184:624P		Pasadena-A2a
3a	T 74.184.86:624	TIW-O2; TFC-J1	TIM-G3
b	T 74.184.129:624		HS-A5b
4a	T 184.624	TIW-L5; TFCalf-J2	
b	T 184:624		TIW-R2a
5	T 184.624P		TIE-T11
6	T 184P.624P		HS-A6c
7	T 184.86:624	TSside-A9	TIM-E8
8	T 74.184.624:178	TIE-R11; TFCside-B1; TSside-E6; TH-B2; DO-C2	
9	T 74.184.624P:178	96G-B3	
10a	T 184.624:178	TIM-C4; TCalf-J2	
b	T 184:624:178	TC-K4b	
11	T 624P		TIM-L1
12a	T 184.624a:624v	SARCO-8	
b	T 184:624a.624v:178	DO-T	
c	T 78:184:624a.624v:178	PT-C12	
d	T 184.?624a?:624v:178	OVAL-D2	
13a	T 544P.184:116		PT-G1
b	T 544P.184.74		PT-J12
c	T 544P:184		Palace S. Façade-F3 (Cat. 36)

において a, b で区別している。それらは環境に規定されており、文字ますの半分しか占めない場合は接字 T 74: 184 または T 184 は上におかれ、1 ますを占める場合はそれらの接字は左におかれていることがわかる。そのほかこの一覧表から次のような考察ができればよい。(1) 一番多いのは T 74 と T 184 が楯の文字 T 624 についての形で、ここに挙げた 43 例中 12 例ある。これにつづくのがそれに T 178 がついたもので、5 例ある。(2) T 178 がつく文字は単独で Pacal の名を表わし、あとに表音文字による表記はない。T 178 は表音文字 la であり、これは pacal の l を表わすために使われる。それが表意文字の T 624 についているのは、限定詞の役目をはたすためとみるべきかもしれない。しかしこの場合は、それほど大きな役目はなく、表音文字の略または装飾とみるほうがよいように思われる。(3) 頭字体による表記は 7 例あるが、1 例をのぞきすべてあとに表音文字による表記がある。表音文字という支えがあるため、自由に T 624 を変えることができたのであろう。楯が頭字体にかわった文

字は鳥の頭を表わしているようで、上口先が内側に曲りかつ尖っている。7例のうち HS の A6c, C6a と 96G の A4 の文字は目に楕の弁別素性であるプロペラ状の要素が入っている。TIM の L1, Pasadena 板の A2a の文字は目そのものがプロペラ状の要素と置き換わっているので、中心の丸が目に、四つのプロペラがそこから突き出た形になっている。これら5例はいずれも幾何体の弁別素性を頭字体でも使っているといえる。しかし TIE の T11, TIW の M2 は細部が不明でありよくわからないが、目にプロペラ状の要素が彫りこまれているようにはみえない。もしそうなら幾何体の弁別素性を頭字体に使わない例となる。(4) 同一テキストでも書き換えがある。これは同じ文字の連続を避けたい欲求の表われであろうし、見方を変えれば、文字の創造の爛熟期をしめすものといえよう。(5) 同じ文字が初期のテキストにも後期のテキストにも存在する。それゆえ文字の違いは時代的な差とみることはできない。(6) 楕の文字素に称号を表わす T 74.184/74:184 または T 184 がついた文字と、楕の文字の中が T 537 で置き換わった文字素(表では T 624v と表記)に T 178 がついた文字からなる例が、PT の C12 と DO の T にみられる(表15-12)。両例とも楕の文字素は通例の文字と異なり、四隅に丸がない。しかし中が T 537 で置き換わった文字素には四隅に丸がついている。ふつう Pacal を2つの文字で表記する場合、片方が楕の表意文字なら、もう一方は表音文字という構成をしている。それゆえ T 537 で置き換わった文字素に T 178 がついた文字も表音文字とみると、T 178 は la と読まれるのであるから、T 537 で置き換わった文字素のほうは [pak-] という音をもつと考えられる。T 537 は人が目をつむっているような文字である。ユカテク語の pacat は顔つきという意味であり、音の似かよりにから連想された文字遊びのように思われる。SARCO の8も今取り挙げた2例と同様の文字であるが、細部が異なる(図28-32)。楕の文字素の下には、楕の文字素の中が T 537 に置き換わった文字があるが、口の部分が前記のものと異なる。そして下接字 T 178 はついていない。OVAL も、以上3つのものと同じとみられる(図26-10, D3)。T 184 と T 624 の間の文字素はよくわからない。T 624a と表記したものは図では三重丸で描いているもので、その右の要素は何を表わすか不明である。(7) 表の 13a, b は太陽 Kin を表わす文字が頭字体で表わされ、それに T 184 または T 184.74 がついたものと思われる(図28-15, 33)。この文字と pacal を表音的に表記した文字の間に、T 181.23:1029 が生起する。T 1029 は T 585 の頭字体である。因みにこの文字は Loundsbury により ah nabe (he the first or prince) と読まれている [SCHELE 1976: 12, note 3]。図28-17も同じであるが、1文字ますに今みた3つの文字が入っている(表15-13 c)。

T 1029 は幾何体の T 585 にかわっている。そして ah nabe 文字の生起順が異なり、T 181 は右接字として生起し、T 23:585.181 となっている。構成は異なるが、構成素並びに生起環境は同じなので、ah nabe 文字であることはまちがいない。図28-18では、称号としては T 184 だけが ah nabe 文字について、1文字まずが形成されている。そのあとに Pacal の表音表記があり、パレンケの紋章文字がつづく。表音表記は pa が頭字体、ca と la は幾何体になっている。

つぎに pacal を表音的に表記した文字にうつる。これは今ふれたことでわかるように、pa と ca と la という音を表わす3つの文字素からなる文字であるが、pa と ca を表わす文字素には幾何体と頭字体の交替がみられる。ところが pa が頭字体の場合は ca は幾何体、pa が幾何体の場合は ca は頭字体というふうに、どちらか一方が頭字体にかわるだけである。pa の幾何体は Thompson のカタログの T 602 にあたる。パレンケの場合、格子模様の下に数個の点があるところに特徴がある。Thompson はこれと T 586 を区別したが、これは T 586 と同価であり、ひとつにまとめるほうがよい。頭字体は pa の弁別素性である格子模様を頭字の中にもっている。その例は HS の A5c, A6d, C6b, TIW の F5, J5, S2, N2, PT の J13, G2 にみることができる。ca が幾何体で書かれる場合、くしの形をした T 25 が1つの場合と2つある場合の2つの変化が認められる。ca の頭字体は TIM の F8, H3, K2 の3例しかない。la はいわゆる Ahau の文字がさかさになったもので表わされるのであるが、それが1つの場合と2つの場合がある。「さかさ Ahau」が2つある場合、間に飾りの点が3つ置かれる場合となにもない場合がある。PT の G7 と J13 は(図28-15, 33), pa が非常に特徴のある頭字体で書かれ、ca と la は幾何体で表わされている。J13 の ca は T 25:25 と2つの T 25 で表わされているのに対し、G7 では T 25 が1つだけである。la は J13 ではいわゆる「さかさ Ahau」が2つに間に3つの丸があるのに対し、G7 では「さかさ Ahau」が2つだけで表わされている。この2つの例では楯の文字の代りに、T 181.23:585P があり、称号としては太陽の頭字体に、J12 では T 184.74, G6 では T 184:116 がついたものが使われている。

それぞれのテキストでの特徴にふれると、まず最初のテキストである HS では、楯は幾何体の場合 (A5b, 細部は不明であるが、形から幾何体であることは疑いようない) と頭字体の場合 (A6c, C6a) があるが、表音表記のほうは3例とも、pa は頭字体で、ca と la は幾何体で書かれている。称号を表わす T 74.184 は2例にみられるが、あと1例は頭字体にかわっている。これは太陽の神を表わす文字素であり、通常 T 184 にみられる Kin の要素と交替するものであるが、この場合は称号全体を表わ

す役目を担っていると考えられる。

TI には Pacal を表わす文字が18例あるが、TIW の S6 と T12 が同一であるだけであとはすべて書き方に違いがみられる。大きく分けると、楯の表意文字だけで表わす場合と、楯の表意文字と pacal を表わす表音文字の2つで名を表わす場合の2つになる。楯の表意文字だけの場合は T 624 という幾何体で表わされる。これは6例あるが、T 74:184:624 と書き下せる TIW の S6b と T12a 以外は接字のつき方に違いがみられる (TIE の R11, TIM の C4, TIW の L5 と O2)。楯の表意文字と pacal を表わす表音文字の2つで名を表わす場合、楯の表意文字を頭字体にした例は3つある。いずれも接字に違いがみられるばかりでなく、あとにつく表音文字の表記も異なる。TIE の T11-S12 では、接字は T 184 だけで、表音文字のほうは pa も ca も la もすべて幾何体で表示されている。TIM の L1-K2 では接字はなく、表音文字のほうは ca が頭字体である。TIW の M2-N2 では T 74.184 の前接字があり、表音文字のほうは pa が頭字体で表わされている。楯の頭字体は TIW の L1 では目がプロペラの要素で置き換わっているが、TIE の T11 と TIW の M2 はプロペラの要素のない同じ文字のようにみえる。残り9例は楯の文字 T 624 と pacal を表わす表音文字からなる。TIW の E5 の楯の文字はその他の楯の文字と若干異なり、プロペラ要素が縦に伸びている。Thompson はそのため T 624 を下位分類して T 624a, T 624b, T 624c としている。T 624b がそれにあたるが、意味に差はない。これまで扱ってきたのは T 624a であり、T 624c は神 III (GIII) を表わす文字である。これと T 624a, T 624b の交替例はないので、別番号にする必要がある。pa を頭字体にしたものが3例 (TIW の E5, J5, S2), ca を頭字体にしたものが2例 (TIM の F8, H3) あり、残りの4例は幾何体による表示である (TIW の A3, F2, G3, R2)。pa を頭字体にしたものは TIW, ca を頭字体にしたものは TIM に限られ、すべて幾何体による表示の場合は1文字まずに楯の表意文字と表音文字がつめこまれており、これだけみるとテキストごとくにきれいに分けられる。

十字グループはいずれも楯の幾何体 T 624 に接字がついたものである。接字のつき方は異なり、T 74.184 と T 178 がつくものが TCside と TFCside の2例、T 184 と T 178 がつく場合と T 184 だけの場合と T 184.86 の場合がそれぞれ1例ずつある。

PT には4例あるが、うち1例は損傷をうけて不明である。残り3例のうち2例 (PT の J13 と G7) はほぼ同じで、先に述べたように、称号として太陽の頭字体に、J12 では T 184.74, G6 では T 184:116 がついたものがあり、つぎに T 181.23:

585P があり、つぎに *pacal* が非常に特徴のある頭字体の *pa* と、*ca* と *la* の幾何体で表わされている。C12 では楕の文字と、その中が T 537 に代わった文字で表わされている。これは SARCO の 8 や DO の T とほぼ同じ文字であることもすでに述べた。DO には T 74.184.624:178 による表示がある (C2)。

96G には楕の頭字体と幾何体による表示がある。頭字体表示のあとにはおそらくピラミッドを表わすに違いない文字がある (A4)。これは PT の I14 にもみられる。ピラミッドの建設者という称号を表わす文字であろうか。

幾何体による表示のあとには 5Katun 表示がある (D1)。それが生起する日付 9.11.2.1.11 時に *Pacal* が 5 Katun という意味にとると、あわない。5 Katun 表示は TSside の A8, TS の M4, TFC の I1 にもみられる。奉納は 9.13.0.0.0 であり、奉納時に *Pacal* は 5 katun 目であるので、この場合は計算と合致する。TFC の I1 では Tun が頭字体で書き換えられている。この場合は Ahau の文字素を額につけたハゲタカのような頭である。幾何体の Tun と頭字の交替は 96G でもみられる(図29)。この場合は Ahau の頭字体とみとめられている T 1000c である。これとは別に 4 Katun 表示が PT の J11 と C11 にみられる。これは SARCO の 6 にみられる 4 haab 表記と交替しうるもので、*Pacal* の生存した Katun を表わしたものと思われる。いま 4 haab 表記としたが、実際は期間の終わりの文字のところのみたように、この文字は T 528 (haab) ではなく、T 644 と融合した文字である。それゆえ T IV:11:528<644>:116 と書ける。4 haab と 4 Katun 表記の両方は Pasadena 板にみられる。4 haab の表記は T IV.204.528<644>:116 である。T 11 と T 204 は同価であるので、両方とも同じ文字といえる。

図28の37-44, 図31-14 (H1-K1), 図31-15 (L4-L5) は父親としての *Pacal* を表わす句である。父と子の関係を表わすそれぞれの句の最初の文字は、いずれも主字は T 533 (Ahau) であるが、上接字 T 122 があるものとなないものがある。上接字のついた形 T 122:533 を Thompson はそのカタログで T 535 としたが、T 122 のない

場合も、ある場合も同じ機能をはたし、また T 122 は別の文字素にもつく文字素であることから、T 535 として独立の文字素と認定することはよくないことである。前接字は T 1, T 11, T 203, T 232 の交替がみられ、下接字としては T 23, T 24, T 82 の交替が観測される。これらは同価の文字素とみられる。T 232 は骸骨のような頭が主部であるが、ここではそれがさ

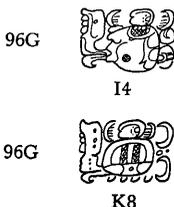


図29 Ahau と Tun の交替

かさに描かれている。

この他にも **Pacal** を表わす文字は、**Palace** の壁面や **OLVIDADO** などにある。その例として図28-45, 46に2例あげたが、他は断片的であり、省略する。

(xvii) *Ah Po Hel*

Ah Po Hel と名づけられた女性は、**Pacal** の妻であり、**Chan Bahlum, Kan Xul II (Hok)** の母である。下記の日付に関して生起するほか、日付なしの節や、日付がある節でも、その日付に関係ない位置に、すなわち、日付に関係する主人物を修飾するものとして登場している (図30)。

9. 9. 13. 0. 0	3Ahau 3Uayab	PE	TIW
9. 9. 13. 0. 17	7Caban 15Poop		TIW
9. 12. 0. 6. 17	5Etz'nab 6Kankin	死	TIW

ここでは10例の文字について検討する (図31-3 K5-K6, 図31-15 M5-L6)。日付のあとに生起するのは3例で、そのうち1例は **Ah Po Hel** の名は省かれている。左接字として女性を表わす **T 1000F**, 上接字として **T 168** がついた, **Hel** と呼びならわされている **T 573** からなる。それと同じ文字が **TSide** の **B3**, **TFCside** の **B4** にみられる。そのすぐ前の文字はナランホの碑文でもみた女性の称号の文字である。上接字が少し異なる。もう1つ前の文字は母と子の関係を示す文字であり、これは **TCalf** の **K1**, **TFCalf** の **K1**, **TC** の **K5** (図31-3) にみられるものと同じである。ただし **T 178** が下接字としてついているものにつかないものがある。**Pacal** の表意文字に **T 178** がついているものもあり、それを限定詞とはみななかったが、それはこの場合のように、なくてもよい要素であるからである。これと交替できる文字は **PT** の **D14**(図30-8) と **TS** の **M5** (図31-15) である。**TFCside** の **B5** には **Ben-Ich Katun** 表示がみられる。**TCalf** の **L1**, **TFCalf** の **L1** の **Ah Po Hel** の文字には下接字 **T 130** がついている。同様 **PT** の **D16** でも下接字 **T 130** がみられる。しかし **DO** の **Q** では異なった接字, おそらく **T 21** と思われる文字素が右接字としてついている。これから **T 21 = T 130** という作業仮説が導かれる。

(xviii) *Chan Bahlum*

Chan Bahlum の主テキストは十字グループである。

9. 10. 2. 6. 6	2Cimi 19Zotz'	誕生	TFC, TS
9. 10. 8. 9. 3	9Akbal 6Xul	ピラミッド?	TC, TS, TS

9.9.13.0.0 3Ahau 3Uayab?



9.9.13.0.17 7Caban 15Poop



9.12.0.6.18 5Etz'nab 6Kankin



9.10.11.17.0 11Ahau 8Mac

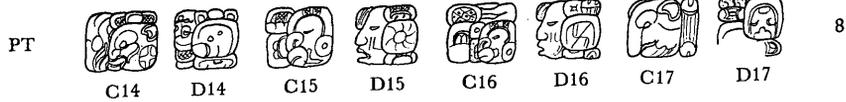


图30 Ah Po Hel

9.10.2.6.6 2Cimi 19Zotz'

TFC  N2 1

TS   P13 Q13 2

9.10.8.9.3 9Akbal 6Xul

TC         I1 J1 K1 K2 K3 K4 K5 K6 3

TS         P7 Q7 P8 Q8 P9 Q9 P10 Q10 4

TS     E2 F2 G1 H1 5

9.10.10.0.0 13Ahau 18Kankin

TC  K10 6

TS    Q15 P16 Q16 7

TS        I1 J1 I2 J2 K1 K2 K3 8

9.12.11.12.10 8Oc 3Kayab

TC     L3 M1 N1 O1 9

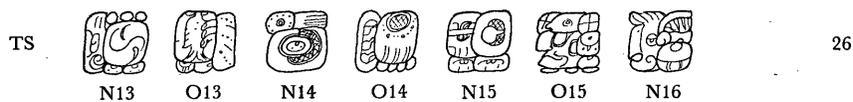
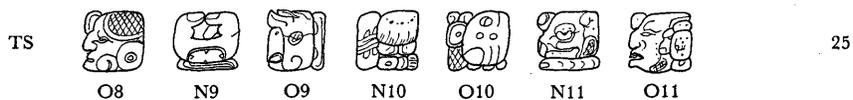
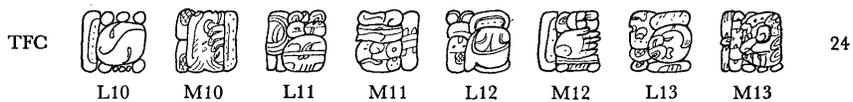
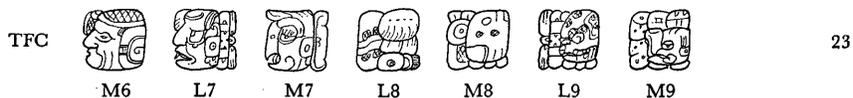
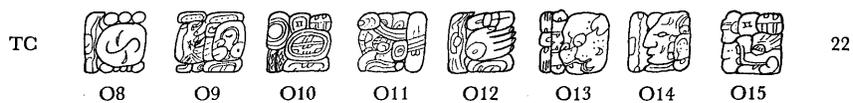
TFC      O2 N3 O3 N4 O4 10

TFC   N7 O7 11

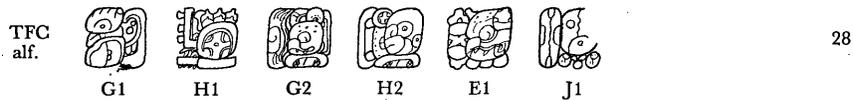
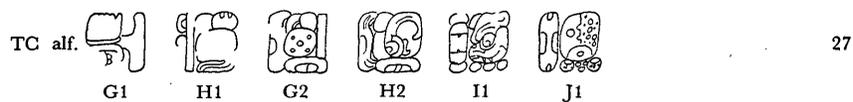
TFC								12	
	E3	E4	E5	E6	E7	E8	E9		
TFC								13	
	F1	F2	F3	F4	F5	F6			
TFC									14
	G1	G2	G3	G4	G5	G6	G7	G8	
									
	G9	H1	I1	J1	KI				
TS								15	
	L2	M2	L3	M3	L4	M4	L5		
									
	M5	L6	M6						
TIW								16	
	S9	T9	S10	T10					
PT								17	
	K7	L7	K8	L8	K9	L9	K10		
									
	L10	K11							
THRONE								18	
	E2	F2							
9.12.18.5.16 2Cib 14Mol									
TFC								19	
	O16	N17	O17						
TFC lapida								20	
	C10								



9.12.18.5.17 3Caban 15Mol



9.12.19.14.12 5Eb 5Kayab



9.13.10.1.5 6Chicchan 3Poop



9.13.10.0.0 7Ahau 3Cumku

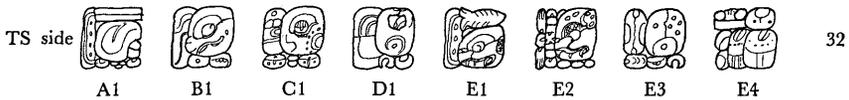


図31 Chan Bahlum

9.10.10.0.0 13Ahau 18Kankin	PE	TC, TS, TS
9.12.11.12.10 8Oc 3Kayab	即位	TC, TFC, TFC, TS, TIW, THRONE, PT
9.12.18.5.16 2Cib 14Mol		TC, TFC, TFC, TS
9.12.18.5.17 3Caban 15Mol		TFC, TS
9.12.18.7.1 1Imix 19Ch'en	819日節	TFClapida
9.12.19.14.12 5Eb 5Kayab		TCalf, TFCalf, TSalf, TFClapida
9.13.0.0.0 8Ahau 8Uo	PE	TFC, TFClapida
9.13.10.1.5 6Chicchan 3Poop	死	PT
9.13.10.0.0 7Ahau 3Cumku	PE	PT

TFC の N2 「上向きカエル」 文字のあとには即位の文字がくる (図31-1)。TS の Q13 の接字には T 679 があり, その次には DN の 1.8.12 があり, CR として 13 Ahau 18Kankin があるので, Q13 は 9.10.10.0.0 13Ahau 18Kankin に関する文

字とすることができる (図31-2)。

9.10.8.9.3 9Akbal 6Xul に関する節は3つある。そのうち2つにはピラミッドの文字がある (図31-3,5)。図31-4にはピラミッド文字はないが, P8 は, 前接字を問題にしなければ, F2 と同じ文字であり, 一部の言いかえをただけの節とみることができる。

TC の K3 は TS の Q9 と同価の文字である。それは図32 からわかるであろう。図32-1 は T 111:188.130:539:178 と転写できる。T 539 が頭字体になったものが図32-2である。図32-3は T 111 と T 539 をそれぞれ頭字体にし, 2文字ますに分けて書いたものである。それらの見方が正しいことは, 図32-4,5,6を比較すればわかるであろう。図32-4では T 111, T 539 とともに幾何体に, 図32-5では T 111 を頭字体に, 図32-6では T 539 を頭字体にしている。これらは Chan Bahlum を表わす文字の前後に生起するので, 称号とみておきたい。TS の N11-O11 の不思議に思えた文字は, T 111 と T 539 を頭字体にした文字であったのである。Chan Bahlum の称号とみたこの文字は, 他にTS の K1b (図31-8), TC の O1b (図31-9), TFC の O3 (図31-10), TFC の F4b (図31-13), TS の M3b (図31-15), TC の O14 (図31-22),

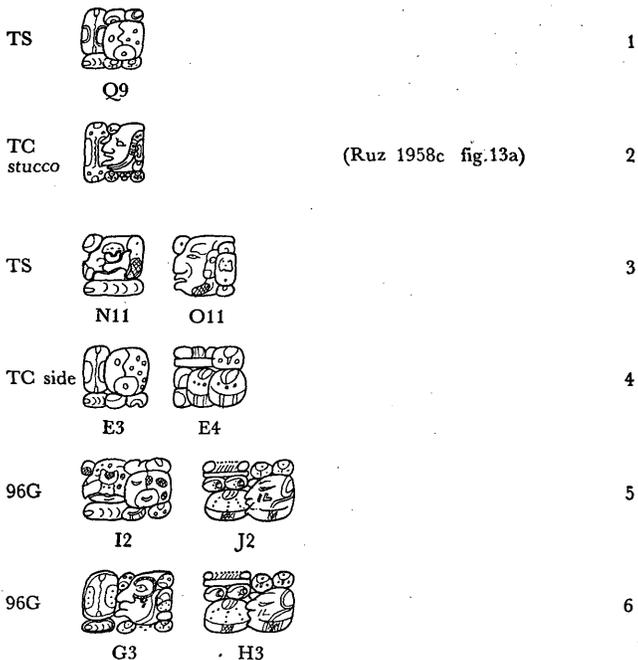


図32 Chan Bahlum の称号の幾何体と頭字体

TCalf の J1 (図31-27), TFCalf の J1 (図31-28), TCside の E3 (図31-32), TSside の E (図31-33), TXIV の H10 (図31-34) にみることができる。

図32-4, 5, 6 の第2番目の文字は、その前の文字 T 111:188.539:178 またはその変化形と密接に結びつく文字である (TC-K2 (図31-3), TC-O1a (図31-9), TFC-F4a (図31-13), TS-M3a (図31-15), PT-L8 (図31-17), TCside-E4 (図31-32)。ただし図31-5の TS-G1 は、称号とみた T 111:188.539:178 の変化形はついていないようである。小さな空間に多くの文字素が押し込まれているので、多くの場合ははっきりせず、T 506 が2つあるように見える場合がある。それぞれの構成素がはっきりみえるのは PT の L8 であり、それは T 12:177:507.178b:506:178c と書き下せる (図31-17)。96G では T 506 が頭字体に置き換わっている (96G-H3, J2; 図37-1, 2)。生起例のほとんどは、構成素や生起位置に変化がみられる。たとえば TC の O1a の上の部分の大きな文字素は T 506 (kan) のように見え、左下に T 501 とと思われる文字素がついている。T 506 (kan) のようにみえる文字素は、実際には T 507 であろう。O1a の左下の文字素は T 501 であるようであり、もしそうなら、いいかえがきいたのであろうか。TS の M3a は同一文字とは思えない構成をしている。単に T 25:506:506 のようにみえる。しかし生起場所からみて、同じ意味を表わずと推測してよいのではなからうか。

図31-3の K4 以下は、Chan Bahlum の父と母である Pacal と Ah Po Hel を表わす句である。父母を表わす句は TS の L4-M6 にもみることができる (図31-15)。父一子 の関係を表わす文字 (TC の K4a, TS の L4) は同じとみてよいが、母一子 を表わす文字は T 125.35.1000F:670:178 (TC の K5) と T 191.I:606:23 (TS の M5) であり、異なる。この交替はよくみられ、同価の文字とみなせるが、その交替の理由はわからない。父だけの句は TFC の H1-K1 にある (図31-14)。

図31-4の Q10 は神 GI の文字であり、その前の文字 P10 は前後に人または神が生起するので、両者の関係を表わす文字と推測できる。図31-5の H1 は消えて不明であるが、その形と生起場所から、Chan Bahlum を表わす文字とみることができる。

図31-8では称号とみた K1 の次には T 11.533:24 があり、パレンケの紋章文字が続いている。それゆえ、K2 の文字は Chan Bahlum のかわりをする文字とみることができそうである。しかしその文字は父親を表わす文字として、TFC の H1 と、若干接字は異なるが TS の L4 や TC の K4 に生起している。

9.12.11.12.10 8Oc 3Kayab は即位の日である。これを表わす節は少なくとも8つある。即位を表わす文字は3つに大別できるが、それぞれ異なる。主字に手 T 713

と T 757 を用いて2文字で表わす場合と (図31-9, 10, 12, 15, 16), いわゆる着座の文字と接字グループを用いる場合 (図31-11), 足の文字 T 700 を主字に用いる場合 (図31-17, 18) の3つである。主字に手 T 713 と T 757 を用いて2文字で表わす場合、接字にはいろいろな文字素がつく。

9.12.18.5.16 2Cib 14Mol と、1日あとの 9.12.18.5.17 3Caban 15Mol の日の出来事は、十字グループ (TC, TFC, TS) のテキストにふれられている。それらの意味はよくわからないが、3つのテキストに生起している文字の書き方には差がみられる。

9.12.18.5.16 2Cib 14Mol の日の節は、図10の22-25にすでに挙げている。同一日の節は図31-19にもみられる。TC の O4, TFC の N7-O7 には即位の文字がある。その前には DN として 6.11.6 があり、次の文字の最初に T 679 があるところから、即位から T 266. 568:575 が示すものまでが、6.11.6 であるという意味にとれる。T 266. 568:575 と転記した文字は、4つある節のすべてに共通する。主字は T 568 であり、前接字として T 266 これは T 561 のひっくりかえったものであり、下接字として T 575 がある。どちらも Thompson のカタログ表示を使うと不適切な表示となり、変更する必要がある。その次には T 11/204.671.24:59:116 の文字が生起している。TC の O6 では、T 116 が次の文字の接字として移動して、T 24 は省略されているようである。O6b の文字は T 747 のようであるが、これは他の節にはない。TS では T 11/204.671.24:59:116 はなく、T 204.539:19? に置き換わっている。その次には4節とも神の文字が生起する。

9.12.18.5.17 3Caban 15Mol の日の出来事も TC, TFC, TS にしるされている。少なくとも2つの大きな節に区分できる。最初の節は T 1014a で始まる。この節は TC には欠けている。TFC の L7 は TS の N9 に当たる。この書き替えは珍しい。その他は接字にわずかの違いがあるだけで同じである。ただし TS の N11-O11 に相当するものは TFC にはない。これはすでにふれたように、Chan Bahlum の称号とみることができ、省略可能である理由がよくわかる。

第2の節は T 11/204.III:573c:178 で始まる (図31-22, 24, 24)。T 573c としたのは、Thompson のカタログに適切なものがないので、似た T 573 を利用したためである。TFC と TS では第2節はさらに細分できる。TC の O12 と TFC の M12-L13 は、即位を表わす文字と思われる。手 T 713 と T 1016 を使った句は PT にも生起する (cf. V 章 ii)。TFC の L12 は舌に穴をあける儀式の文字と思われる。手に魚をつかんだ文字 T 714 も儀式を表わす文字である。おそらく即位から6年あまり

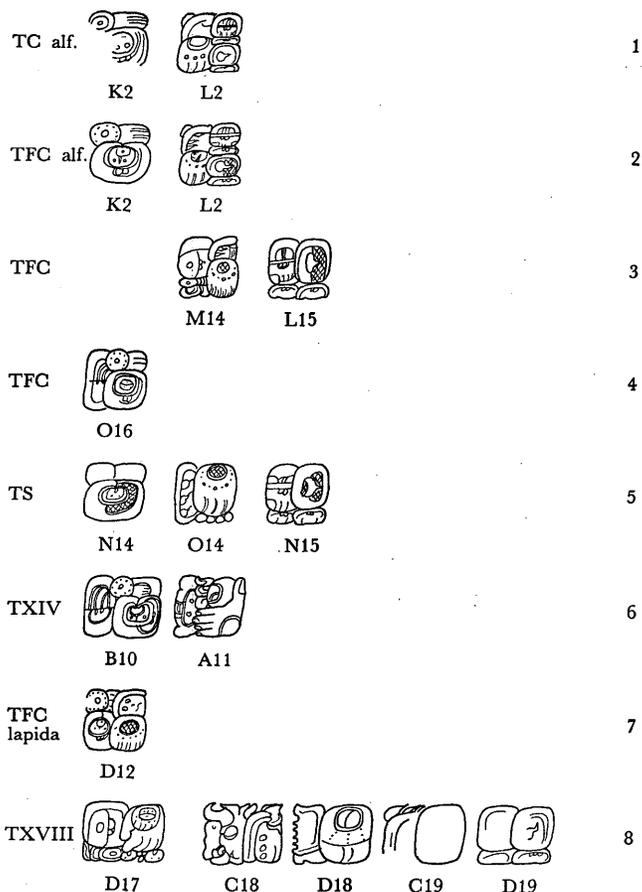


図33 T79: 683<534>

経たこの日に、2つの儀式を行なったことをしるしているものと思われる。しかし TS では手に魚をつかんだ文字 T 714 しかない。TC でもその儀式しかしるされていない。

第3節は TFC では M14, TS では N14 から始まる。TS の N14 の文字はほかの場所でも生起している。それらをまとめて描いたものが、図33である。これから TFC の M14a の T 513:59:126h は、1例しかない珍しい形であることがわかる。この文字はいうまでもなく前の日を表示する ADI である。これと T 79:683<534> が交替しているのであるが、その理由はわからない。T 683<534> は T 683 に T 534 が接中文字化されていることを表わす。図28-17の最初の文字は T 534.181 であった。T 181 は T 683 を半分にしたものであり、交替可能であるので、この文字と同じ可能性が高い。T 501 につく接字については、Thompson はそのカタログで、T 767

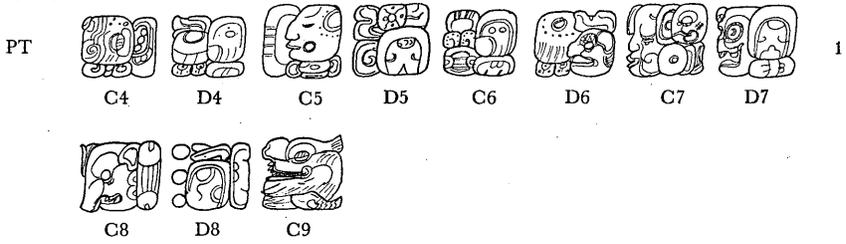
とか T 25 (TS-O14 の場合) として、適切な同定を行っていない。TS の O14 の接字は (図33-5)、形は異なるが、TCalf の L2 や TFCalf の L2, TFC の M14b (図33-1, 2, 3) などにつく接字と同じものである。接字であるので、違う番号を与えなければならないところであるが、ここでは暫定的に T 767c としておく。この次の文字は T 562:23.598:23 である。図33-1, 2では縦長に、T 561:23:598:23 と書かれている。図33-8では、この文字、生起する節を挙げているにすぎない。この文字は、819日暦の節にも出現した (図8)。この文字は節の終わりに生起するので、その次からまた新しい節が始まるものと思われる。その文字群は、TS の O15-N16, TFC の M15-L17 とまったく異なる文字であり、異なる事をのべているものと思われる。

(xix) *Kan Xul II (Hok II)*

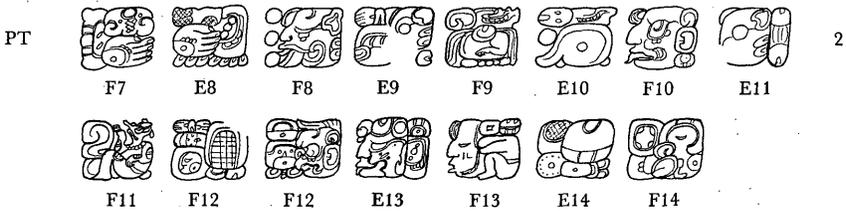
Berlin が “Subject B” とした人物は、Mathews & Schele により、Hok と名づけられた [MATHEWS & SCHELE 1974]。のちに Schele は Kan Xul と呼びかえた [SCHELE 1979]。ここでは Kan Xul II と呼んでおく。Kan Xul II の登場する主テキストは PT である。PT には Berlin が Trias group と名づけた文字があり [BERLIN 1965a]、それが Kan Xul II と関係している。テキストは、上部の場面上にある15文字のテキストとメインテキストの2つの部分に分けられる。上部の場面上にあるテキストから、Trias 3 は 9.10.17.6.0 1Ahau 3Uayab に生まれ、9.13.14.8.0 8Ahau 18Xul に即位したことがわかる。これはしかし Kan Xul II の文字と直接には結びつかない。メインテキストでは R16 に Trias 3 が生起し、そのあとに王の名を表わす文字が生起しているが、その文字 R17 は、残念ながら消失して、左についた接字しか残っていない。それがわかれば Trias 3 と Kan Xul II の関係がわかるのであるが、肝心の部分が消えているので、わからない。それゆえ、Trias 3 と Kan Xul II が結びついている例はない。Q9 から R14 には、9.14.8.14.15 9Men 3Yax という日付が IS にならった表記法で書かれており、日付のあとに即位を表わす文字群が生起している。Trias 3 が即位したということになるが、いま R13 の文字を問わず、その日が即位の日であるとすると、即位の日が2つもあることになる。

Trias 3 に限っていても即位の日が2つあることになるが、Kan Xul II が Trias であるとする、誕生日が2つあり、即位日が3つあることになる。9.10.11.17.0 11Ahau 8Mac が IS であり、おそらくその日が誕生日であるにちがいない節が C4 以後に生起している (図34-1)。この節には Trias 1 が生起する (D8)。Kan Xul II の文字が登場するのは、P9 が初めてであり、その前には Trias 2 が生起している

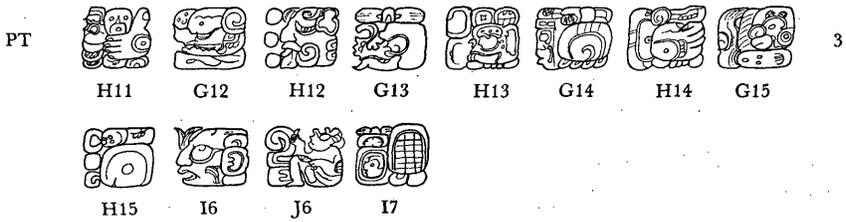
9.10.11.17.0.11Ahau 8Mac



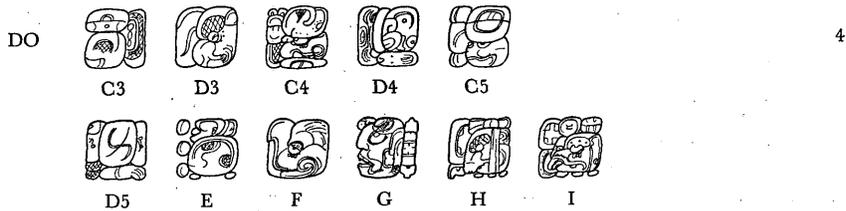
9.10.18.17.19 2Cauac 12Ceh



9.11.0.0.0 12Ahau 8Ceh



9.11.4.7.0 6Ahau 8Cumku



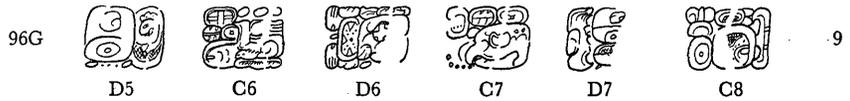
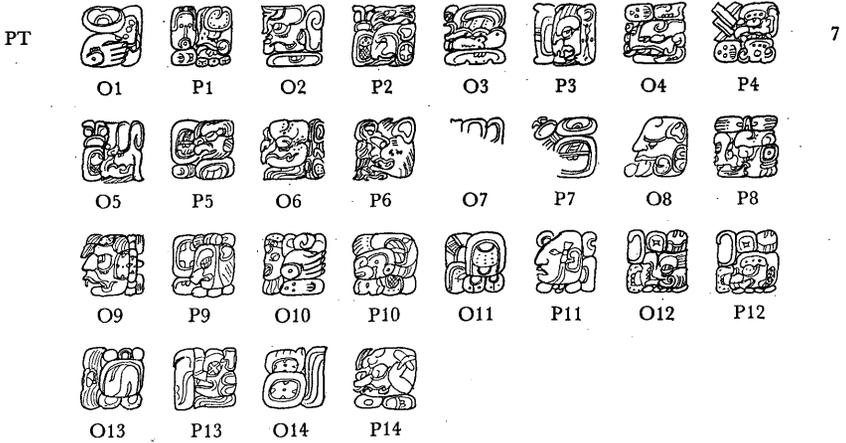
9.11.18.7.7 9manik 5Muan



9.12.11.12.10 8Oc 3Kayab



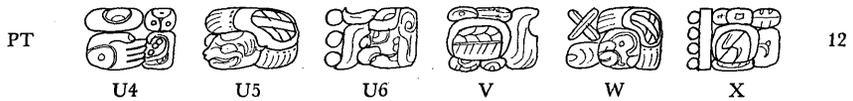
9.13.10.6.8 5Lamat 6Xul



9.10.17.6.0 1Ahau 3Uayab



9.13.14.8.0 8Ahau 18Xul



9.14.8.14.15 9Men 3Yax

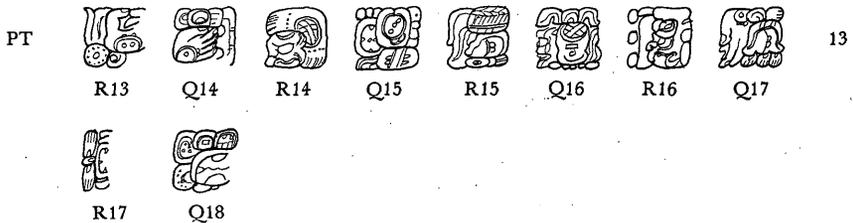


図34 Kan Xul II と Oc

が (O8), その節は 9.13.10.6.8 5Lamat 6Xul であり, 即位の日である。その節以前には Trias 1 (D8), Trias 2 (F8), Trias 2 (H12), Trias 1 (L13) が Kan Xul II の文字なしに生起している。即位をあらわす節は Q2-Q8 にもあり, その節中に Trias 1 が Kan Xul II とともに生起している (図34-8)。それゆえ Trias 1, Trias 2 は Kan Xul II とともに生起しないものもあるが, Kan Xul II とともに生起するのであるから, Trias 1, Trias 2 を Kan Xul II の別名とみてもよさそうである。Trias 1 の頭字体が Trias 2 とみることができる。Berlin は Trias を別人物と考えたが, Mathews & Schele は Hok と Trias は同一人物であり, 9.10.11.17.0 11Ahau 8Mac を実際の誕生日とみ, それより 5.7.0 早い日 9.10.17.6.0 1Ahau 3Uayab は Trias 3 の称号または役職が始まった日とし, 即位より 4.1.12 あとの日 9.13.14.8.0 8Ahau 18Xul をその称号または役職を獲得した日とみている [MATHEWS & SCHELE 1974: 67]。しかしのちに Schele は自説を変えたようで, Trias 3 を Xoc と呼び, Kan Xul II と別人とみている [SCHELE 1984; SCHELE & MILLER 1983]。ここでは別人とみて Kan Xul II と Ox (Xoc) と呼ぶことにする。

Kan Xul II	9. 10. 11. 17. 0	11Ahau 8Mac	誕生?	PT
	9. 10. 18. 17. 19	2Cauac 12Ceh		PT
	9. 11. 0. 0. 0	12Ahau 8Ceh	PE	PT, DO
	9. 11. 13. 0. 0	12Ahau 3Ch'en		PT
	9. 11. 4. 7. 0	6Ahau 8Cumku		DO
	9. 11. 18. 8. 8	9Manik 5Muan		DO
	9. 12. 11. 12. 10	8Oc 3Kayab	Chan Bahlum	PT
			即位	
	9. 13. 10. 6. 8	5Lamat 6Xul	即位	PT, THRONE, SL, 96G
Ox (Xoc)	9. 10. 17. 6. 0	1Ahau 3Uayab	誕生	PT
	9. 13. 14. 8. 0	8Ahau 18Xul	即位?	PT
	9. 14. 8. 14. 15	9Men 3Yax	?	PT

Trias 1, Trias 2 の文字あとには T 74:565a または T 74:793a が生起している。T 74:565a と T 74:793a は同価の文字とみなすことができるので, T 565a の頭字体は T 793a ということができる。ただし D8C9 と L13 では, T 74:565a または T 74:793a がない。C9 の主字は T 793a とみなすことができるので, T 74:793a の言い換えと考えることができる。実際 DO では T74 はなく, T 793a だけである

(図34-4のF)。L13 の場合、その次の文字が消えてよくわからないが、残っている部分から判断して、T 74:565a または T 74:793a ではないようである (図34-6)。

図34-7の O10-P10 の文字と同価と思われる文字は、K10-L10, Q14-R14, U4-U5 にも生起する。K10-L10 は Chan Bahlum の即位の節に生起するものであり、かつ K10 の文字は即位の文字の1つに似ていることから、即位に関する文字と推測できる。O10-P10 も即位の節に生起する。両方とも即位—不明文字群—王名—問題の文字—紋章文字という構造をとっているところからも、そのように思われる。96G でも即位を表わす文字は別の文字が使われているが、同様な構造をしている。たとえば図34-9では、即位の文字 (D5; 主字 T 644)—Kan Xul II—即位に関する文字 (D7; 主字 T 644) となっている。それゆえ Q14-R14, U4-U5 も即位を表わしているのではないかと考えられるのである。

Ox の名づけた人物の謎をとく鍵は先に述べたように、R17 である。それが Kan Xul II の文字であったら、これまでの考察を全面的に改める必要があるが、Trias 1, 2 と Trias 3 は異なる生起型を示すので、別人とみておく。Kan Xul II が登場する PT のテキストは非常にむづかしい。Trias 1, 2 と Trias 3 を別人とみても、PT のテキストを十分に理解することはできない。

(xx) *Chaac* (*Cauac III*/*Chaacal III*)

Chaac は Chaacal III とも呼ばれているが、名を表わす文字の主字に T 528 があるところから名づけられたものと思われる。T 528 を名にもつ人物はほかに2人いて、それらは Cauac I, Cauac II と名づけ、すでに扱った。それゆえこの人物は Cauac III といってよい。T 528 はユカテク語の260日暦の Cauac である。メソアメリカには広く260日暦が残っているが、この日にあたる名には雨や雷などの意味がある [THOMPSON 1971: 87]。おそらく Chol 語の稲妻 *chahc* [čahk] をこの王の名にしたものと思われる。これは適当な名とは思えないが、あだ名としてここでも使うことにする。Chaac の関係する日付は次のとおりである。

9. 12. 6. 5. 8	3Lamat 6Zac	誕生	TXVIII	(1)
(9. 12. 4. 13. 7	1Manik 10Poop	819日節	TXVIII)	(2)
9. 13. 0. 7. 0	5Ahau 8Ch'en		TXVIII	(3)
9. 13. 2. 9. 0	11Ahau 18Yax		TXVIII	(4)
9. 14. 10. 4. 2	9Ik 5Kayab	即位	TXVIII, SL, 96G	(5)
9. 17. 13. 0. 7	7Manik 0Pax		96G	(6)

このうち2番目の 1Manik 10Poop の節は 819 日節であり, Chaac は登場しない。
 4番目の日付 11Ahau 18Yax に関する節は, 損傷が激しく読みとれない。最後の
 7Manik 0Pax の日の節は, 次の王 Kuk の父親として登場するのであり, この日に

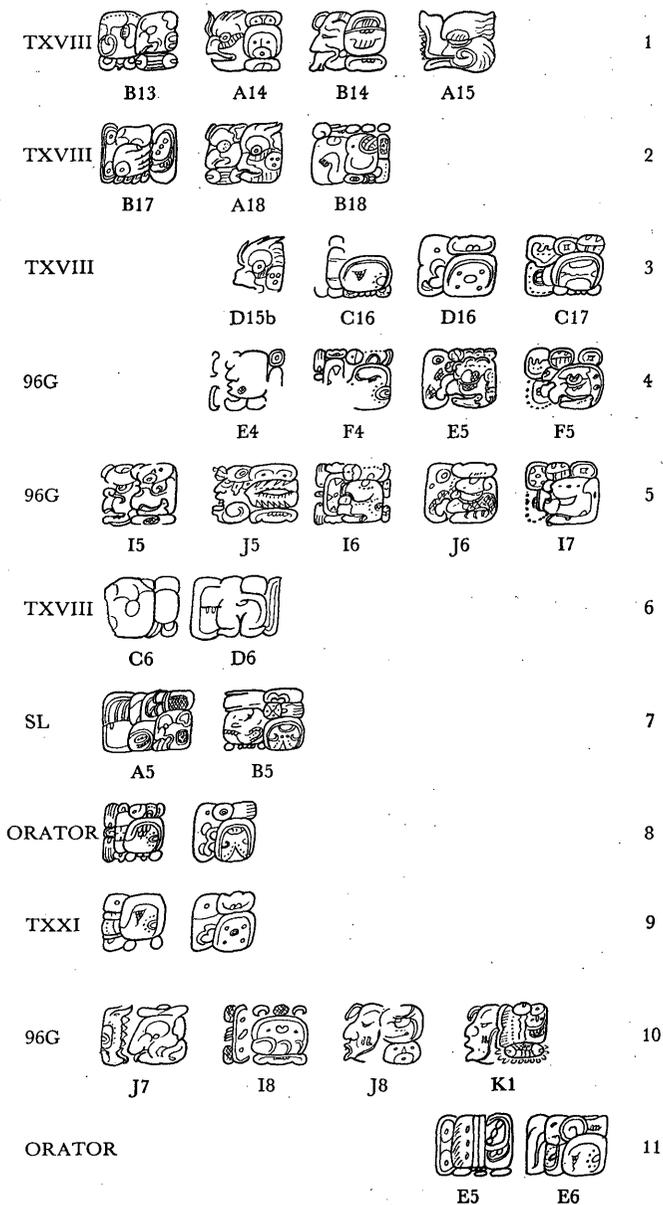


図35 Chaac

はなんら関係ない。以上から, Chaac を表わす文字は全部で6回生起し, 言及範囲は 9.12.6.5.18 3Lamat 6Zac の誕生から, 9.14.10.4.2 9Ik 5Kayab` の即位までであることがわかる。他に日付を伴わず Chaac が生起する例が2例ある。ORATOR と TXXI である。

TXVIII の最初の2つの節には T 528 は生起しない。それゆえ Chaac を表わしていないように見えるが, この2つの節に生起する髪をバックにした頭字体 T 1068 は, TXVIII の D15b に生起し, そのすぐあとに T 528 を主字とする文字が生起している(図35-3)。それゆえこれは Chaac の幼名とみることができる。T 1068 はこのほか TXVIII のスタッコーの文字に1例みることができる [SCHELE & MATHEWS 1979: Bodega Catalog no. 492]。

96G に登場する Chaac を表わす文字は, TXVIII の C16D16 の文字の頭字体とみることができる。F4, I6 の主字は Cauac (T 528) の頭字体であることは明らかである。右すみに Cauac の特徴である輪を点で囲んだものがみえる。同様に SL の B5a も一部不明であるが, T 528 の頭字体とみることができる(図35-7)。96G の E5 と J6 は TXVIII の D16 と同価である。D16 の T 585a の頭字体が描かれているものと考えられる。しかし E5 と J6 の頭字体はかなり異なる。上接字も異なっている。

SL の B5b の上接字は, TXVIII, 96G に生起する Chaac を表わす句の前接字と同じ T 238 であるので, B5b は同じ文字の書き換えとみることができるかもしれない(図35-7)。しかし, 頭字体と幾何体の例がすでにあること, 同じ幾何体の文字素がまったく異なること, それらの交替例はパレンケではみいだせないことから, 異なる文字とみななければなるまい。非常に似た環境にあり, 前接字が同じであるので, よく似た意味をもつものと推測できるが, これは他の遺跡における生起例を考察する必要がある。

SL に登場する Chaac の文字 (B5) のすぐ前は即位を表わす句である (A5)。これには, すでに何度も触れている T 679 がついている。「～まで」という意味を抽出したが, ここでもあてはまる。B3 には 11haab, 2katun の文字がみられる。T 679 を介して生起している日付の関係は次のようになる。

(9. 11. 18. 9. 17) 7Caban 15Kayab B4
(2. 11. 12. 5)
 (9. 14. 10. 4. 2) 9Ik 5Kayab C1

7Caban 15Kayab から 9Ik 5Kayab まではまさに 2Katun 11Haab (Tun) であ

り、B3 から C1 までは、「Chac Zutz' の誕生 (A4) 7Caban 15Kayab (B4) から Chaac の即位 (A5) 9Ik 5Kayab まだが 2Katun 11Haab (Tun)」と訳することができる、ここでも T 679 は「～まで」という意味であることが確認できる。すると Uinal, Kin の数値は、短縮の場合省けるということができる。

図35-6は誕生文字と即位文字が T 679 を介して生起しているの、誕生から即位までという意味と考えることができる。DN は 2.3.16.14 (D4-D5) であり、それが誕生から即位までの期間である。

9. 12. 6. 5. 8	3Lamat 6Zac	誕生
<u>2. 3. 16. 14</u>		DN
9. 14. 10. 4. 2	9Ik 5Kayab	即位

Chaac の妻は、96G の J7-K1 に Kuk の母親として生起している (図35-10)。K1 がもっとも主要な部分であることは、OVAL の E5 におなじ主字の文字があることからわかる (図35-11)。これも Chaac の妻を表わす文字と考えられるからである。この女性を Caah と名づけることにする。同じ文字はクナ・ラカンハ (Kuna Lacanha) のリンテル1にもみることができる [COE & BENSON 1966: Figs. 9, 11]。

·(xxi) *Chac Zutz'*

Chac Zutz' は赤 (chac) の文字素 T 109 とこうもり (zotz'/zutz') の文字素 T 756 からなるので、Chac Zutz' と名づけられたと思うが、SL と SCRIBE に登場する。誕生文字のすぐ後にあらわれる Chac Zutz' の文字は幾分不明瞭であるが、他の個所にあらわれる Chac Zutz' の文字と接字が異なる。その接字 T 69 と赤を表わす接字 T 109 の交替例は少なくともパレンケではないので、同意文字とみなすわけにはいかない。即位の前の名と即位後の名の違いは、Chaac の名の考察のときにみたように、ありうることで、この場合それであろう。

9. 11. 18. 9. 17	7Caban 15Kayab	誕生	SL
9. 14. 11. 12. 14	8Ix 7Yaxkin	即位	SL
9. 14. 11. 17. 6	9Cimi 19Zac		SL
9. 14. 13. 11. 2	7Ik 5Zec		SL
9. 14. 17. 12. 19	2Cauac 2Xul		SL
9. 14. 18. 1. 1	7Imix 4Ceh		SL
9. 14. 18. 9. 8	5Lamat 6Uo		SL

9.11.18.9.17 7Caban 15Kayab

SL  1
A4

9.14.11.12.14 8Ix 7Yaxkin

SL   2
C2 D2

9.14.11.17.6 9Cimi 19Zac

SL   3
E2 F2

9.14.13.11.2 7Ik 5Zec

SL   4
D3 E1

9.14.17.12.19 2Cauac 2Xul

SL   5
F3 F4a

9.14.18.1.1 7Imix 4Ceh

SL     6
F5b G1 H1 G2

9.14.18.9.8 5Lamat 6Uo

SL   7
G4b H4a

9.14.18.9.17 1Caban 15Uo

SL  8
H5b

SCRIBE  9
A6

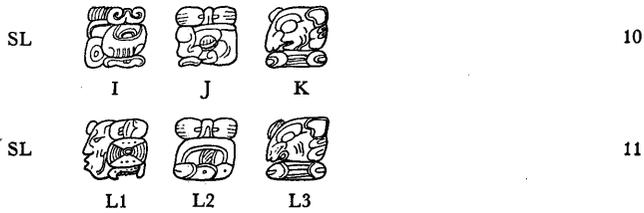


図36 Chac Zutz'

9. 14. 18. 9. 17 1Caban 15Uo 3Katun 記念 SL
 9. 15. 0. 0. 0 4Ahau 13Yax PE SL

SL の文字テキストの下には3人の人物が座った姿勢で描かれている。中心の大きな人物は Chac Zutz' を表わすにちがいない。その両側にすわって手に王冠(?)をもつ男性、儀式用楯(?)をもっている女性は、テキストに触れられている。左の人物の名は IJK の文字で、右の人物の名は L1-L3 とと思われる(図36-10, 11)。両者を比較すると、異なる部分はそれぞれ最初の文字だけである。2番目の文字の主字が異なっているが、これは頭字体と幾何体の交替例であり、同じ文字である。それは TI, PT のテキストから証明できる。L1 は女性を表わす文字素 T 1000F が接字としてついている。この文字は TXVIII のタブレットならびにスタッコーにも生起する(図12-7, 8, 9)。もっとも TXVIII のタブレットの場合1が前接字としてついており、まったく同じではないが、同一人物を表わす文字とみてさしつかえなからう。

9.14.18.9.17 1Caban 15Uo は誕生の 3Katun 記念日である。誕生を表わすカエルの文字が、通常であれば上を向いているのであるが、この場合さかさかになっている。これについている接字 T 103 が重要な働きをするものと思われる。

(xxii) Kuk II

Kuk II は 96G と宮殿の北正面 (Palace North Façade) に登場する。碑文に刻まれたパレンケ最後の王である。96G では即位と即位の 1Katun 後の記念を表わす節に Kuk II の文字は生起する。

9. 16. 13. 0. 7 9Manik 15Uo 即位 96G
 9. 17. 13. 0. 7 7Manik 0Pax 1Katun 記念 96G
 9. 17. 13. 0. 0 13Ahau 13Muan PE 96G

名を表わす文字は同じであるが、その前につくおそらく称号を表わす文字は比較する価値がある。G3a, I2a と Fa, そして G3b, I2b と Fb は同じ文字の幾何体と

9.16.13.0.7 9Manik 15Uo



9.17.13.0.7 7Manik 0Pax



9.17.13.0.0 13Ahau 13Muan

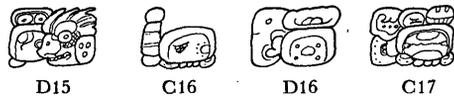


図37 Kuk II

頭字体の書き換え例のように思われる。それは Chan Bahlum の称号と同じ文字であり、それらと比較すると、その交替を確かめることができる。また H3a, J2a と G は同じ文字の幾何体 (T 507) と頭字体の書き換え例であり、H3b, J2b, H も同じ文

字である。H3b, J2b と H では接字にちがいがみられるが、同価とみて問題ないであろう。即位から 1Katun 記念の節には 5Katun 表示をもつ Pacal が登場する。Pacal が死んで 5katun である。

Pacal の文字のあとの文字 L7 の意味はよくわからない。その文字を主字にもっている句を図37-5, 6, 7, 8に挙げた。図37-5, 6, 7 はいずれも DN または CR のあとに生起する句である。

V. 文字の交替

この章では、これまでに扱わなかった文字の交替例について検討する。誕生、即位、紋章文字は王の文字を取りあげた前章に多くみられたが、それらもここでまとめて扱うことにする。

(i) 誕生を表わす文字の主字は、1例を除き、いずれもカエルが上を向いた文字素 T 740 である。それにつく接字は、下接字として T 125, T 246, またはそれらの幾分変化した形に、右接字として T 181 がついたものが大半をしめる。それらの例は T 181:125 系が11例、T 181:246 系が8例である。T 181 がなく、T 125, T 246, またはその変換形がただけのものは、ここで検討した31例中9例ある。その分布からみて、T 125=T 246 とみてさしつかえないであろう。残り3例は、GII の誕生をしるす T 740:24.125 (図10-9), Pacal の誕生をしるす SARCO 3 の T 740.181:88.125h (図28-2), Chac Zut' の誕生から 3Katun 目の記念を表わす T 103:740i:24 である (図36-7)。T 88.125h と転写した文字素は、T 88 と T 125 が融合して、T 125 は右端の要素しか描かれていないように思われるので、125h と書き下した。T 740i はカエルがさかきになっているところから、T 740 と区別して T 740i とした。しかし T 740 と同じで、意味の違いは T 103 が担っていると考えられる。その証拠は、即位の文字の項で述べる。

(ii) 即位を表わす文字は、ほとんどの場合2文字からできているが、最初の文字の主字の違いから、3つに大別できる。細かくみると、いろいろな書き方が許されるので、主字の違いにより、(1)着座の文字 T 644, (2)手 T 713, (3)足 T 700 に分けて論じる。

(1) 着座の文字 T 644 は主に TIE と 96G に生起する。TIE に生起する文字は T 644.116:130.125h が4例、T 116 と T 130:125h? の位置が逆、すなわち

八杉 マヤ文字の分析 II

TIE			1
	A11	B11	
TIE			2
	G6	H6	
TIE			3
	I3	J3	
TIE			4
	I8	J8	
TIE			5
	L3	K4	
TIE			6
	L10	K11	
TIE			7
	M12	N12	
TIE			8
	R10	Q11	
TFC			9
	N7	O7	
96G			10
	D5	C6a	
96G			11
	F3		
96G			12
	H2		

96G		13
	J1 I2a	
96G		14
	K4b	
96G		15
	D7 C8	
96G		16
	E6 F6	
96G		17
	G5 H5	
96G		18
	B7 A8	
TIW		19
	T7 S8a	
TIW		20
	R8 Q9	

図38 即位の文字 I

T 116 が下にきて、T 130:125h が右にくる例が2例ある。その他に T 116 が T 88 に置き換わった例が1例ある (TIE-M12: 図38-7)。

96G では T 644:178.181 の変化形である。T 181 には上部の空間に通常3つの点があるが、D5 では3つの点がある場所におそらくウサギと思われる動物が描かれている (図38-10)。T 178 は T 534 と同価であるが、T 178 のかわりに T 534 が3つの点の占める場所に入っている例が2つある (F3, H2: 図38-11, 12)。T 644 は着座の文字であり、ユカテク語で読むと、kum/kul となる。この動詞はいわゆる位置動詞であり、過去形 (完全相) では kumlah/kulah となる。T 178/534 は la と読み、T 181 は ah であるという意見が有力である。T 178/534 と T 181 が結合すると、la-ah > lah となり、着座の文字の読みと合致する。一方ウサギの方

は、文字遊びの1つとみられる。というもの、T 181 は月の文字であり、その中にウサギが描かれているのは、月にはウサギが住むというマヤの思想の1表現とみることができ、文字の構成に直接関係するものではないからである [cf. SCHELE 1977: 54–58]。これらは Thompson のカタログでは T 180 として登録されている。しかし上でみた見方が正しいとすると、ウサギが描かれている方は T 181 と同価であるのに対し、T 534 が描かれている方は T 178/534+T 181 であり、これを T 180 とするのはよいが、両者を T 180 とするのはよくないことがわかる。

即位の句の2番目の文字は、いわゆる接字結合 (affix cluster) といわれるものである。通常 T 59.168:188 であるが、パレンケでは、T 59 は T 113/T 51/T 53 にかわっている。ここから T 59=T 113=T 51=T 53 が導かれる。T 168 が頭字体になると、96G の F3, H2, J1 のようになる (図38-11, 12, 13)。いずれも Ahau の頭字体として使われるものであり、T 168 は Ahau と交替するといえる。TIE では、T 168:188 のかわりに T 1030a:24 になっている (図38-1, 2, 3, 5)。K11 では T 188 が頭字体にかわったように思われる (図38-6)。Q11 では T 513 に似た文字素が T 168 と T 188 の間にはいて、他とは異なっている (図38-8)。

96G では、即位を表わす節の最後に、即位の文字 T 644 を含む句がある (D7, G5: 図38-15, 17)。その句の2番目の文字はいずれも同じである。E6 も T 188 と思われる文字素があるところから、それに相当する文字とみなせる (図38-16)。しかし同じ文字がありながら、B7 は異なる句と思われる (図38-18)。

96G の即位の1Katun 記念をしるす節に生起する文字 (K4b) は T 103:1000d:188 である (図38-14)。SL で誕生の3Katun 記念をしるす場合も T 103 が使われていたので、その接字が記念日に関することを表わすといえることができる。

TIW の T7-S8a は即位を表わす句である (図38-19)。T7 と同じ構成の文字が R8 にある (図38-20)。しかし2番目の文字は異なる。とはいえず T 713 によって即位を表わす文字句の2番目の文字の主字と同じ T 757 である。これも即位とみると、Ah Po Hel が 9.9.13.0.17 7Caban 15Poop に即位したことになる。しかしこれを裏付ける証拠は他にない。

- (2) 手を主字とする文字の大部分は、手の上に T 58.665 がある。しかし TIW の S9 では頭字体と T 24 が T 665 のかわりに使われている。T 665 の頭字体とみることができそうである。その他 T 58.665 のかわりに頭字体がある場合 (HS-A6a) と、結び目の文字素 T 60 にかわっている場合 (TIW-E4, TC-O13, TFC-M12,

TC			1
	F7	E8	
TC			2
	P1	Q1	
TC			3
	Q7	P8	
TC			4
	Q15	P16	
TC			5
	R6	S6	
TC			6
	S11	R12	
TC			7
	R16	S16	
TC			8
	T3	U3	
TC			9
	T17	U17	
TC			10
	L3	M	
TC			11
	O4		
TFC			12
	E3	E4	

八杉 マヤ文字の分析 II

TS			13		
	L2	M2			
PT			14		
	P18				
HS			15		
	A6a	A6b			
TIW			16		
	S9	T9			
TIW			17		
	E4	F4			
TC			18		
	O13				
TFC			19		
	M12				
TFC			20		
	O2	N3			
PT			21		
	R5	Q6			
SL			22		
	A5				
SL			23		
	C2				
PT					24
	O1	P1	O2	P2	

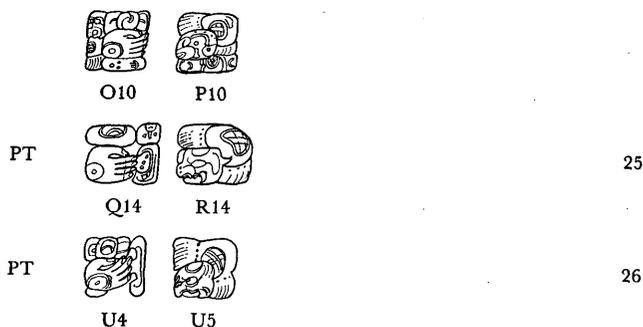


図39 即位の文字 II

O2) がある。PT-R5, SL-A5, C2 では若干形が異なるが、手の上の文字素は T 60 に含んでもよいように思われる。

PT の O1 と Q14 では T 121 にかわっている (図39-24, 25)。U4 では T 60 の変化体であるが、その次の文字は Q14 の次の R14 と同じであり、同価とみなされる (図39-26)。O1 の T 121:713.181 は Kan Xul II の即位の日に生起する文字であり、しかも P2 には即位の句の 2 番目に生起する T 89.204:757 があることから、即位の文字とみなくてはならない。

即位を表わす句の 2 番目の文字としては、T 89.1:757 が使われる。T 1 は T 11, T 204 と交替する場合がある。またそれらの接字をもたない場合や、T 60, T 168 がつく場合もみられる。

先の 96G の着座の文字のところでも見たのと同じ構造を、PT にもみることができる。K7 に即位の文字があり、節の終わりの K10-L10 に、また即位を表わしていると判断される文字がある (図40-5)。同様 O1 から P10 の節でも、節の終わりの O10-P10 に即位を表わしていると思われる文字がある (図39-24)。Q14-R14 と U4-U5 では、即位の節の終わりに生起する即位の文字しかない (図39-25, 26)。

(3) 足 T 700 を使って即位を表わす例は 6 例ある。はっきり細部がみえる PT の K7 から、その文字は T 168:700:125.116 と転写できる。THRONE の例の細部は不明であるが、T 168:700:125.116 であることはまちがいない。TXVIII の C11 では左接字として T 228 がついている。TXVIII の D6 では、「～まで」という意味を表わす T 679 がついている。SL の B1a も、頭字体の形をした接字が左についているが、T 700 を用いて即位を表わしているように思われる。

T 700 が即位の文字として使われる場合は、(1)や(2)の場合のように 2 つの文字で句をつくることはなく、単独で生起する。

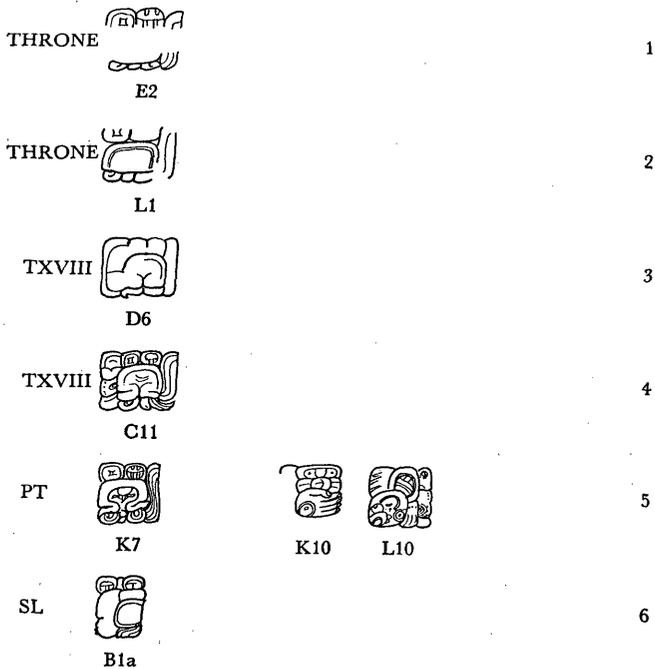


図40 即位の文字 III

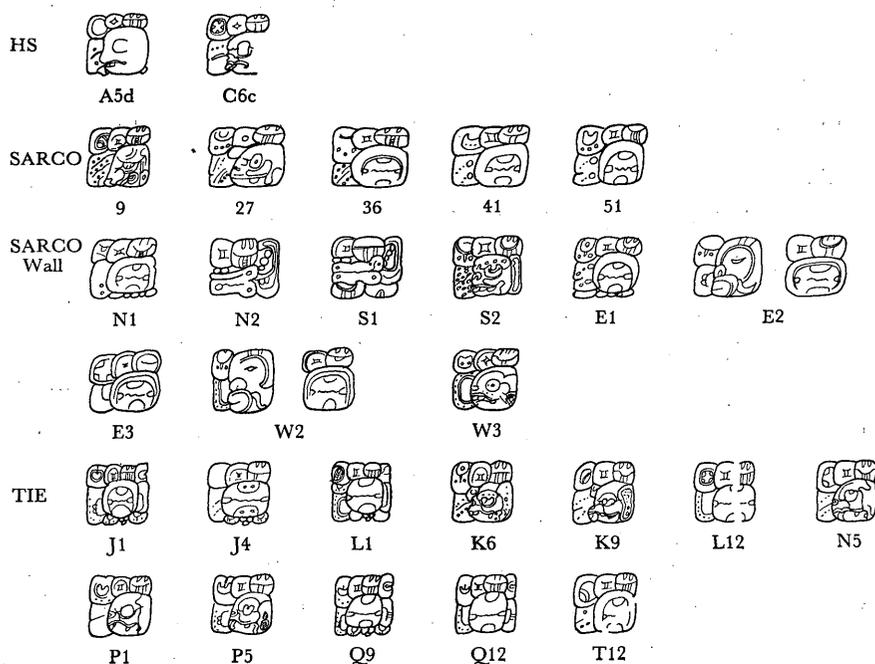
(iii) 紋章文字の主字には T 570, T 590, T 793a, T 1040v が使われている。SARCO の 27 や SARCOwall の W3 などは、T 1040 とかなり異なる印象を受けるが、死の特徴をもつ T 1040 とみてさしつかえないように思えるので、1つにまとめて T 1040v とした。幾何体が2つ、頭字体が2つあるところから、T 570 の頭字体が T 793a, T 590 の頭字体が T 1040v とみるのが合理的である。しかしその支えとなるのは、T 590 が骨を表わし、T 1040v が骸骨を表わすところに基づいているにすぎない。T 590 を主字とする紋章文字は2例しかなく、しかもその構成の仕方は通常の紋章文字と異なり、左接字がなく、T 181 がついている。それゆえ、T 570 の頭字体が T 793a, T 590 の頭字体が T 1040v とみるのは、決していい見方ではない。PT において、紋章文字が2つ連続して使われる例が2つあるが、その場合、T 793a と T 1040v が並んでいるので、両者は異なる範疇に入ることがわかる。しかし T 570 との関係はわからない。それゆえ3つを頭字体と幾何体の関係に結びつける必要はないかもしれない。しかし T 570 の頭字体が T 1040v であると推測させてくれる例がある。それはヤシュチランの例で、そこでは T 1040v と T 570 が交替しているようである(リントル 9-C4, リントル 58-A)。とはいえ T 570 とみた文字素には、パレンケにはない点があり、T 1040v とみた文字素もパレンケのものと同じとはいえない

いので、これから T 570 の頭字体が T 1040v であると結論づけることはできないが、T 570 の頭字体が T 1040v であると思われる例である。

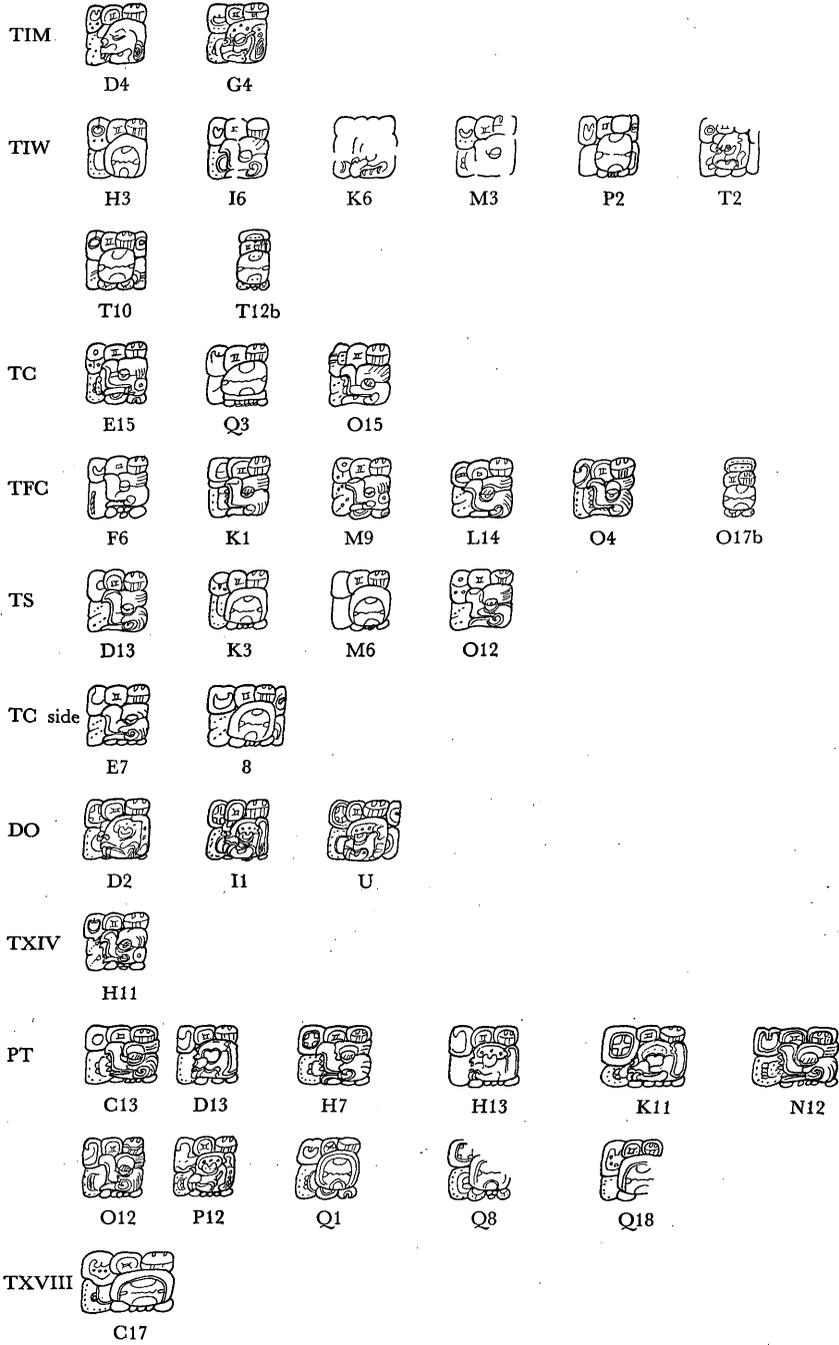
T 570 はほぼすべてで用いられている印象を受け、それがパレンケの紋章文字の正体とみられるのであるが、実際はここで検討した77例中32例しかない。T 1040v は26例もあり、T 793a は17例である。テキストにより若干偏りがあり、十字グループでは T 570 は用いられているが、T 793a が好まれ、T 1040v は用いられていない。逆に HS や DO や 96G では T 1040v しか用いられていない。

紋章文字の接字は、いわゆる水グループの接字と T 168 である。水グループの接字は大きくわけて、T 35, T 36, T 38, T 40 の若干変化した形とみてよい。上部は kan の文字素と Ahau の文字素と、ハート型または U 型の下に3つの点をもつ文字素性の3つの形がある。下部は斜め横に水滴のような点が流れているものと、いわゆる Mol の要素をもつもの、Mol の識別素の小さな点がなく、ただ半円状の内枠と外枠の間に点線があるものの3つの変化形がみられる。上部と下部にわけられず、半円状の内枠と外枠の間に点線があるだけのもの (T 35) もある。T 168 は、96G を除き、いわゆる ich 文字素 T 687 が左で、ben 文字素 T 584 が右についている。

後接字としては、T 178 と T 130 と、1例だけであるが T 12 がみられる。T 139,



八杉 マヤ文字の分析 II



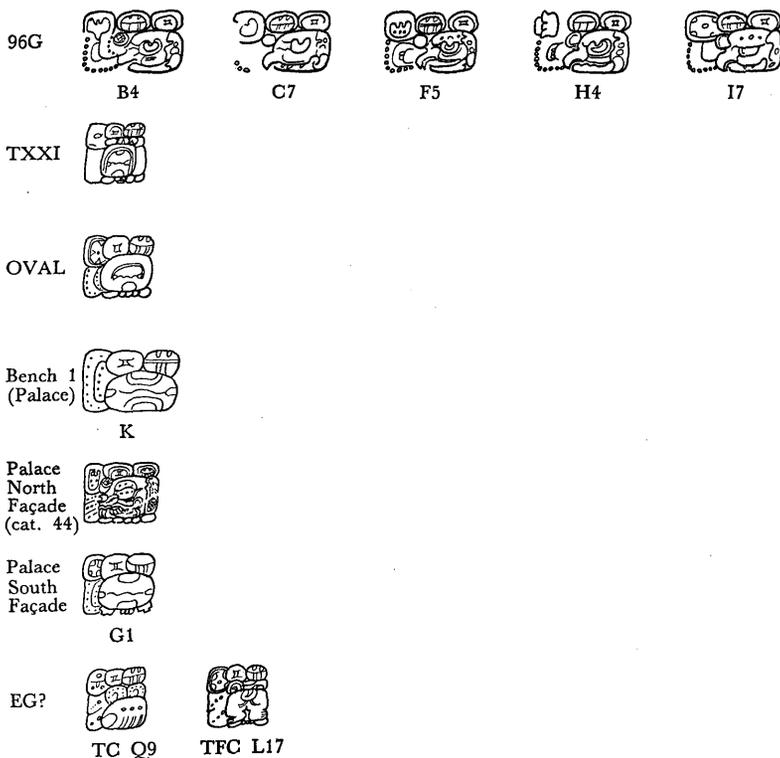


図41 紋章文字

T 140, T 142 もみられるが、T 178 の交替形とみたい。

SARCOwall では、水グループの文字素が、T 1016 について1文字ますを占め、T 168:570 と分かれて書かれている例が2つある (E2, W2)。この書き方はナランホでもみられた。

TC の Q7, TFC の L17 にみられる文字は紋章文字の資格を具えている。TC の Q7 の前に生起する文字は CR であり、それに直接結びつくものはない。しかしこの部分の主語となる人物は Kuk I であり、それに結びつくとなると、Kuk I の出身地ということになる。TFC の L17 の前は T III.IX:741? であり、この文字は DO の C1 と M に生起する (図28-20, 図34-5)。C1 の次の文字はいわゆる u cab 文字であり、その次には Pacal が生起するところから、Pacal とのある関係をもつ人物の可能性はある。それゆえこれも紋章文字とみてもよい。

(iv) 4 と空

図42は TXVIII にみられるものである。これらは同じ文字の書き換えとみられる。

これらの比較から、数字の4と「空」の文字といわれてきた T 561 が交替するの
 分かる。数字の4は kan であり、空は ka'an と現代ユカテク語で表記するが、古典
 ユカテク語表記では can と caan である。それゆえ同類音による交替とみることがで
 きる。これにより、長年「空」とみられてきた T 561 が確かに「空」という意味で
 ある確証が得られた。

図では T 74 と T 502 の交替も
 みられる。この交替は月 Mac
 においても確かめられるので



図42 4 と 空

[THOMPSON 1971: Fig. 18], これも同類音による交替とみなすことができる。T
 74 はランダのアルファベットから ma と読める。T 502 も ma かそれに類する音をも
 つはずである。

(v) 「9-16-9」句

TIE と TIM に、9.9.0.0.0 から 9.12.0.0.0 にかけて、1Katun ごとに、図のよう
 な 9caan-kin-16kin-9hel と、9, 16, 9 という数字をもつ句が生起する。これらはす
 べて同一句の書き換えとみることができる。この句を「9-16-9」句ということにす
 る。

最初の文字 T IX.561:23 は4例と
 も同じである。ただし図43-2は1ます
 に2つの文字がおさまっているので、
 下接字 T 23 が右接字として生起して
 いる。

第2番目の文字は T 115.1022?:
 116 が2例、接字 T 116 を欠いている
 例が1つあり、TIE の Q1 はまったく
 異なる文字である。T 1022? と転写し
 た文字は Thompson のカタログにな
 ないので、絵文書形の T 1022 で代用し
 た。

3番目は2番目の文字とよく似てい
 るが、左接字は16で、T XVI.1022?:

116 と書き下せる。図43-3以外は16が頭字体で描かれている。

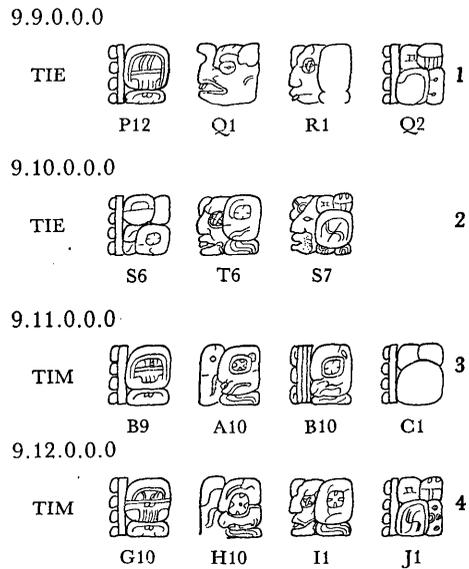


図43 「9-16-9」句

4番目の文字 T IX.168:573.21 は、図43-2 では9が頭字体で書かれ、後接字は T 130 にかわっている。

「9-16-9」句は、すでに検討したナランホでも生起している（石碑13 [八杉 1986:259 図18-7]）。しかしそこには 9Hel の文字はない。

(vi) Katun の終わりの節

IV章の xiv でふれたように、T 125.669b:130 で始まる節を集めてみた。T 125.669b:130 の次に生起する文字の違いから5つのグループにわけてみた。

(1) Baktun と T 1016 を主字とする文字が続く節を10挙げた。その次には名前を表わす文字が生起する形がふつうである。図44-1,2の B7, C11 は Baktun 文字でない可能性があるが、生起形は同じである。図44-3,4は不明であるが、3は Baktun と T 1016 を主字とする文字が続いているようである。図44-4のほうは 9.6.13.0.0 に生起する節であり、H10 は T 125.669b:130 のようにみえるが、以下の文字は Baktun と T 1016 を主字とする文字が生起していないようである。同様 9.7.5.0.0 に生起する節は(図44-6)、T 125.669b:130 がなく、生起形に反するが、Baktun と T 1016 を主字とする文字が生起し、次に名を表わす文字があるので、このパターンに入られる。

Baktun は頭字体と幾何体の両方が生起する。図44-7,9,10 では Baktun 文字の特徴である顎が手に置き換わった文字をはっきりみることがわかる。しかし図44-1,2,3の場合は違うようである。Baktun 文字の前接字は T 11?, T 53??, T 191, T 204, T 232 があり、それぞれ交替できる接字とみることができ。T 1016 を主字とする文字は図44-1の A8 では、T 204.36.1016:24 である。他の例では T 204 は T 1, T 11 と交替している。そして T 24 は T 82 と交替している。TIE の K8 では T 1016 は T 1007 の置き換わっている。これは次に生起する Kan Ik に女性表示文字があるためと思われる(図44-7)。図44-8では T 125:669b:130 と Baktun 文字が1文字まずに入り、つぎは T 205?.1016:24 と書かれて、若干他と異なるが、生起形が同じであるところから、同じ意味を伝えていると思われる。

(2) 図44-11,12,13は 9.9.0.0.0, 9.10.0.0.0, 9.11.0.0.0 に生起する文字群である。最初の文字が少し異なり、11では T 191.586b:59? であり、12では T 205?.586b:59 である。13は消えて細部がよくわからないが、同様な文字であることが、形からわかる。その次にはそれぞれの Katun 終了の日 3Ahau, 1Ahau, 12Ahau がしるされ、頭字体 (T 1034?) が生起している。図44-13,14,15は途中からの文字が同じものである。TIM の D3 (図44-13) は図44-14 では2文字に分けて書かれている。

八杉 マヤ文字の分析 II

TIE							1
	A7	B7	A8	B8	A9	B9	
TIE							2
	D10	C11	D11	C12	D12	E1	
TIE							3
	E11	F11	E12	F12			
TIE							4
	H10	G11	H11				
TIE							5
	J6	I7	J7	I8	J8	I9	
TIE							6
	J11	I12	J12	K1	L1		
TIE							7
	K7	L7	K8	L8	K9		
TIE							8
	O4	P4	O5	P5			
TIE							9
	Q7	R7	Q8	R8	Q9		
TIE							10
	S10	T10	S11	T11	S12	T12	
TIE							11
	R2	Q3	R4	Q5			
TIE							12
	T7	S8	T8	S9	T9		

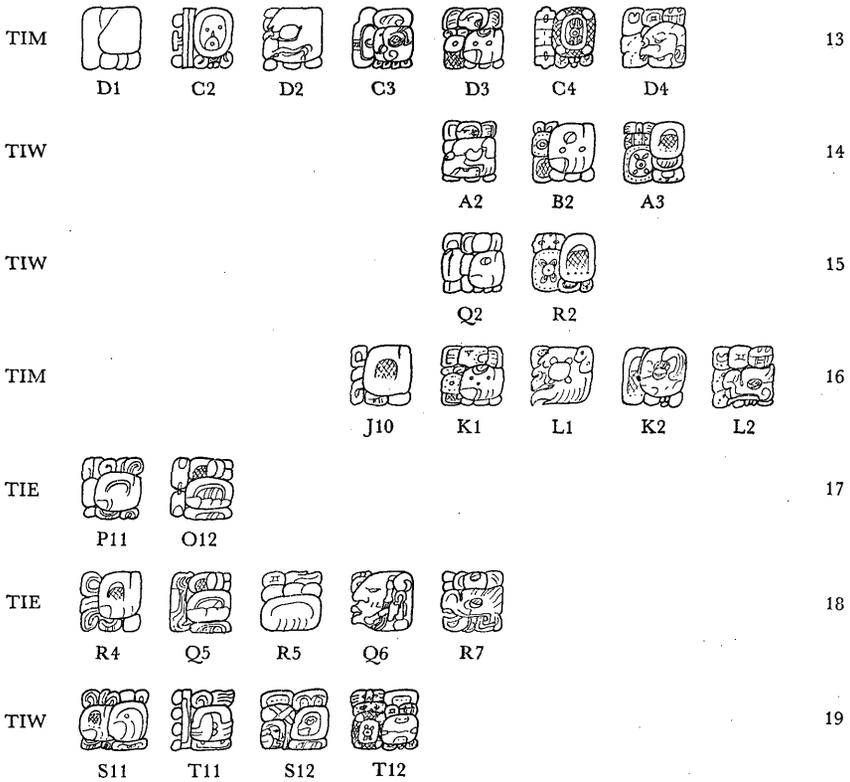


図44 Katunの終わりの節

A2の頭字体はおそらく Tun であり、全体で Katun を表わすのではなからうか。図44-13, 15 では頭字体が省略されている。図44-16にも同じ文字がある。その前には T 125.669b: 130 が生起しているので、T 125.669b: 130 と T 191.586b: 59? / T 205?.586b: 59 が同価ではないかと考えられるのである。

- (3) T 125.669b: 130 の後には、T 191.89: 565a: 24 または T 204.89: 565a: 24 が生起している。9.9.0.0.0 にまつわる節であり、同じ文字 T 125.669b: 130 で始まる(図44-17, 18)。
- (4) T 125.669b: 130 のあとには母親と子の関係を表わす T I: 606: 23 があり、T IX: 78: 514: 4 が続く。その次には T 11: 187: 1016 があり、T 1016 が生起している(図44-19)。
- (5) GI, GII, GIII の文字が生起する同様の節が2つある。これは図10-13, 14, 15 と図10-16, 17, 18 で取り扱った。9.11.0.0.0 と 9.12.0.0.0 という 11Katun と 12Katun の終わりの節に生起する。やはり同じ文字 T 125.669b: 130 で始まる。

㊦ bacab 文字

ナランホではいわゆる「bacab」文字がよく生起したが、パレンケでは意外にその文字の生起は少ない。図はその文字の交替例を挙げたものである。2の左下の文字素(T 142/314?)がない形が通常よく生起する。1は右下の T 501 を頭字体 T 757 に換えたもので、その上には T 25 を2つ並列している。T 25 は1つでも2つ並列されても同価である。3は右下の文字素を頭字体にしたものであるが、動物の手が描かれている。おそらくマヤ人が好むテンジクネズミ ba を描いたものであろう。T 501 は ba と読めるので、同音を利用した交替例である。4は左の T 501 を頭字体に換えたものである。下部が損傷して見えないが、横顔の形にただけで、要素は同じものと思われる。

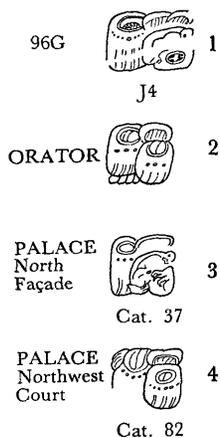


図45 Bacab 文字

VI. お わ り に

まずパレンケのテキストにある日付をとりだし、長期暦上の位置を定めた。以前はそれが解読といわれたこともあったが、現在ではそれはテキストの分析の最初の段階にすぎないといってよい。日付については、少しではあるが、前後の日付と結び合わず、解釈のむづかしい日があった。つぎに日付や文字の生起パターンを頼りに、同似節や互に関係ある節等を取り出して、それを線形に並べた。これでほとんど分析作業は終了したといってよい。しかしこれでパレンケの文字をすべて網羅しているわけではない。主要なテキストは取り挙げたが、取り挙げなかった断片的な文字はまだまだたくさんある。また線形に直したものでも、まったくふれなかった部分がたくさんあり、またたとえば PT の C1-D17 のような長い節などのように、区切りのわからないものもあった。それらはいずれ扱うことになる。ここで取り挙げたテキストで分析をし残した部分をするすと、次のようになる。

HS	C1-D1, D2-C4a, C4d-D5, C6d-D6
TIE	D2-D4, C7-C10, F1-E4, E6-E9, E11-G4, G10-J1 (以上は損傷部分), O7-11, S4-T5
TIM	A4-A9, F9, H4-H9, I2-J3 M6-N7
TIW	A7-A8, A10-B12, D2-D6, C8-D10, F12-G1, G12-J1, J6-L3, K9-L10, N3-P1, O6b-P6, O8-P8, T2-T3, T7-S8

TXIV	A2-B4, A6-B10, E2-F4, G4-H4
PASADENA	B3-B5
THRONE	G-J, M-N
ORATOR	A-C, E1
SCRIBE	A-C
TXXI	A-B, D

テキストをこま切れにしたため、このままでは全体像がつかめない恐れがあるので、文字量の多いテキストについては、手書きのテキストをつけることにする（付図1～10）。

本シリーズでは、文字の使われ方、すなわち文字や文字素の生起パターンや書き換えの問題、同価の文字の同定やそれぞれの文字の発生時期に興味があるところから、線形に並べた文字を利用して、パレンケの文字の使われ方について検討した。パレンケではパカル王の時代に文字を獲得し、すぐさまパレンケ独自の文字を創造し、他ではみられない長文の神話情報までも書き残した。パレンケが創造したり、豊かに発展させた文字には、神話に関する部分のほかに、819日暦、「さかさコウモリ」による期間の終わりの表現、全身像による暦表記、月の終わりを表わす **Tun** 文字等多くある。他の遺跡のテキストを検討すると、パレンケではじめて生まれた文字はさらに増えるものと予想される。短期間に多量のテキストを残したので、文字の交替という点からみて大変興味深い遺跡であったが、時代的な視点をいれると、前述のようにパレンケではじめて生まれた文字がたくさんあることが判明した。文字素の交替、幾何体と頭字体の交替など、いくつかの同価の文字をみいだした。文字と文字ますの関係もはっきりしてきた。しかし文字の真の意味での解読、すなわち意味がわかって、かつ読みがわかるにはまだほど遠い。おそらく名前の文字など、音声符のついていないものや書きかえない文字の真の読みの獲得は不可能であろう。そうしたものは、ここで利用したあだ名を用いる以外にないであろう。

パレンケでは、歴史をしるした部分とともに、それ以外の情報をしるした部分かなり存在した。それらは神話や儀式などの内容をしるしたものであろうが、ほとんど不明である。今以上にはっきりさせるためには、他の遺跡の文字との比較が簡単にできるような資料をうまく整理しておく必要がある。そのひとつは、本論で提示した日付つきの線形テキストである。文字を数字になおしたカタログではなく、文字そのものの、そしてその文字が生起する文脈つきのカタログは、解読のための強力な武器になるはずであるが、本シリーズはその作成の基礎となるはずである。

謝 辞

仕事のかたわら熱心にマヤ文字を研究しておられる斎藤憲二氏のお蔭で、まちがいや勘違いのいくつかを、印刷の前に訂正することができた。あつく感謝申し上げる。

文 献

ACOSTA, Jorge R.

- 1968 Exploraciones en Palenque. *Boletín de Instituto Nacional de Antropología e Historia* 34: 1-8.

BERLIN, Heinrich

- 1943 Notes on Glyph C of the Lunar Series at Palenque. *Notes on Middle American Archaeology and Ethnology* vol. 1, no. 24, pp. 156-159, Carnegie Institution of Washington.
- 1944 A Tentative Identification of the Head Variant for Eleven. *Notes on Middle American Archaeology and Ethnology* vol. 2, no. 33, pp. 16-22, Carnegie Institution of Washington.
- 1945 A Critique of Dates at Palenque. *American Antiquity* 10: 340-347.
- 1957 A New Inscription from the Temple of the Foliated Cross at Palenque. *Notes on Middle American Archaeology and Ethnology*, vol. 5, no. 130, pp. 131-134. Carnegie Institution of Washington.
- 1959 El glifo "emblema" en las inscripciones mayas. *Journal de la Société des Américanistes* 48: 111-119.
- 1959 Glifos nominales en el sarcófago de Palenque; un ensayo. *Humanidades* 2(10): 1-8. Guatemala.
- 1962 Actualidades de la epigrafía maya. *Antropología e Historia de Guatemala* 14(1): 32-37.
- 1963 The Palenque Triad. *Journal de la Société des Américanistes* 52: 91-99.
- 1964 El glifo Zotz invertido. *Antropología e Historia de Guatemala* 16(1): 3-7.
- 1965a Estudios epigráficos. *Antropología e Historia de Guatemala* 17(2): 3-12.
- 1965b The Inscription of the Temple of the Cross at Palenque. *American Antiquity* 30: 330-342.
- 1968 Estudios epigráficos: II. *Antropología e Historia de Guatemala* 20(1): 13-24.
- 1968 *The Tablet of the 96 Glyphs at Palenque, Chiapas, Mexico*. Middle American Research Institute, Tulane University, Pub. 26, pp. 135-149.
- 1970 Miscelánea palencana. *Journal de la Société des Américanistes* 59: 107-128.
- 1977 *Signos y significados en las inscripciones mayas*. Instituto Nacional del Patrimonio Cultural de Guatemala.

Coe, Michael D.

- 1980 *The Maya*. Revised and enlarged edition. Thomas and Hudson.

COE, Michael D. and Elizabeth P. BENSON

- 1966 *Three Maya Relief Panels at Dumbarton Oaks*. Dumbarton Oaks, Trustees for Harvard University.

COE, William R.

- 1959 *Piedras Negras Archaeology: Artifacts, Caches, and Burials*. The University Museum, University of Pennsylvania.

FERGUSON, William M.

- 1977 *Maya Ruins of Mexico in Color*. University of Oklahoma Press.

FOX, James A. and John S. JUSTESON

- 1980 *Mayan Hieroglyphs and Linguistic Evidence*. In Merle Greene Robertson (ed.),

- Third Palenque Round Table, 1978, Part II: Vol. V.*, University of Texas Press, pp. 204–216.
- GOLDSTINE, Herman H.
 1973 *New and Full Moons 1001 B.C. to A.D. 1651*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- GRAHAM, Ian
 1967 *Archaeological Explorations in El Peten, Guatemala*. Middle American Research Institute, Tulane University, Pub. 33.
 1979 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, Volume 3, Part 2; Yaxchilan*. Peabody Museum, Harvard University.
- GRAHAM, Ian and Eric von EUW
 1975 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, Volume 2, Part 1; Naranjo*. Peabody Museum, Harvard University.
 1977 *Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, Volume 3, Part 1; Yaxchilan*. Peabody Museum, Harvard University.
- GREENE ROBERTSON, Merle
 1976 Physical Deformities in the Ruling Lineage of Palenque, and the Dynastic Implications. In Merle Greene Robertson (ed.), *The Art, Iconography & Dynastic History of Palenque, Part III*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School, pp. 59–86.
 1983 *The Sculpture of Palenque, Vol. 1: The Temple of the Inscriptions*. Princeton University Press.
 1985a *The Sculpture of Palenque, Vol. 2: The Early Buildings of the Palace and the Wall Paintings*. Princeton University Press.
 1985b *The Sculpture of Palenque, Vol. 3: The Late Buildings of the Palace*. Princeton University Press.
- GREENE ROBERTSON, Merle (ed.)
 1974 *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part I*. Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School.
 1974 *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part II*. Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School.
 1976 *The Art, Iconography & Dynastic History of Palenque, Part III*. Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School.
 1980 *Tercera Mesa Redonda de Palenque: Vol. IV*. Monterey, California: Pre-Columbian Art Research, Herald Printers.
 1980 *Third Palenque Round Table, 1978, Part II: Vol. V*. University of Texas Press.
- GREENE ROBERTSON, Merle and Robert L. LANDS and John A. GRAHAM
 1972 *Maya Sculpture from the Southern Lowlands, the Highlands and Pacific Piedmont*. Berkeley: Lederer, Street & Zeus.
- GREENE ROBERTSON, Merle and J. Eric S. THOMPSON
 1967 *Ancient Maya Relief Sculpture*. New York: The Museum of Primitive Art.
- KELLEY, David H.
 1962 Fonetismo en la escritura maya. *Estudios de Cultura Maya* 2: 277–317.
 1965 The Birth of the Gods at Palenque. *Estudios de Cultura Maya* 5: 93–134.
 1968 Kakupacal and the Itzas. *Estudios de Cultura Maya* 7: 255–268.
 1976 *Deciphering the Maya Script*. University of Texas Press.
- JONES, Christopher
 1983 New Drawings of Monuments 23 and 24, Quirigua, Guatemala. In Edward M. Schortman and Patricia A. Urban (eds.), *Quirigua Reports Vol. II*, The University Museum, University of Pennsylvania, pp. 137–140.

JONES, Christopher and Linton SATTERTHWAITÉ

- 1982 *The Monuments and Inscriptions of Tikal: The Carved Monuments*. Tikal Report No. 33, Part A. The University Museum, University of Pennsylvania.

LIZARDI RAMOS, César

- 1963 Inscripciones de Pomoná, Tabasco, México. *Estudios de Cultura Maya* 3: 187-202.

LOUNSBURY, Floyd G.

- 1973 On the Derivation and Reading of the "Ben-Ich" Affix. In Elizabeth P. Benson (ed.), *Mesoamerican Writing Systems*, Dumbarton Oaks, pp. 99-143.
- 1974a Exploration of "pacał" glyph of Frontis Piece. In Merle Greene Robertson (ed.), *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part II*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School.
- 1974b The Inscription of the Sarcophagus Lid at Palenque. In Merle Greene Robertson (ed.), *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part II*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School, pp. 5-19.
- 1980 Some Problems in the Interpretation of the Mythological Portion of the Hieroglyphic Text of the Temple of the Cross at Palenque. In Merle Greene Robertson (ed.), *Third Palenque Round Table, 1978, Part II: Vol. V.*, University of Texas Press, pp. 99-115.

MALER, Teobert

- 1908 *Explorations of the Upper Usumatsintla and Adjacent Region: Altar de Sacrificios; Seibal; Itsimte-Sacluk; Cancuen*. Memoirs of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. IV. No. 1.

MATHEWS, Peter and Linda SCHELE

- 1974 Lords of Palenque-The Glyphic Evidence. In Merle Greene Robertson (ed.), *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part I*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School, pp. 63-75.

MAUDSLAY, A. P.

- 1974 *Biología Central-Americana*. (originally published: 1889-1902) New York: Milpatron Publishing Corp.

Mayer, Karl Herbert

- 1980 *Maya Monuments: Sculptures of unknown Provenance in the United States*. Ramona, California: Acoma Books.

MELGAREJO V VANGO, Jose Luis

- 1981 *Escritura y calendario de los mayas*. Mexico: Instituto de Antropología, Universidad Veracruzana.

MORLEY, Sylvanus G.

- 1920 *The Inscriptions at Copan*. Carnegie Institution of Washington, Pub. 219.
- 1935 *Guide Book to the Ruins of Quirigua*. Carnegie Institution of Washington.
- 1937-38 *The Inscriptions of Peten*. 5 vols. Carnegie Institution of Washington, Pub. 437.

RANDS, Robert L.

- 1974a A Chronological Framework for Palenque. In Merle Greene Robertson (ed.), *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part I*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School, pp. 35-39.
- 1974b The Ceramic Sequence at Palenque, Chiapas. In Norman Hammond (ed.), *Mesoamerican Archaeology*, University of Texas Press, pp. 51-75.

RUZ LHUILLIER, Alberto

- 1952a Exploraciones en Palenque: 1950. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 5: 25-45.
- 1952b Exploraciones en Palenque: 1951. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 5: 47-66.

- 1955 Exploraciones en Palenque: 1952. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 6: 79-110.
- 1958a Exploraciones arqueológicas en Palenque: 1953. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 10: 69-116.
- 1958b Exploraciones arqueológicas en Palenque: 1954. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 10: 117-184.
- 1958c Exploraciones arqueológicas en Palenque: 1955. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 10: 185-240.
- 1958d Exploraciones arqueológicas en Palenque: 1956. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 10: 249-299.
- 1962 Exploraciones arqueológicas en Palenque: 1957. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia* 14: 35-90.
- 1976 Nueva interpretación de la inscripción jeroglífica en el sarcófago del Templo de las Inscripciones. In Merle Greene Robertson (ed.), *The Art, Iconography & Dynastic History of Palenque, Part III.*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School, pp. 87-93.
- SATTERTHWAITE, Linton
- 1940 Another Piedras Negras Stela. *The University Museum Bulletin* 8(2-3): 24-27. University of Pennsylvania.
- SCHELE, Linda
- 1974 Observations on the Cross Motif at Palenque. In Merle Greene Robertson (ed.), *Primera Mesa Redonda de Palenque, Part I*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School, pp. 41-61.
- 1976 Accession Iconography of Chan-Bahlum in the Group of the Cross at Palenque. In Merle Greene Robertson (ed.), *The Art, Iconography & Dynastic History of Palenque, Part III.*, Pebble Beach, California: The Robert Louis Stevenson School, pp. 9-34.
- 1977 Palenque: The House of the Dying Sun. In Anthony F. Aveni (ed.), *Native American Astronomy*, University of Texas Press, pp. 42-56.
- 1980 Genealogical Documentation on the Tri-figure Panels at Palenque. In Merle Greene Robertson (ed.), *Third Palenque Round Table, 1978, Vol. IV.*, Monterey, California: Pre-Columbian Art Research, Herald Printers, pp. 41-70.
- 1984 Some Suggested Readings for the Event and Office of Heir-designate at Palenque. In John S. Justeson and Lyle Campbell (eds.), *Phoneticism in Mayan Hieroglyphic Writing*, Institute for Mesoamerican Studies, State University of New York, pp. 287-305.
- SCHELE, Linda and Peter MATHEWS
- 1979 *The Bodega of Palenque, Chiapas, Mexico*. *Dumbarton Oaks*, Trustees for Harvard University.
- SCHELE, Linda and Jeffrey H. MILLER
- 1983 *The Mirror, the Rabbit, and the Bundle: "Accession" Expressions from the Classic Maya Inscriptions*. *Studies in Pre-Columbian Art & Archaeology*, no. 25, *Dumbarton Oaks*.
- SCHLAK, Arthur
- 1983 Non-ages with a Hand-held Calculator. In Stephen D. Houston (ed.), *Contributions to Maya Hieroglyphic Decipherment*, Human Relations Area Files, Inc., pp. 80-87.
- SPINDEN, Herbert
- 1924 *The Reduction of Mayan Dates*. *Papers of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology*, Harvard University, Vol. 6, No. 4.
- TEEPLE, John E.
- 1930 *Maya Astronomy*. *Contribution to American Archaeology* 2, Carnegie Institution of Washington, Pub. 403.

八杉 マヤ文字の分析 II

THOMPSON, J. Eric S.

1962 *A Catalog of Maya Hieroglyphs*. University of Oklahoma Press.

1971 *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction. 3rd Ed.* University of Oklahoma Press.

利根山光人

1971 『古代メキシコ拓本集』 美術出版社。

八杉佳穂

1979 『マヤ文字研究 I』 手稿。

1982 『マヤ文字を解く』 中央公論社。

1983 「マヤ文字の言語」『国立民族学博物館研究報告』7(3): 514-533。

1986 「マヤ文字の分析 I ——ナランホ——」『国立民族学博物館研究報告』11(1): 163-262。

附表1 テキストの日付

HS			
9. 8. 9.13. 0	8 Ahau	13 Poop	A01-B04
12. 9. 8			B05a-B05b
(9. 9. 2. 4. 8)	5 Lamat	1 Mol	B05c-B05d
2.12. 3. 3			B06a-B06c*
(9.11. 1.16. 3)	6 Akbal	1 Yax	B06d-C01a*
(9.11. 6.16.11)	7 Chuen	4 Ch'en	C04b-C04c
Sarcophagus Lid			
(9. 8. 9.13. 0)	8 Ahau	13 Poop	01-02 (South)
(9.12.11. 5.18)	6 Etz'nab	11 Yax	04-05 (South)
(9. 4.10. 4.17)	5 Caban	5 Mac	16 (East)
(9. 6.11. 0.16)	7 Cib	4 Kayab	18 (East)
(9. 6.16.10. 7)	9 Manik	5 Yaxkin	20 (East)
(9. 7. 0. 0. 0)	7 Ahau	3 Kankin	22-23 (East)
(9. 7. 9. 5. 5)	11 Chicchan	3 Kayab	25 (East)
(9. 8.11. 6.12)	2 Eb	20 Ceh	28 (East)
(9. 8.19. 4. 6)	2 Cimi	14 Mol	31-32 (North)
(9. 8.18.14.11)	3 Chuen	4 Uayab	37-38 (West)
(9.10. 0. 0. 0)	1 Ahau	8 Kayab	43-44 (West)
(9.10. 7.13. 5)	4 Chicchan	13 Yax	42, 46 (West)
(9.10.10. 1. 6)	13 Cimi	4 Pax	48-49 (West)
II, East Panel			
9. 4. 0. 0. 0	13 Ahau	18 Yax	A01-A06
13.10. 3			A10-B10
(9. 3. 6. 7.17	5 Caban	0 Zotz')	
(9. 4.14.10. 4	5 Kan	12 Kayab)	
5. 7.16			D01-C02
(9. 5. 0. 0. 0)	11 Ahau	18 Zec	D05-C06
(9. 6. 0. 0. 0)	9 Ahau	3 Uayab	F04-E05
(. . . .)	13 Akbal		F06-E07
(9. 6.10. 0. 0	8 Ahau	13 Pax)	E08-F08?
(9. 6.11. 5. 1	1 Imix	4 Zip)	
1.12.19			H04-H05
(9. 6.13. 0. 0)	9 Ahau	18 Muan	H08-G09
(9. 6.18. 5.12	10 Eb	0 Uo)	
1.12. 8			I02-J02
(9. 7. 0. 0. 0)	7 Ahau	3 Kankin	J05-I06
(9. 7. 5. 0. 0)	13 Ahau	18 Ceh	I10-J10
(9. 7.10. 3. 8	9 Lamat	1 Muan)	
9.14.12			K02-L03
(9. 8. 0. 0. 0)	5 Ahau	3 Ch'en	K06-L06

(9. 8. 11. 9. 10 1. 8. 10)	8 Oc	18 Muan)	L09-K10
(9. 8. 13. 0. 0)	5 Ahau	18 Zec	N01-M02
(9. 8. 17. 9. 0) 6. 14	13 Ahau	18 Mac	M07-N07 M06-N06
(9. 8. 17. 15. 14)	4 Ix	7 Uo	M09-N09
(9. 8. 19. 7. 18 10. 2)	9 Etz'nab	6 Ceh)	N11
(9. 9. 0. 0. 0)	3 Ahau	3 Zotz'	P02-O03
(9. 9. 2. 4. 8 17. 13. 12)	5 Lamat	1 Mol)	R09-Q10
(9. 10. 0. 0. 0)	1 Ahau	8 Kayab	S01-T01
TI, Middle Panel			
(9. 11. 0. 0. 0)	12 Ahau	8 Ceh	A02-B02
(9. 12. 0. 0. 0)	10 Ahau	8 Yaxkin	G01-H01
TI, West Panel			
(9. 12. 0. 0. 0)	10 Ahau	8 Yaxkin	B08-A09
(9. 13. 0. 0. 0)	8 Ahau	8 Uo	C01-D01
(10. 0. 0. 0. 0)	7 Ahau	18 Zip	C07-D07
(1. 0. 0. 0. 0. 0)	10 Ahau	13 Yaxkin	C11-D11
(9. 8. 9. 13. 0) 12. 9. 8	8 Ahau	13 Poop	E03-F03 E01-F01 (12.3.8)*
(9. 9. 2. 4. 8) 2. 4. 8	5 Lamat	1 Mol	E06-F06 E07-F07
(9. 9. 0. 0. 0)	3 Ahau	3 Zotz'	E08-F08
7. 18. 2. 9. 2. 12. 1			F09-E12 (+E06-F06)
6. 19. 19. 10. 7	1 Manik	10 Zec	H01-G02
10. 11. 10. 5. 8			G04-H05 (+E03-F03)
1. 0. 0. 0. 0. 8	5 Lamat	1 Mol	H06-G07
(1. 0. 0. 0. 0. 0)	10 Ahau	13 Yaxkin	C11-D11
1. 0. 0. 0. 0. 8	5 Lamat	1 Mol	H10
	4 Manik	10 Zip	G11-H11
(9. 11. 0. 0. 0) 6. 16. 17	12 Ahau	8 Ceh	L08b L07-L08a
(9. 11. 6. 16. 17)	13 Caban	10 Ch'en	K11-L11
(9. 11. 0. 0. 0)	12 Ahau	8 Ceh	O04-P04
(9. 12. 0. 0. 0) 3. 6. 6	10 Ahau	(8 Yaxkin)	P05b O05-P05a
(9. 12. 3. 6. 6)	7 Cimi	19 Ceh	O07
9. 7. 11. 3. 0			P07-P08
(0. 4. 12. 3. 6)	1 Cimi	19 Pax	O10-P10
(9. 12. 3. 6. 6)	7 Cimi	19 Ceh	R01
(9. 9. 13. 0. 0) 17	3 Ahau	3 Uayab	R03-Q04 Q03

(9. 9.13. 0.17)	7 Caban	15 Poop	Q06-R06
2. 7. 6. 1			Q07-Q08
(9.12. 0. 6.18)	5 Etz'nab	6 Kankin	Q11
9.11. 2			R11-Q12a
(9.12.10. 0. 0)	9 Ahau	18 Zotz'	S01
(9.12. 7. 4.10)	7 Oc	3 Yax)	
4. 1. 8			S04-T04
(9.12.11. 5.18)	6 Etz'nab	11 Yax	T05
4. 1.10.18			T06-S07
(9. 8. 9.13. 0	8 Ahau	13 Poop)	
(9.12.11.12.10)	8 Oc	3 Kayab	T08
Palace South Façade (Catalog. 36)			
(9.11. 1.12. 8)	9 Lamat	6 Xul	A01-B01
(9.11. 1.12. 6)	7 Cimi	4 Xul	E01-F01
1.12. 6			
(9.11. 0. 0. 0)	12 Ahau	8 Ceh	K01b-L01a
TC			
12.19.13. 4. 0	8 Ahau	18 Zec	A01-B09
1. 0			B13
(12.19.13. 3. 0)	1 Ahau	18 Zotz'	A16-B16
(12.19.11.13. 0	1 Ahau	8 Muan)	*
8. 5. 0			D01-C02
(13. 0. 0. 0. 0)	4 Ahau	8 Cumku	D03-C04
1. 9. 2			D05-C06a
(0. 0. 1. 9. 2)	13 Ik	20 Mol	C09-D09
1.18. 3.12. 0			D13-C15
(1.18. 5. 3. 2)	9 Ik	15 Ceh	E01-F01
2. 1. 7.11. 2			E05-F06 (+A16-B16)
(2. 1. 0.14. 2)	9 Ik	0 Yax	E09-F09*
[2. 0. 0.10. 2	9 Ik	0 Zac	E09-F09 (DN2.1.7.6.2)]
3. 6.10.12. 2			E10-F11 (+E09-F09)
(5. 7.11. 8. 4	1 Kan	2 Cumku)	
1. 6. 7.13			F15-F16
(5. 8.17.15. 7)	11 Caban	0 Poop	Q02-P03
(8.18. 0.13. 6)	5 Cimi	14 Kayab	P04-Q04*
1. 2. 5.14	??		P06-Q06*
(8.19.15. 3. 4)	1 Kan	2 Kayab	Q08-P09*
(8.19. 6. 8. 8)	11 Lamat	6 Xul	P10-Q10
13. 3. 9			P12-Q12
(8.19.19.11.17)	2 Caban	10 Xul	P14-Q14
6. 3			P15
(9. 0. 0. 0. 0)	8 Ahau	13 Ceh	Q17-R01
(9. 1. 4. 5. 0	12 Ahau	13 Zac)	
1. 8. 1.18			R03-R04

(9. 2. 12. 6. 18)	3 Etz'nab	11 Xul	R07-S07
(9. 1. 10. 0. 0)	5 Ahau	3 Zec	R10-S10
1. 16. 7. 17			R08-R09
(9. 3. 6. 7. 17)	5 Caban	0 Zotz'	S12-R13
(9. 2. 15. 3. 8)	12 Lamat	6 Uo)	
1. 19. 6. 16			S13-S14
(9. 4. 14. 10. 4)	5 Kan	12 Kayab	R17-S17
(9. 4. 9. 0. 4)	7 Kan	17 Mol)	
2. 2. 4. 17			T01-T02
(9. 6. 11. 5. 1)	1 Imix	4 Zip	U05-T06
(9. 4. 9. 0. 4)	7 Kan	17 Mol	U10-T11
1. 1. 1			U06-T07
(9. 4. 10. 1. 5)	11 Chicchan	13 Ch'en	T14-U14
2. 8. 4. 7			U11-U12
(9. 6. 18. 5. 12)	10 Eb	0 Uo)	
19. 8. 2			T15-U15*
(9. 10. 8. 9. 3)	9 Akbal	6 Xul	G01-H01
1. 8. 17			K09-K10
(9. 10. 10. 0. 0)	13 Ahau	18 Kankin	K11
(9. 12. 11. 12. 10)	8 Oc	3 Kayab	L01-L02
6. 11. 6			O03-O04
(9. 12. 18. 5. 16)	2 Cib	14 Mol)	
TC, alfarda			
(1. 18. 5. 3. 2)	9 Ik	15 Ceh	A01-B01
7. 14. 14. 11. 10			D01-F01
(9. 12. 19. 14. 12)	5 Eb	5 Kayab	E02-F02
TC, Jamb (Catalog No. 273)			
(9. 12. 19. 14. 12)	5 Eb	5 Kayab	A01-A05
TFC			
1. 18. 5. 4. 0	1 Ahau	13 Mac	A01-B09
14. 19			B12-A13
(1. 18. 6. 0. 19)	1 Cauac	7 Yax	B13-A14*
1. 14. 14. 0			C03-D04 (+A01-B09)
(2. 0. 0. 0. 0)	2 Ahau	3 Uayab	C08-D08
(1. 18. 5. 4. 0)	1 Ahau	13 Mac	D14-C15
7. 14. 13. 1. 16			D15-D17 (7.7.7.3.16)*
(9. 12. 18. 5. 16)	2 Cib	14 Mol	L01-M01
(1)			
(9. 12. 18. 5. 17)	3 Caban	15 Mol	M05-L06
(9. 10. 2. 6. 6)	2 Cimi	19 Zotz')	
2. 9. 6. 4			M17-O01
(9. 12. 11. 12. 10)	8 Oc	3 Kayab	N05-O05
6. 11. 6			N06-O06
(9. 12. 18. 5. 16)	2 Cib	(14Mol)	N16b

1. 12. 4			O13-N14
(9. 13. 0. 0. 0)	8 Ahau	8 Uo	N15
(9. 12. 11. 12. 10)	8 Oc	3 Kayab	E01-E02
TFC, alfalda			
(1. 18. 5. 4. 0)	1 Ahau	13 Mac	A01-B01
7. 14. 14. 10. 12			D01-F01 (7.14.14.11.12)*
(9. 12. 19. 14. 12)	5 Eb	5 Kayab	E02-F02
TFC Lapida			
(9. 12. 19. 14. 12	5 Eb)	5 Kayab	-C02
1. 7. 11			C05-D05
(9. 12. 18. 7. 1)	1 Imix	19 Ch'en	D06b-C07a
3. 8			D10
(9. 13. 0. 0. 0)	8 Ahau	8 Uo	C11b-D11a
TS			
1. 18. 5. 3. 6	13 Cimi	19 Ceh	A01-B09
1. 2. 11			A13-B13
	1 Ik	10 Zec	B15-A16*
1. 18. 5. 3. 6			C07-D08
(13. 0. 0. 0. 0)	4 Ahau	8 Cumku	O02-N03
9. 12. 18. 5. 16			C14-C16
(9. 12. 18. 5. 16)	2 Cib	14 Mol	N04-O04
(1)			
(9. 12. 18. 5. 17)	3 Caban	15 Mol	O07-N08
(9. 3. 1. 15. 0)	12 Ahau	8 Ceh	P02-Q02
7. 6. 12. 3			O16-Q01
(9. 10. 8. 9. 3)	9 Akbal	6 Xul	P06-Q06
6. 2. 17			P11-Q11
(9. 10. 2. 6. 6)	2 Cimi	19 Zotz'	P12-Q12
1. 8. 17			P14-Q14a (1.8.12)*
(9. 10. 10. 0. 0)	13 Ahau	18 Kankin	Q14b-P15
(9. 10. 8. 9. 3)	9 Akbal	6 Xul	E01-F01
(1. 8. 17)			
(9. 10. 10. 0. 0)	13 Ahau	18 Kankin	G02-H02
(9. 12. 11. 12. 10)	8 Oc	3 Kayab	L01-M01
TS, alfalda			
(1. 18. 5. 3. 6)	13 Cimi	19 Ceh	A01-B01
(7. 14. 14. 11. 6)			D01-F01)
(9. 12. 19. 14. 12)	5 Eb	5 Kayab	E02-F02)
TXIV			
(9. 10. 3. 10. 2)	9 Ik	10 Mol	A01-B01
(9. 10. 15. 7. 10)	13 Oc	18 Uo	A05-B05
5. 18. 4. 7. 8. ? 13. 18 ??			B11-G02*
(9. 11. 1. 2. 0)	9 Ahau	3 Kankin	G05-H05*

Dumbarton Oaks Relief Panel 2

(9. 11. 0. 0. 0)	12 Ahau	8 Ceh	A02-B02
4. 7. 0			A01-B01
(9. 11. 4. 7. 0)	6 Ahau	8 Cumku	A04-B04
(9. 11. 18. 7. 7)	9 Manik	5 Muan	J01-K01

Throne

(9. 9. 2. 4. 8)	5 Lamat	1 Mol	A01-B01
3. 9. 8. 2			C01-C02
(9. 12. 11. 12. 10)	8 Oc	3 Kayab	E01-F01
(9. 13. 10. 6. 8)	5 Lamat	6 Xul	J02b-K01

Tablet of Palace (Ruz 1)

9. 10. 11. 17. 0	11 Ahau	8 Mac	A01-A18
1. 5. 18			B18-B19
(9. 10. 10. 11. 2)	1 Ik	15 Yaxkin	C01-D01
7. 0. 19			D18-C19
(9. 10. 18. 17. 19)	2 Cauac	12 Ceh	F06-E07
1. 0. 1			F15-E16
(9. 11. 0. 0. 0)	12 Ahau	8 Ceh	E17-F17
13. 0. 0			H08-G09
(9. 11. 13. 0. 0)	12 Ahau	3 Ch'en	G10-H10
18. 5. 18			I08-J08
(9. 12. 11. 8. 15)	6 Etz'nab	11 Yax	J09-I10
6. 12			J14
(9. 12. 11. 12. 10)	8 Oc	3 Kayab	K06-L06
18. 6. 15			M06-N06
(9. 13. 10. 1. 5)	6 Chicchan	3 Poop	M08-N08
1. 15			M09
(9. 13. 10. 0. 0)	7 Ahau	3 Cumku	N09-M10
5. 3			M13
(9. 13. 10. 6. 8)	5 Lamat	6 Xul	M15-N15
4. 8. 2. 0			P15-P16
(9. 9. 2. 4. 8)	5 Lamat	1 Mol	P17-O18
(9. 13. 10. 6. 8)	5 Lamat	6 Xul	R04-Q05
18. 8. 7			R02-R03
(9. 14. 8. 14. 15)	9 Men	3 Yax	Q09-Q13
(9. 10. 17. 6. 0)	1 Ahau	3 Uayab	S01-S02
2. 17. 2. 0			S05-U01
(9. 13. 14. 8. 0)	8 Ahau	18 Xul	U02-U03

Temple 18, Lapida

9. 12. 6. 5. 8	3 Lamat	6 Zac	A01-A13
1. 10. 1			A09-B09
(9. 12. 4. 13. 7)	1 Manik	10 Poop	A10-B10
14. 1. 12			B15-A16
(9. 13. 0. 7. 0)	5 Ahau	8 Ch'en	A17

<u>2. 2. 0</u>			A19-B19
(9. 13. 2. 9. 0)	11 Ahau	18 Yax	B20
<u>2. 3. 16. 14</u>			D04-D05
(9. 14. 10. 4. 2)	9 Ik	5 Kayab)	
<u>7. 14. 9. 12. 0</u>			D07-C09
(2. 0. 0. 10. 2)	9 Ik	0 Zac	C10-D10
Tablet of Slaves (Ruz 2)			
(9. 9. 2. 4. 8)	5 Lamat	1 Mol	A01
(9. 11. 18. 9. 17)	7 Caban	15 Kayab	B04
(9. 14. 10. 4. 2)	9 Ik	5 Kayab	C01
(9. 14. 11. 12. 14)	8 Ix	7 Yaxkin	D01
(9. 14. 13. 11. 2)	7 Ik	5 Zec	C03
(9. 14. 11. 17. 6)	9 Cimi	19 Zac	F01
(9. 14. 17. 12. 19)	2 Cauac	2 Xul	E03
(9. 14. 18. 1. 1)	7 Imix	4 Ceh	F04b-F05a
(9. 15. 0. 0. 0)	4 Ahau	13 Yax	G03
(9. 14. 18. 9. 8)	5 Lamat	6 Uo	F03b-G04a
(9. 14. 18. 9. 17)	1 Caban	15 Uo	G05b-F05b
Tablet of 96 Glyphs			
(9. 11. 0. 0. 0)	12 Ahau	8 Ceh	A01-B01
<u>2. 1. 11</u>			A05-B05
(9. 11. 2. 1. 11)	9 Chuen	9 Mac	B06-A07
<u>2. 8. 4. 17</u>			D02-D03
(9. 13. 10. 6. 8)	5 Lamat	6 Xul	D04-C05
<u>19. 15. 14</u>			E01-F01
(9. 14. 10. 4. 2)	9 Ik	5 Kayab	F02-E03
<u>2. 2. 14. 5</u>			F07-F08
(9. 16. 13. 0. 7)	9 Manik	15 Uo	H01-G02
<u>1. 0. 0. 0</u>			H06
(9. 17. 13. 0. 7)	7 Manik	0 Pax	H07-G08
<u>7</u>			L01
(9. 17. 13. 0. 0)	13 Ahau	13 Muan	K02-L02
IS Vase			
(9. 18. 9. 4.)4	7 Kan	(17Muan)	A01-C04
<u>1. 11. 11</u>			D04-E01
(9. 18. 7. 10. 13)	1 Ben	11 Zotz'	E02-F02

付表2 年代順に並べた日付

GREGORIAN DATE			MAYAN LONG COUNT					
WED	JUNE	14 3122 BC	12. 19. 11. 13. 0	1 Ahau	8 Muan	PAL TC		
FRI	NOV	15 3121 BC	12. 19. 13. 3. 0	1 Ahau	18 Zotz'	PAL TC	A16 B16	
THU	DEC	5 3121 BC	12. 19. 13. 4. 0	8 Ahau	18 Zec	PAL TC	A01 A09	
MON	AUG	11 3114 BC	0. 0. 0. 0. 0	4 Ahau	8 Cumku	PAL TC	D03 C04	
MON	AUG	11 3114 BC	0. 0. 0. 0. 0	4 Ahau	8 Cumku	PAL TS	O02 N03	
THU	FEB	3 3112 BC	0. 0. 1. 9. 2	13 Ik	0 Ch'en	PAL TC	C09 D09	
SUN	JUNE	21 3023 BC	0. 4. 12. 3. 6	1 Cimi	19 Pax	PAL TI W	O10 P10	
WED	JUNE	1 2379 BC	1. 17. 5. 9. 2	1 Ik	10 Zec	PAL TS	B15 A16	
FRI	SEP	7 2361 BC	1. 18. 4. 0. 15	5 Men	13 Yax	PAL TS	B15 A16	
SAT	OCT	19 2360 BC	1. 18. 5. 3. 2	9 Ik	15 Ceh	PAL TC	E01 F01	
SAT	OCT	19 2360 BC	1. 18. 5. 3. 2	9 Ik	15 Ceh	PAL TCalf	A01 B01	
WED	OCT	23 2360 BC	1. 18. 5. 3. 6	13 Cimi	19 Ceh	PAL TS	A01 B09	
WED	OCT	23 2360 BC	1. 18. 5. 3. 6	13 Cimi	19 Ceh	PAL TSalf	A01 B01	
WED	NOV	6 2360 BC	1. 18. 5. 4. 0	1 Ahau	13 Mac	PAL TFC	A01 A09	
WED	NOV	6 2360 BC	1. 18. 5. 4. 0	1 Ahau	13 Mac	PAL TFC	D14 C15	
WED	NOV	6 2360 BC	1. 18. 5. 4. 0	1 Ahau	13 Mac	PAL TFCal	A01 B01	
MON	SEP	1 2359 BC	1. 18. 6. 0. 19	1 Cauac	7 Yax	PAL TFC	B13 A14	
MON	DEC	8 2359 BC	1. 18. 6. 5. 17	8 Caban	5 Muan	PAL TS	B15 A16	
SAT	MAY	19 2327 BC	1. 19. 18. 4. 2	1 Ik	10 Zec	PAL TS	B15 A16	
SUN	FEB	16 2325 BC	2. 0. 0. 0. 0	2 Ahau	3 Uayab	PAL TFC	C08 D08	
SAT	SEP	5 2325 BC	2. 0. 0. 10. 2	9 Ik	0 Zac	PAL T 18	C10 D10	
SAT	SEP	5 2325 BC	2. 0. 0. 10. 2	9 Ik	0 Zac	PAL TC	E09 F09	
SAT	AUG	11 2305 BC	2. 1. 0. 14. 2	9 Ik	0 Yax	PAL TC		
WED	MAR	8 993 BC	5. 7. 11. 8. 4	1 Kan	2 Cumku	PAL TC		
WED	MAR	25 967 BC	5. 8. 17. 15. 17	11 Caban	0 Poop	PAL TC	Q02 P03	
SAT	MAR	29 397 AD	8. 18. 0. 13. 6	5 Cimi	14 Kayab	PAL TC	P04 Q04	
SUN	AUG	7 422 AD	8. 19. 6. 8. 8	11 Lamat	6 Xul	PAL TC	P10 Q10	
SUN	MAR	9 431 AD	8. 19. 15. 3. 4	1 Kan	2 Kayab	PAL TC	Q08 P09	
WED	AUG	8 435 AD	8. 19. 19. 11. 17	2 Caban	10 Xul	PAL TC	P14 Q14	
SUN	DEC	9 435 AD	9. 0. 0. 0. 0	8 Ahau	13 Ceh	PAL TC	Q17 R01	
THU	NOV	13 459 AD	9. 1. 4. 5. 0	12 Ahau	13 Zac	PAL TC		
SAT	JULY	4 465 AD	9. 1. 10. 0. 0	5 Ahau	3 Zec	PAL TC	R10 S10	
SUN	JULY	27 487 AD	9. 2. 12. 6. 18	3 Etz'nab	11 Xul	PAL TC	R07 S07	
TUE	MAY	2 490 AD	9. 2. 15. 3. 8	12 Lamat	6 Uo	PAL TC		
SUN	NOV	18 496 AD	9. 3. 1. 15. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL TS	P02 Q02	
FRI	JUNE	3 501 AD	9. 3. 6. 7. 17	5 Caban	0 Zotz'	PAL TC	S12 R13	
FRI	JUNE	3 501 AD	9. 3. 6. 7. 17	5 Caban	0 Zotz'	PAL TI E		
TUE	OCT	16 514 AD	9. 4. 0. 0. 0	13 Ahau	18 Yax	PAL TI E	A01 A06	
FRI	SEP	3 523 AD	9. 4. 9. 0. 4	7 Kan	17 Mol	PAL TC		
FRI	SEP	3 523 AD	9. 4. 9. 0. 4	7 Kan	17 Mol	PAL TC	U10 T11	
MON	SEP	18 524 AD	9. 4. 10. 1. 5	11 Chicchan	13 Ch'en	PAL TC	T14 U14	
WED	NOV	29 524 AD	9. 4. 10. 4. 17	5 Caban	5 Mac	PAL SACR	16	
WED	FEB	23 529 AD	9. 4. 14. 10. 4	5 Kan	12 Kayab	PAL TC	R17 S17	

WED FEB	23	529 AD	9. 4. 14. 10. 4	5 Kan	12 Kayab	PAL	TI E	
SAT JULY	3	534 AD	9. 5. 0. 0. 0	11 Ahau	18 Zec	PAL	TI E	D05 C06
WED MAR	20	554 AD	9. 6. 0. 0. 0	9 Ahau	3 Uayab	PAL	TI E	F04 E05
FRI JAN	27	564 AD	9. 6. 10. 0. 0	8 Ahau	13 Pax	PAL	TI E	E08 F08
WED FEB	6	565 AD	9. 6. 11. 0. 16	7 Cib	4 Kayab	PAL	SACR	18
THU MAY	2	565 AD	9. 6. 11. 5. 1	1 Imix	4 Zip	PAL	TC	U05 T06
THU MAY	2	565 AD	9. 6. 11. 5. 1	1 Imix	4 Zip	PAL	TI E	
SUN JAN	11	567 AD	9. 6. 13. 0. 0	9 Ahau	18 Muan	PAL	TI E	H08 G09
SAT JULY	21	570 AD	9. 6. 16. 10. 7	9 Manik	5 Yaxkin	PAL	SACR	20
MON APR	6	572 AD	9. 6. 18. 5. 12	10 Eb	0 Uo	PAL	TC	
MON APR	6	572 AD	9. 6. 18. 5. 12	10 Eb	0 Uo	PAL	TI E	
SUN DEC	5	573 AD	9. 7. 0. 0. 0	7 Ahau	3 Kankin	PAL	SACR	22 23
SUN DEC	5	573 AD	9. 7. 0. 0. 0	7 Ahau	3 Kankin	PAL	TI E	J05 I06
MON NOV	9	578 AD	9. 7. 5. 0. 0	13 Ahau	18 Ceh	PAL	TI E	I10 J10
SAT FEB	1	583 AD	9. 7. 9. 5. 5	11 Chicchan	3 Kayab	PAL	SACR	25
SUN DEC	21	583 AD	9. 7. 10. 3. 8	9 Lamat	1 Muan	PAL	TI E	
THU AUG	22	593 AD	9. 8. 0. 0. 0	5 Ahau	3 Ch'en	PAL	TI E	K06 L06
THU MAR	24	603 AD	9. 8. 9. 13. 0	8 Ahau	13 Poop	PAL	SACR	01 02
THU MAR	24	603 AD	9. 8. 9. 13. 0	8 Ahau	13 Poop	PAL	TI W	E03 F03
THU MAR	24	603 AD	9. 8. 9. 13. 0	8 Ahau	13 Poop	PAL	TI W	
THU MAR	24	603 AD	9. 8. 9. 13. 0	8 Ahau	13 Poop	PAL	HS	A01 B04
THU MAR	24	603 AD	9. 8. 9. 13. 0	8 Ahau	13 Poop	PAL	PAS	A01
MON NOV	5	604 AD	9. 8. 11. 6. 12	2 Eb	0 Mac	PAL	SACR	28
WED JAN	2	605 AD	9. 8. 11. 9. 10	8 Oc	18 Muan	PAL	TI E	
MON JUNE	16	606 AD	9. 8. 13. 0. 0	5 Ahau	18 Zec	PAL	TI E	N01 M02
THU NOV	22	610 AD	9. 8. 17. 9. 0	13 Ahau	18 Mac	PAL	TI E	M07 N07
FRI APR	5	611 AD	9. 8. 17. 15. 14	4 Ix	7 Uo	PAL	TI E	M09 N09
SAT MAR	7	612 AD	9. 8. 18. 14. 11	3 Chuen	4 Uayab	PAL	SACR	37 38
SUN AUG	9	612 AD	9. 8. 19. 4. 6	2 Cimi	14 Mol	PAL	SACR	31 32
TUE OCT	20	612 AD	9. 8. 19. 7. 18	9 Etz'nab	6 Ceh	PAL	TI E	
MON MAY	10	613 AD	9. 9. 0. 0. 0	3 Ahau	3 Zotz'	PAL	TI E	P02 O03
MON MAY	10	613 AD	9. 9. 0. 0. 0	3 Ahau	3 Zotz'	PAL	TI W	E08 F08
THU JULY	27	615 AD	9. 9. 2. 4. 8	5 Lamat	1 Mol	PAL	PT	P17 O18
THU JULY	27	615 AD	9. 9. 2. 4. 8	5 Lamat	1 Mol	PAL	SL	A1a A1b
THU JULY	27	615 AD	9. 9. 2. 4. 8	5 Lamat	1 Mol	PAL	TI E	
THU JULY	27	615 AD	9. 9. 2. 4. 8	5 Lamat	1 Mol	PAL	TI W	E06 F06
THU JULY	27	615 AD	9. 9. 2. 4. 8	5 Lamat	1 Mol	PAL	HS	B05c B05d
THU JULY	27	615 AD	9. 9. 2. 4. 8	5 Lamat	1 Mol	PAL	THRON	A01 B01
FRI MAR	3	626 AD	9. 9. 13. 0. 0	3 Ahau	3 Uayab	PAL	TI W	R03 Q04
MON MAR	20	626 AD	9. 9. 13. 0. 17	7 Caban	15 Poop	PAL	TI W	Q06 R06
FRI JAN	25	633 AD	9. 10. 0. 0. 0	1 Ahau	8 Kayab	PAL	SACR	43 44
FRI JAN	25	633 AD	9. 10. 0. 0. 0	1 Ahau	8 Kayab	PAL	TI E	S01 T01
THU MAY	21	635 AD	9. 10. 2. 6. 6	2 Cimi	19 Zotz'	PAL	TFC	
THU MAY	21	635 AD	9. 10. 2. 6. 6	2 Cimi	19 Zotz'	PAL	TS	P12 Q12
SAT JULY	30	636 AD	9. 10. 3. 10. 2	9 Ik	10 Mol	PAL	T 14	A01 B01

八杉 マヤ文字の分析 II

SAT	JULY	30	636	AD	9.10. 3.10. 2	9 Ik	10 Mol	PAL	T 14	G03 H03
TUE	JUNE	12	638	AD	9.10. 5. 8. 4	2 Kan	2 Xul	PAL	TCIn2	
THU	SEP	10	640	AD	9.10. 7.13. 5	4 Chicchan	13 Yax	PAL	SACR	42 46
TUE	JUNE	15	641	AD	9.10. 8. 9. 3	9 Akbal	6 Xul	PAL	TC	G01 H01
TUE	JUNE	15	641	AD	9.10. 8. 9. 3	9 Akbal	6 Xul	PAL	TS	P06 Q06
TUE	JUNE	15	641	AD	9.10. 8. 9. 3	9 Akbal	6 Xul	PAL	TS	E01 F01
SUN	DEC	4	642	AD	9.10.10. 0. 0	13 Ahau	18 Kankin	PAL	TC	K11
SUN	DEC	4	642	AD	9.10.10. 0. 0	13 Ahau	18 Kankin	PAL	TS	Q14b P15
SUN	DEC	4	642	AD	9.10.10. 0. 0	13 Ahau	18 Kankin	PAL	TS	G02 H02
FRI	DEC	30	642	AD	9.10.10. 1. 6	13 Cimi	4 Pax	PAL	SACR	48 49
FRI	JULY	14	643	AD	9.10.10.11. 2	1 Ik	15 Yaxkin	PAL	PT	C01 D01
SUN	NOV	3	644	AD	9.10.11.17. 0	11 Ahau	8 Mac	PAL	PT	A01 A18
WED	MAR	3	647	AD	9.10.14. 5.10	3 Oc	3 Poop	PAL	OLVID	
THU	APR	6	648	AD	9.10.15. 7.10	13 Oc	18 Uo	PAL	T 14	A05 B05
THU	APR	6	648	AD	9.10.15. 7.10	13 Oc	18 Uo	PAL	T 14	E01 F10
MON	FEB	25	650	AD	9.10.17. 6. 0	1 Ahau	3 Uayab	PAL	PT	S01 S02
FRI	OCT	17	651	AD	9.10.18.17.19	2 Cauac	12 Ceh	PAL	PT	F06 E07
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL	PT	E17 F17
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL	96G	A01 B01
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	DUM	PAN2	A02 B02
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL	TI M	A02 B02
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL	TI W	L08b
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL	TI W	O04 P04
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL	PL SF	K01b L01a
TUE	OCT	12	652	AD	9.11. 0. 0. 0	12 Ahau	8 Ceh	PAL	PL NF	A01 B01
WED	NOV	16	653	AD	9.11. 1. 2. 0	9 Ahau	3 Kankin	PAL	T 14	G05 H05
SUN	MAY	7	654	AD	9.11. 1.10.12	12 Eb	10 Zotz'	PAL	PL NF	A05
SAT	JUNE	10	654	AD	9.11. 1.12. 6	7 Cimi	4 Xul	PAL	PL SF	E01 F01
MON	JUNE	12	654	AD	9.11. 1.12. 8	9 Lamat	6 Xul	PAL	PL SF	A01 B01
SAT	AUG	26	654	AD	9.11. 1.16. 3	6 Akbal	1 Yax	PAL	HS	B06d C01a
THU	NOV	2	654	AD	9.11. 2. 1.11	9 Chuen	9 Mac	PAL	96G	B06 A07
SUN	FEB	8	657	AD	9.11. 4. 7. 0	6 Ahau	8 Cumku	DUM	PAN2	A04 B04
MON	AUG	8	659	AD	9.11. 6.16.11	7 Chuen	4 Ch'en	PAL	HS	C04b C04c
SUN	AUG	14	659	AD	9.11. 6.16.17	13 Caban	10 Ch'en	PAL	TI W	K11 L11
SAT	AUG	5	665	AD	9.11.13. 0. 0	12 Ahau	3 Ch'en	PAL	PT	G10 H10
SUN	DEC	4	670	AD	9.11.18. 7. 7	9 Manik	5 Muan	DUM	PAN2	J01 K01
MON	JAN	23	671	AD	9.11.18. 9.17	7 Caban	15 Kayab	PAL	SL	B4a B4b
SAT	JUNE	29	672	AD	9.12. 0. 0. 0	10 Ahau	8 Yaxkin	PAL	TI M	G01 H01
SAT	JUNE	29	672	AD	9.12. 0. 0. 0	10 Ahau	8 Yaxkin	PAL	TI W	B08 A09
SAT	JUNE	29	672	AD	9.12. 0. 0. 0	10 Ahau	8 Yaxkin	PAL	TI W	P05b
THU	NOV	14	672	AD	9.12. 0. 6.18	5 Etz'nab	6 Kankin	PAL	TI W	Q11
MON	OCT	18	675	AD	9.12. 3. 6. 6	7 Cimi	19 Ceh	PAL	TI W	O07
MON	OCT	18	675	AD	9.12. 3. 6. 6	7 Cimi	19 Ceh	PAL	TI W	R01
FRI	MAR	2	677	AD	9.12. 4.13. 7	1 Manik	10 Poop	PAL	T 18	A10 B10
SAT	SEP	14	678	AD	9.12. 6. 5. 8	3 Lamat	6 Zac	PAL	T 18	A01 A13

FRI	AUG	22	679	AD	9, 12, 7, 4, 10	7 Oc	3 Yax	PAL	TI W	
MON	MAY	8	682	AD	9, 12, 10, 0, 0	9 Ahau	18 Zotz'	PAL	TI W	S01
WED	AUG	29	683	AD	9, 12, 11, 5, 18	6 Etz'nab	11 Yax	PAL	PT	J09 I10
WED	AUG	29	683	AD	9, 12, 11, 5, 18	6 Etz'nab	11 Yax	PAL	SACR	04 05
WED	AUG	29	683	AD	9, 12, 11, 5, 18	6 Etz'nab	11 Yax	PAL	TI W	T05
TUE	JAN	8	684	AD	9, 12, 11, 12, 10	8 Oc	3 Kayab	PAL	PT	K06 L06
TUE	JAN	8	684	AD	9, 12, 11, 12, 10	8 Oc	3 Kayab	PAL	TC	L01 L02
TUE	JAN	8	684	AD	9, 12, 11, 12, 10	8 Oc	3 Kayab	PAL	TFC	N05 O05
TUE	JAN	8	684	AD	9, 12, 11, 12, 10	8 Oc	3 Kayab	PAL	TFC	E01 E02
TUE	JAN	8	684	AD	9, 12, 11, 12, 10	8 Oc	3 Kayab	PAL	TS	L01 M01
TUE	JAN	8	.84	AD	9, 12, 11, 12, 10	8 Oc	3 Kayab	PAL	TI W	T08
TUE	JAN	8	684	AD	9, 12, 11, 12, 10	8 Oc	3 Kayab	PAL	THRON	E01 F01
MON	JULY	21	690	AD	9, 12, 18, 5, 16	2 Cib	14 Mol	PAL	TC	
MON	JULY	21	690	AD	9, 12, 18, 5, 16	2 Cib	14 Mol	PAL	TFC	L01 M01
MON	JULY	21	690	AD	9, 12, 18, 5, 16	2 Cib	14 Mol	PAL	TFC	N16b
MON	JULY	21	690	AD	9, 12, 18, 5, 16	2 Cib	14 Mol	PAL	TS	N04 O04
TUE	JULY	22	690	AD	9, 12, 18, 5, 17	3 Caban	15 Mol	PAL	TFC	M05 L06
TUE	JULY	22	690	AD	9, 12, 18, 5, 17	3 Caban	15 Mol	PAL	TS	O07 N08
FRI	AUG	15	690	AD	9, 12, 18, 7, 1	1 Imix	19 Ch'en	PAL	TFCl a	D06b C07a
FRI	JAN	8	692	AD	9, 12, 19, 14, 12	5 Eb	5 Kayab	PAL	TFCl a	C01 C02
FRI	JAN	8	692	AD	9, 12, 19, 14, 12	5 Eb	5 Kayab	PAL	TCalf	E02 F02
FRI	JAN	8	692	AD	9, 12, 19, 14, 12	5 Eb	5 Kayab	PAL	TCjam	A01 A05
FRI	JAN	8	692	AD	9, 12, 19, 14, 12	5 Eb	5 Kayab	PAL	TFCal	E02 F02
FRI	JAN	8	692	AD	9, 12, 19, 14, 12	5 Eb	5 Kayab	PAL	PL NF	H03 G04
TUE	FEB	23	692	AD	9, 12, 19, 16, 18	12 Etz'nab	6 Poop	PAL	TFCIn	
WED	MAR	16	692	AD	9, 13, 0, 0, 0	8 Ahau	8 Uo	PAL	TFCl a	C11b D11a
WED	MAR	16	692	AD	9, 13, 0, 0, 0	8 Ahau	8 Uo	PAL	TFC	N15
WED	MAR	16	692	AD	9, 13, 0, 0, 0	8 Ahau	8 Uo	PAL	TI W	C01 D01
THU	JUNE	16	692	AD	9, 13, 0, 4, 12	9 Eb	0 Yaxkin	PAL	TFCIn	A04 A05
WED	AUG	3	692	AD	9, 13, 0, 7, 0	5 Ahau	8 Ch'en	PAL	T 18	A17
THU	JUNE	7	694	AD	9, 13, 2, 4, 13	2 Ben	11 Xul	PAL	TCIn2	A04 B04
SUN	SEP	2	694	AD	9, 13, 2, 9, 0	11 Ahau	18 Yax	PAL	T 18	B20
WED	MAR	16	698	AD	9, 13, 6, 1, 11	2 Chuen	9 Uo	PAL	TCIn2	
FRI	JAN	24	702	AD	9, 13, 10, 0, 0	7 Ahau	3 Cumku	PAL	PT	N09 M10
TUE	FEB	18	702	AD	9, 13, 10, 1, 5	6 Chicchan	3 Poop	PAL	PT	M08 N08
SUN	JUNE	1	702	AD	9, 13, 10, 6, 8	5 Lamat	6 Xul	PAL	PT	M15 N15
SUN	JUNE	1	702	AD	9, 13, 10, 6, 8	5 Lamat	6 Xul	PAL	PT	R04 Q05
SUN	JUNE	1	702	AD	9, 13, 10, 6, 8	5 Lamat	6 Xul	PAL	96G	D04 C05
SUN	JUNE	1	702	AD	9, 13, 10, 6, 8	5 Lamat	6 Xul	PAL	THRON	J02b K01
TUE	JUNE	12	706	AD	9, 13, 14, 8, 0	8 Ahau	18 Xul	PAL	PT	U02 U03
THU	AUG	12	720	AD	9, 14, 8, 14, 15	9 Men	3 Yax	PAL	PT	Q09 Q13
SUN	JAN	1	722	AD	9, 14, 10, 4, 2	9 Ik	5 Kayab	PAL	T 18	
SUN	JAN	1	722	AD	9, 14, 10, 4, 2	9 Ik	5 Kayab	PAL	96G	F02 E03
SUN	JAN	1	722	AD	9, 14, 10, 4, 2	9 Ik	5 Kayab	PAL	SL	C1a C1b
SUN	JUNE	17	723	AD	9, 14, 11, 12, 14	8 Ix	7 Yaxkin	PAL	SL	D1a D1b

八杉 マヤ文字の分析 II

MON	SEP	17	723	AD	9, 14, 11, 17, 6	9	Cimi	19	Zac	PAL	SL	F1a F1b
FRI	JULY	25	724	AD	9, 14, 12, 14, 18	9	Etz'nab	6	Ch'en	PAL	T18In	
THU	SEP	25	724	AD	9, 14, 13, 0, 0	6	Ahau	8	Ceh	PAL	T18In	A03
TUE	MAY	5	725	AD	9, 14, 13, 11, 2	7	Ik	5	Zec	PAL	SL	C3a C3b
TUE	MAY	21	729	AD	9, 14, 17, 12, 19	2	Cauac	2	Xul	PAL	SL	E3a E3b
FRI	SEP	20	729	AD	9, 14, 18, 1, 1	7	Imix	4	Ceh	PAL	SL	F4b F5a
THU	MAR	6	730	AD	9, 14, 18, 9, 8	5	Lamat	6	Uo	PAL	SL	F3b G4a
SAT	MAR	15	730	AD	9, 14, 18, 9, 17	1	Caban	15	Uo	PAL	SL	G5b F5a
THU	AUG	20	731	AD	9, 15, 0, 0, 0	4	Ahau	13	Yax	PAL	SL	G3a G3b
FRI	MAR	6	764	AD	9, 16, 13, 0, 7	9	Manik	15	Uo	PAL	96G	H01 G02
TUE	NOV	15	783	AD	9, 17, 13, 0, 0	13	Ahau	13	Muan	PAL	96G	K02 J02
TUE	NOV	22	783	AD	9, 17, 13, 0, 7	7	Manik	0	Pax	PAL	96G	H07 G08
FRI	APR	3	798	AD	9, 18, 7, 10, 13	1	Ben	11	Zotz'	PAL	ISVas	E02 F02
MON	NOV	15	799	AD	9, 18, 9, 4, 4	7	Kan	17	Muan	PAL	ISVas	A01 C04
WED	MAR	13	830	AD	10, 0, 0, 0, 0	7	Ahau	18	Zip	PAL	TI W	C07 D07

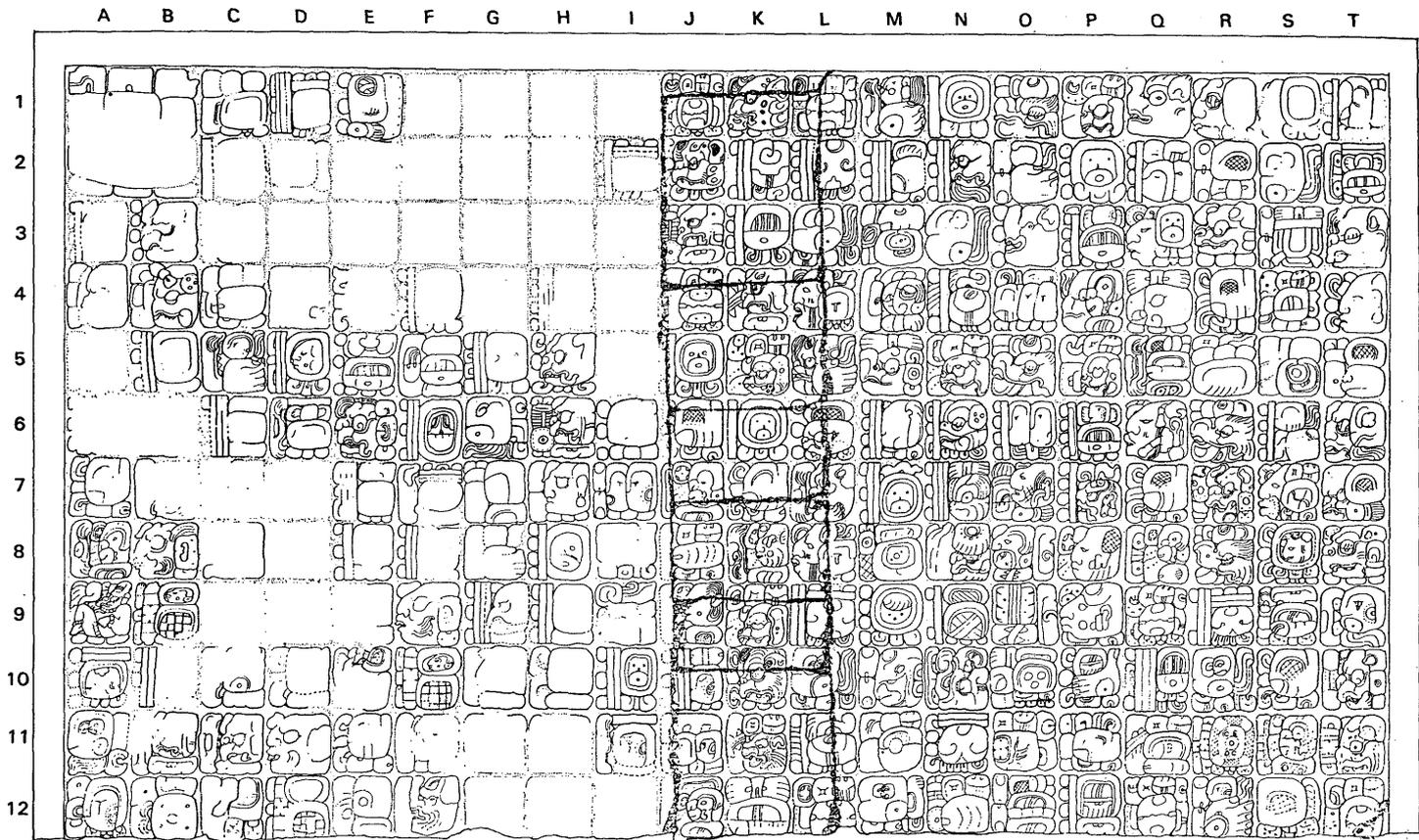
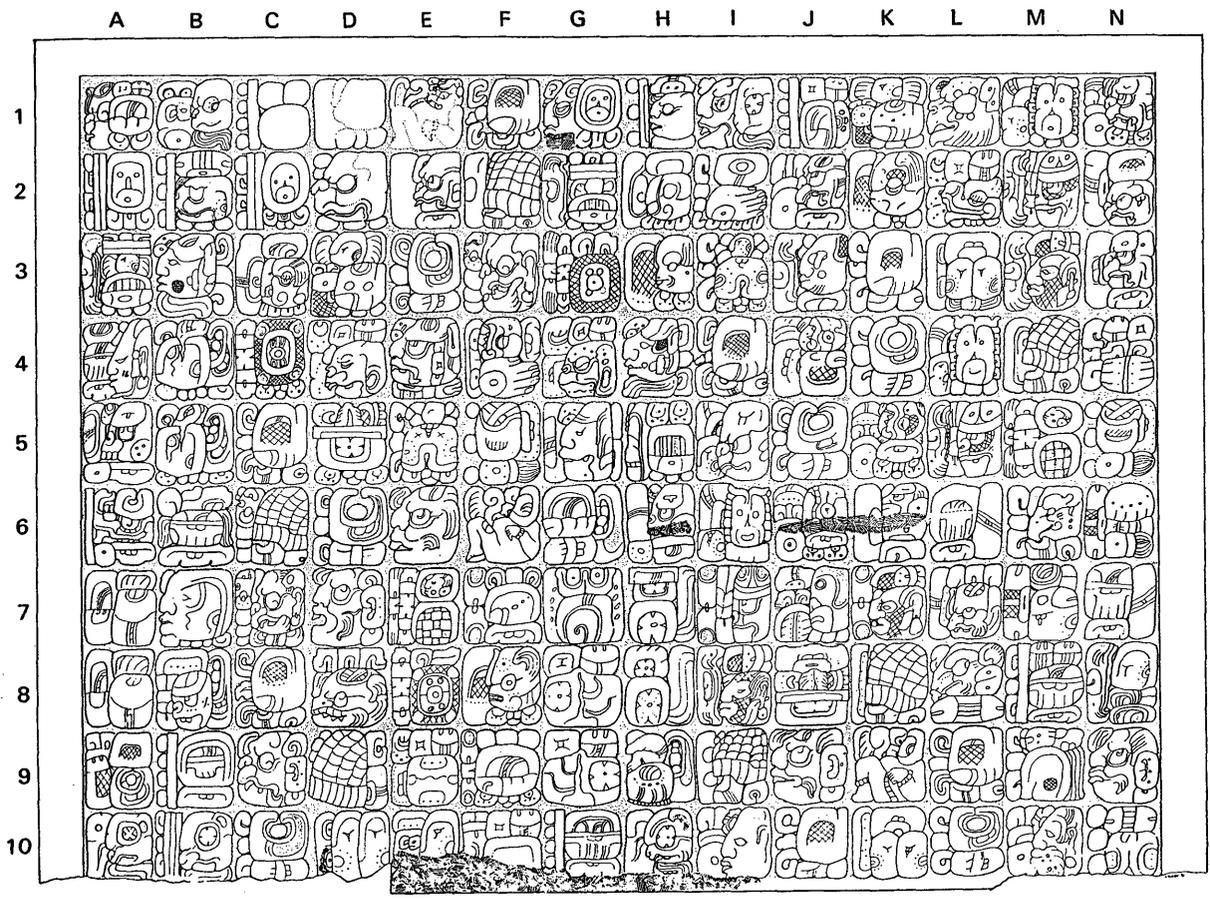
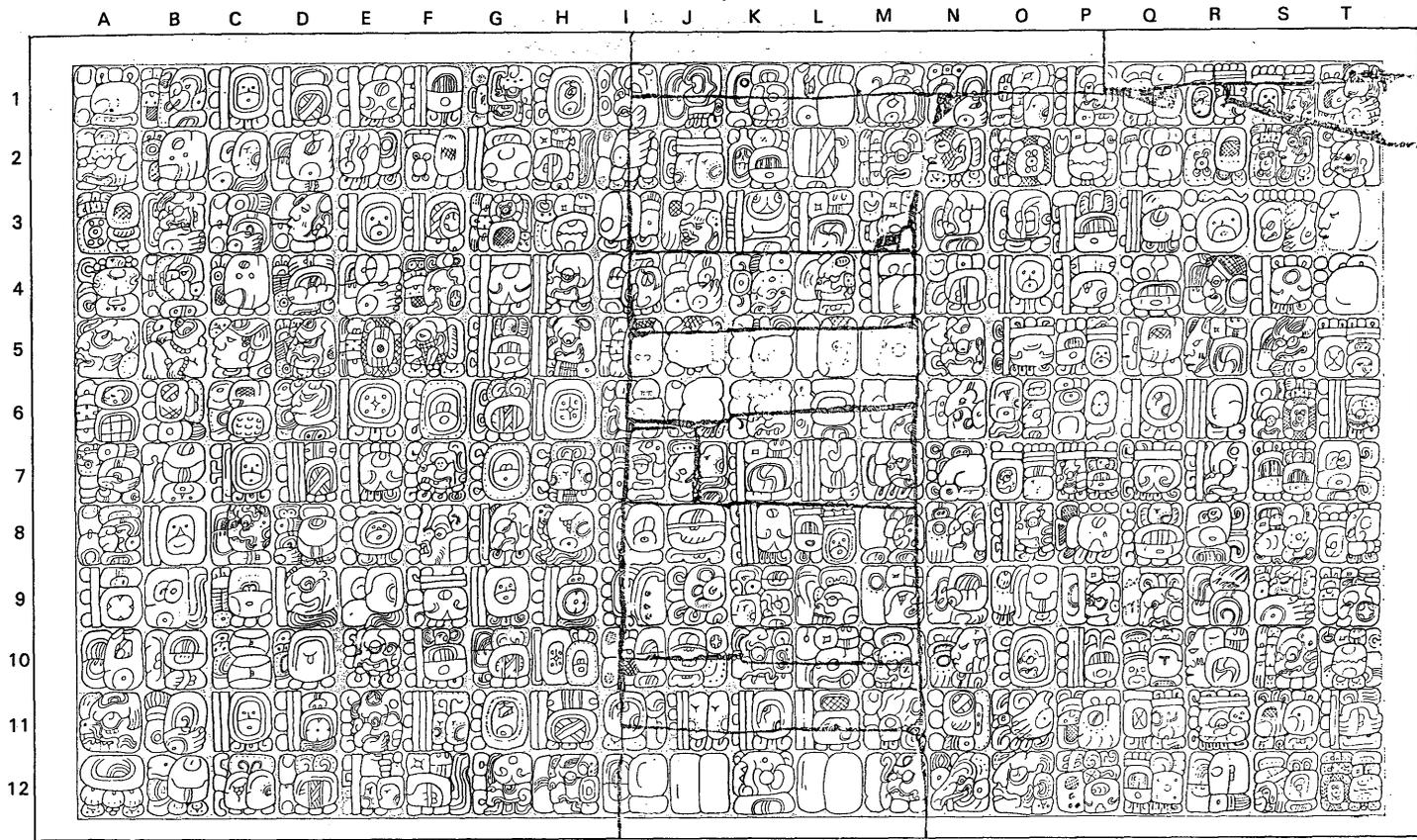


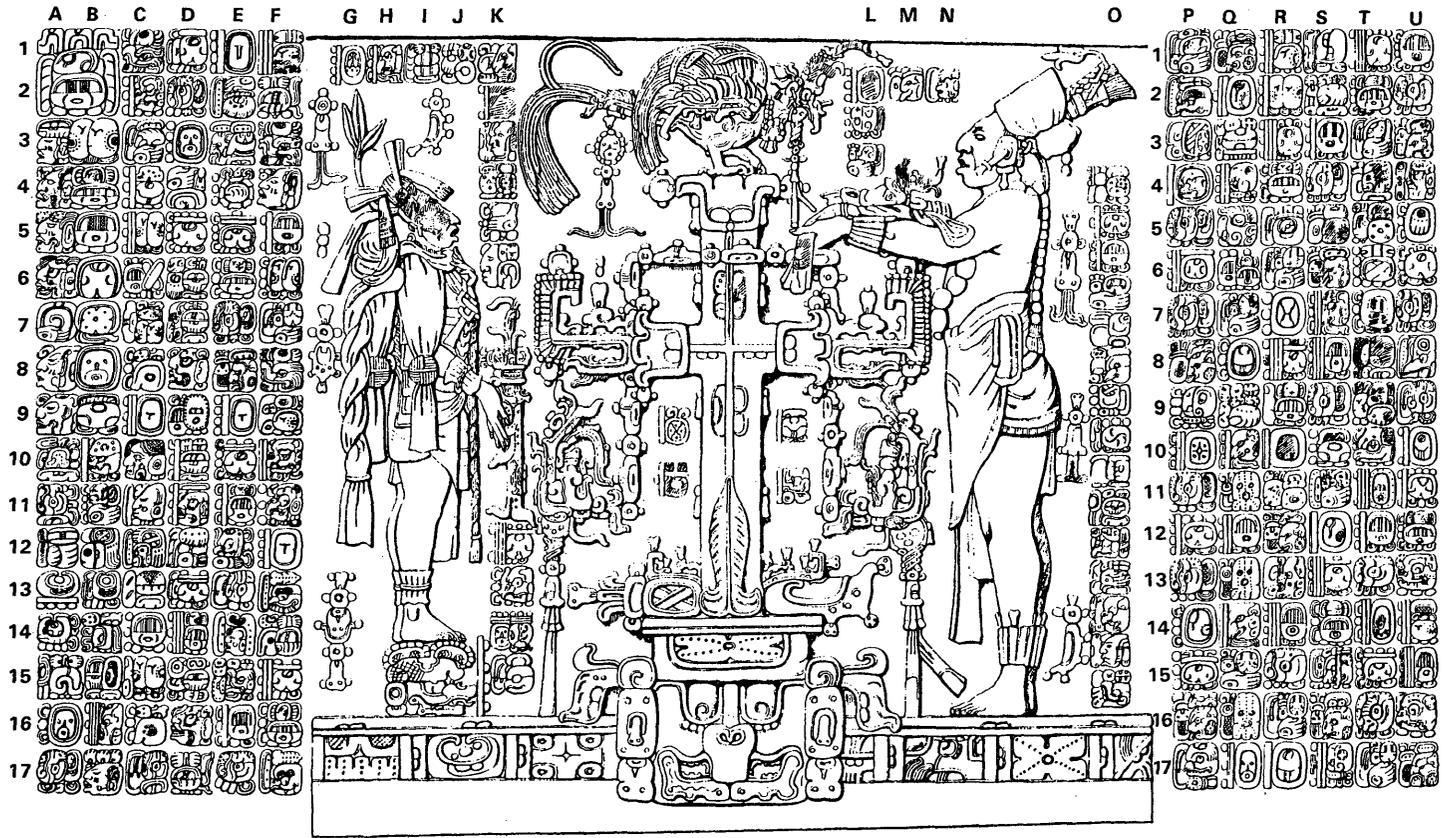
图1 East Tablet of Temple of the Inscriptions [GREENE ROBERTSON 1983: fig. 95]



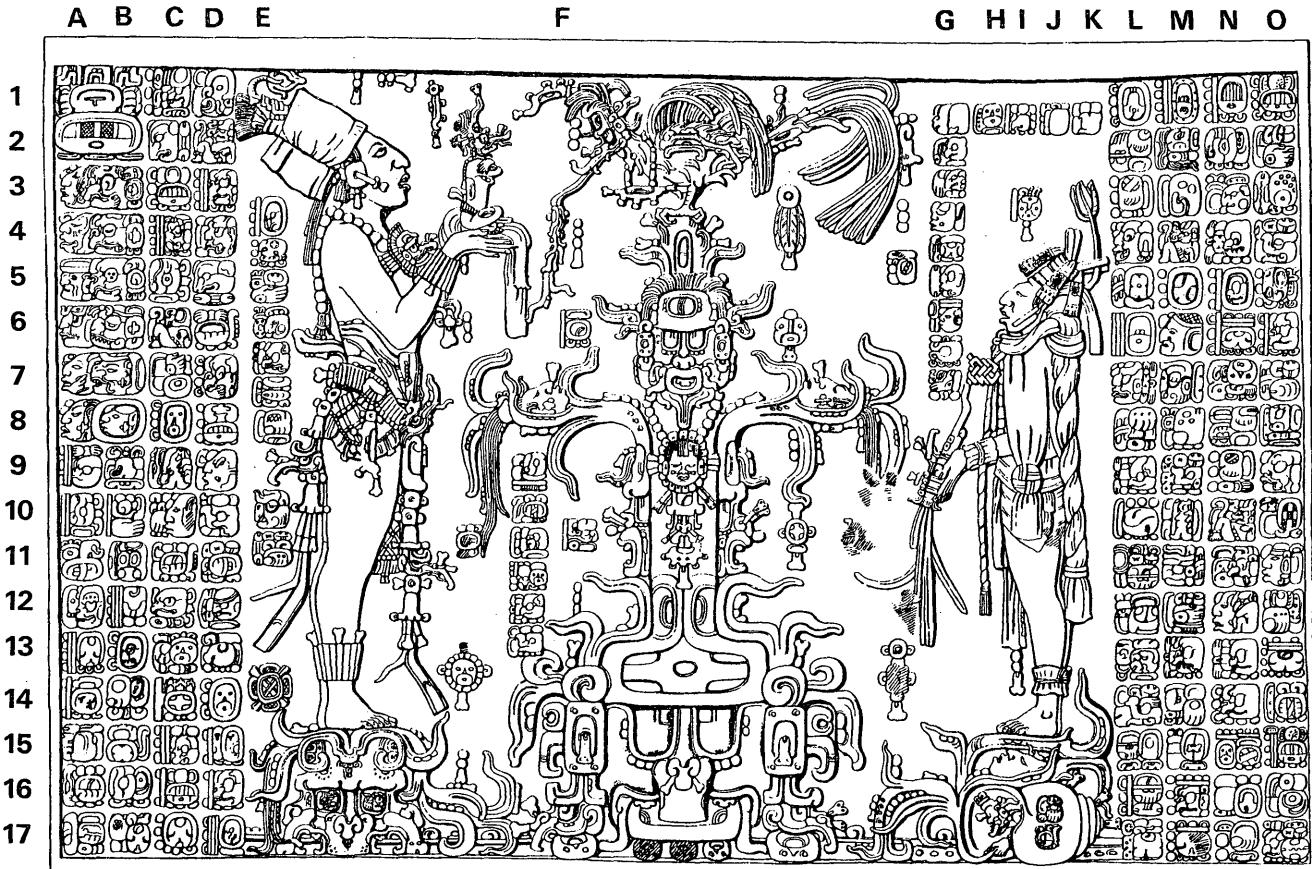
付図2 Center Tablet of Temple of the Inscriptions [GREENE ROBERTSON 1983: fig. 96]



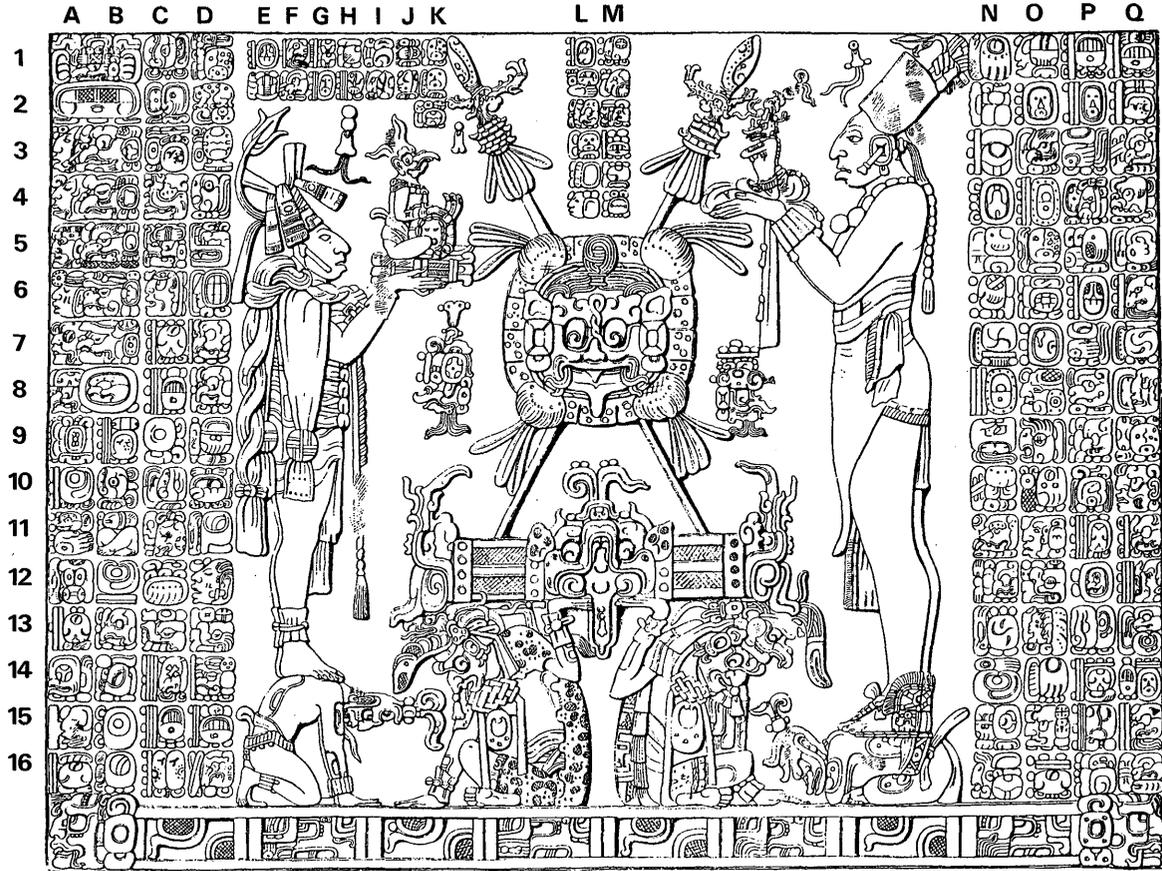
付图3 West Tablet of Temple of the Inscriptions [GREENE ROBERTSON 1983: fig. 97]



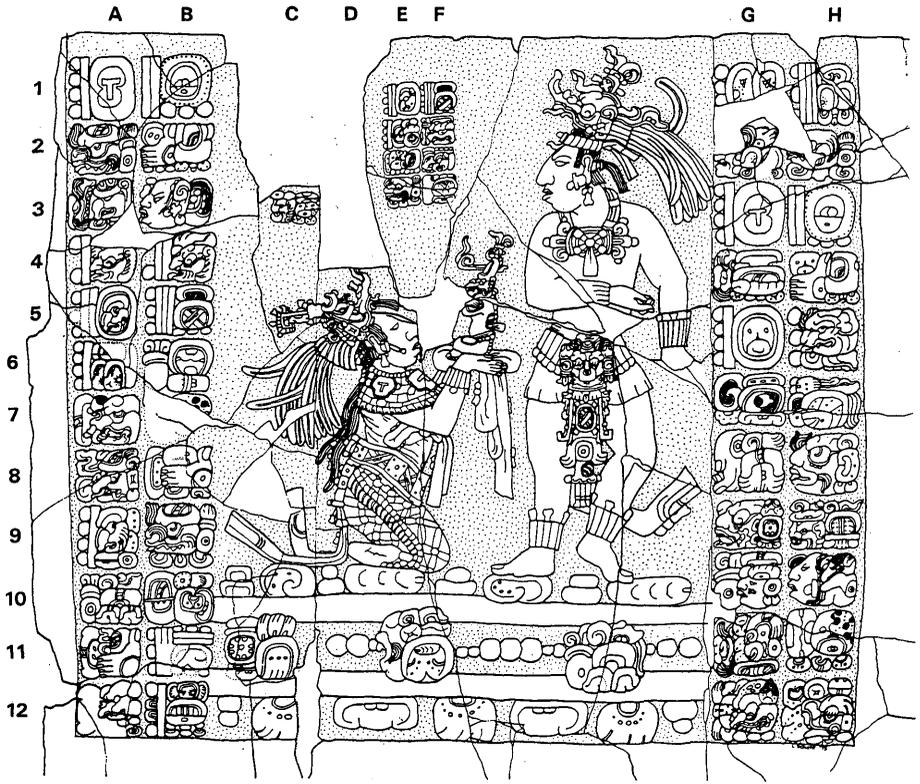
付図4 Temple of the Cross [GREENE ROBERTSON 1974: pl. 1]



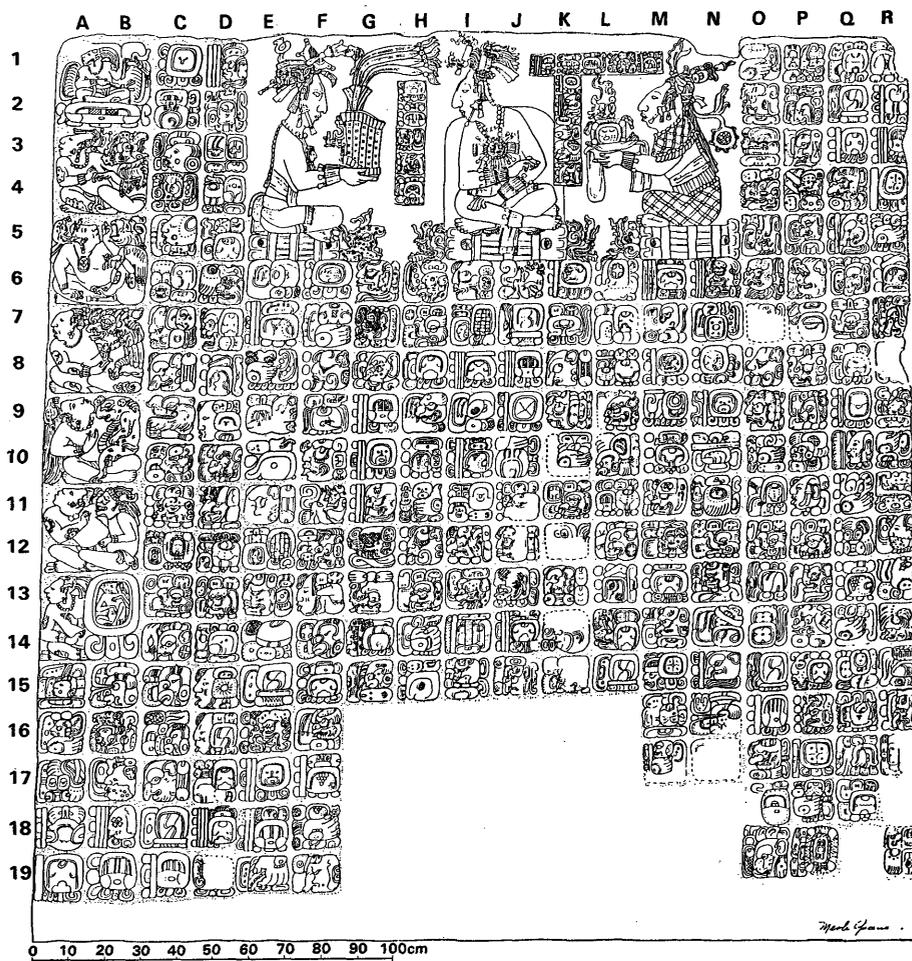
付図5 Temple of the Foliated Cross [GREENE ROBERTSON 1974: pl. 3]



付図6 Temple of the Sun [GREENE ROBERTSON 1974: pl. 2]



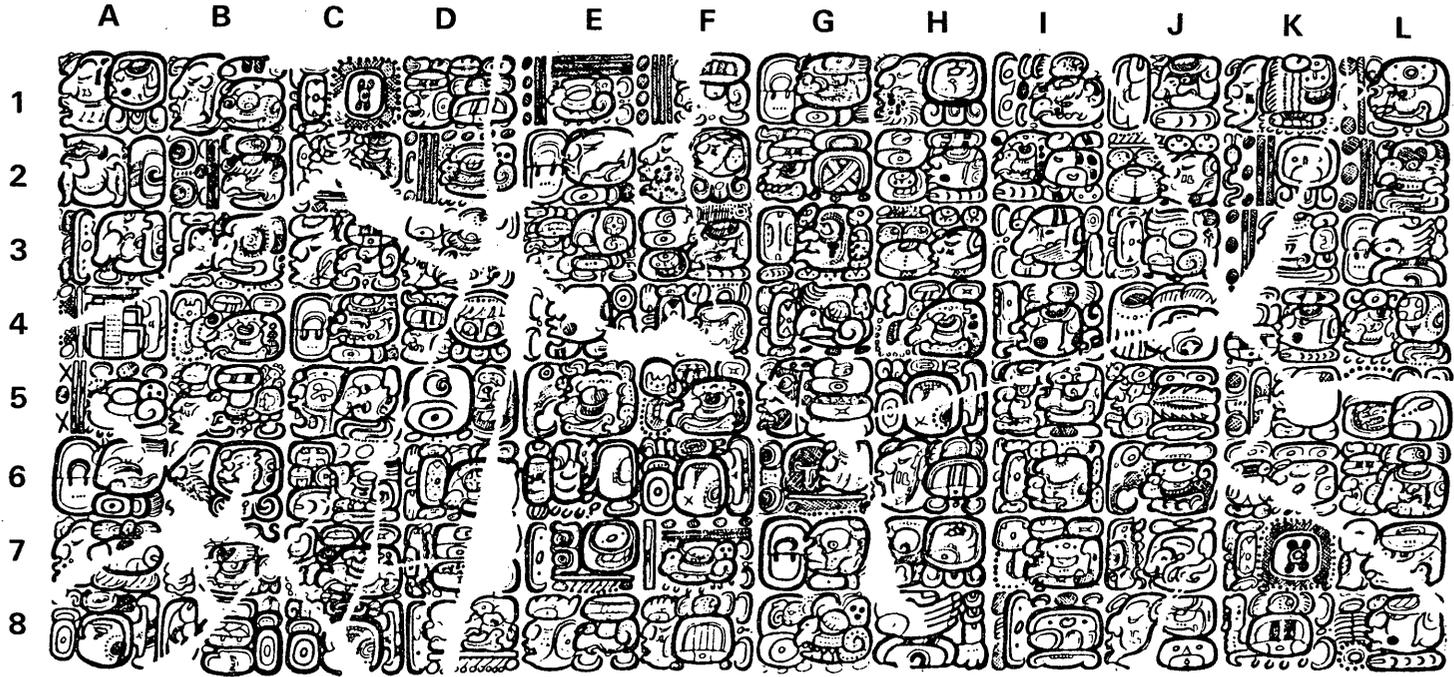
付図7 Temple XIV [FERGUSON 1977: 58]



付図8 Palace Tablet [GREENE ROBERTSON 1985b: fig. 258]



付图9 Tablet of the Slaves [MATHEWS and SCHELE 1974: fig. 11]



付図10 Tablet of the 96 Glyphs [Coe 1980: fig. 135]